

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第83集

とよ みつ おお たに
豊満大谷遺跡
の ぞえ
野添遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第83集

【豊満大谷遺跡 野添遺跡】正 誤 表

ページ・図番号	誤	正
例言 4	柳田靖子	柳田晴子
p139	クリア	クリ

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第83集

とよ みつ おお たに
豊満大谷遺跡
の ぞえ
野添遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

豊満大谷遺跡 1. 上空から豊満大谷遺跡方面を展望



豊満大谷遺跡 2. 遺跡全景



野添遺跡 1. 上空から野添遺跡方面を展望



野添遺跡 2. 遺跡全景



序

宮崎県教育委員会では、緑資源公団九州支社の委託を受け、農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設事業に伴い、豊満大谷・野添遺跡の発掘調査を行いました。

豊満大谷・野添遺跡では縄文時代・古墳時代・古代・中世の遺構・遺物が検出されました。特に当地域において、発掘調査例の少ない縄文後期から晩期にかけての遺構や遺物が豊富に出土したことは、今後、当地域の歴史を解明するうえで貴重な成果といえるでしょう。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関および地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成16年1月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良弘康

例 言

1. 本書は農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路の建設に伴い、宮崎県教育委員会が行った豊満大谷遺跡、野添遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、緑資源公団九州支社都城建設事業所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査の期間は、次のとおりである。
豊満大谷遺跡 平成13年7月24日から平成13年10月9日
野添遺跡 平成13年11月13日から平成14年2月15日
4. 現地での実測等の記録は、永友良典、玉利勇二、田中光、柳田靖子、工藤基志、古屋美樹が行った。
5. 本書に使用した写真は、永友、玉利が撮影した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として玉利が行い、整理作業員が補助した。
7. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成し、調査範囲図は、都城市作成の5千分の1図、1万分の1図を基に作成した。
8. 土層断面および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書で使用した方位は、座標化（G. N.）および磁北（M. N.）である。レベルは海抜絶対高である。
10. 本書では、遺構に次の略号を使用している。
堅穴住居跡 …… SA 掘立柱建物跡 …… SB 土坑 …… SC
道路状遺構 …… SG 溝上遺構 …… SE
遺構番号の先頭に付したアルファベットについては、それぞれの時代ごとに異なり、「J」が縄文時代、「K」が古墳時代、「T」が中世に帰属するものであることを示している。
11. 本書の執筆は第1章第1節を県教育庁文化課の飯田博之、第IV章第3節6を岩永哲夫が担当し、そのほかを玉利が担当した。編集は玉利が担当した。
12. 出土遺物、その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第Ⅱ章	豊満大谷・野添遺跡の立地と環境	2
第Ⅲ章	豊満大谷遺跡の調査	
第1節	調査の概要	5
第2節	基本層序	5
第3節	調査の記録	8
1	縄文時代の遺構と遺物	
(1)	土坑	8
(2)	石囲い炉	8
(3)	包含層出土の遺物	13
2	弥生時代から中世の遺構と遺物	
(1)	竪穴住居跡	26
(2)	掘立柱建物跡	31
(3)	集石状遺構	31
(4)	土坑	34
(5)	溝状遺構	39
(6)	畝状遺構	42
(7)	包含層出土の遺物	44
3	近世から近代の遺構と遺物	
(1)	道路状遺構・溝状遺構	54
(2)	包含層出土の遺物	54
4	石器	58
第4節	総括	66
1	縄文時代の遺構と遺物	66
2	弥生時代から中世の遺構と遺物	66
3	近世から近代の遺構と遺物	69
第Ⅳ章	野添遺跡の調査	
第1節	調査の概要	79
第2節	基本層序	79
第3節	調査の記録	82
1	縄文時代の遺構と遺物	

(1) 竪穴住居跡	82
(2) 土坑	92
(3) 包含層出土の遺物	99
2 古墳時代の遺構と遺物	
(1) 竪穴住居跡	107
(2) 土壙墓	111
(3) 包含層出土の遺物	118
3 古代の遺物	
(1) 包含層出土の遺物	120
4 中世から近世の遺構と遺物	
(1) 土壙墓	122
(2) 土坑	122
(3) 溝状遺構	125
(4) 道路状遺構	125
(5) 包含層出土の遺物	130
5 石器	132
6 付. 植物遺存体の取り上げ	139
第4節 総括	
1 縄文時代の遺構と遺物について	142
2 古墳時代の遺構と遺物について	143
3 古代及び中・近世の遺構と遺物について	143

挿 図 目 次

豊満大谷遺跡 挿図目次

第1図 豊満大谷遺跡・野添遺跡位置図	3
第2図 豊満大谷遺跡・周辺地形図	4
第3図 豊満大谷遺跡 グリッド配置図	5
第4図 豊満大谷遺跡 基本土層柱状図	6
第5図 豊満大谷遺跡 土層断面実測図	7
第6図 豊満大谷遺跡 縄文時代の遺構分布図	9
第7図 豊満大谷遺跡 3号土坑実測図	10
第8図 豊満大谷遺跡 石囲い炉遺構実測図	11
第9図 豊満大谷遺跡 石囲い炉出土土器実測図	12
第10図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(1)	15
第11図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(2)	16
第12図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(3)	17
第13図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(4)	18

第14図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(5)	19
第15図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(6)	20
第16図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(7)	21
第17図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(8)	22
第18図	豊満大谷遺跡	古代から中世の遺構分布図	27
第19図	豊満大谷遺跡	1号竪穴住居跡実測図	28
第20図	豊満大谷遺跡	1号竪穴住居跡出土土器実測図(1)	29
第21図	豊満大谷遺跡	1号竪穴住居跡出土土器実測図(2)	30
第22図	豊満大谷遺跡	1号竪穴柱礎物実測図	31
第23図	豊満大谷遺跡	1号集石状遺構実測図	32
第24図	豊満大谷遺跡	1号集石状遺構出土土器実測図	33
第25図	豊満大谷遺跡	1号土坑実測図	34
第26図	豊満大谷遺跡	2号土坑実測図	35
第27図	豊満大谷遺跡	4号・5号土坑実測図	36
第28図	豊満大谷遺跡	6号・7号土坑実測図	37
第29図	豊満大谷遺跡	1号・2号・6号土坑出土土器実測図(1)	38
第30図	豊満大谷遺跡	6号土坑出土土器実測図(2)	39
第31図	豊満大谷遺跡	1号・2号・3号溝状遺構・竪状遺構実測図及び土層断面実測図	40
第32図	豊満大谷遺跡	4号・5号・6号溝状遺構実測図及び土層断面実測図	41
第33図	豊満大谷遺跡	7号溝状遺構実測図	43
第34図	豊満大谷遺跡	8号・9号溝状遺構実測図	43
第35図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(1)	44
第36図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(2)	45
第37図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(3)	47
第38図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(4)	48
第39図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(5)	49
第40図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(6)	50
第41図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(7)	51
第42図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(8)	52
第43図	豊満大谷遺跡	包含層出土土器実測図(9)	53
第44図	豊満大谷遺跡	古銭・土製品実測図	54
第45図	豊満大谷遺跡	近世から近代の遺構分布図	55
第46図	豊満大谷遺跡	1号道路状遺構実測図及び土層断面図	56
第47図	豊満大谷遺跡	8号溝状遺構実測図	57
第48図	豊満大谷遺跡	石器実測図(1)	58
第49図	豊満大谷遺跡	石器実測図(2)	59
第50図	豊満大谷遺跡	石器実測図(3)	60

野添遺跡 挿図目次

第1図	野添遺跡	周辺地形図	80
第2図	野添遺跡	グリッド配置図および基本土層柱状図	81
第3図	野添遺跡	縄文時代の遺構分布図	83
第4図	野添遺跡	J1号竪穴住居跡実測図	85
第5図	野添遺跡	J2号竪穴住居跡実測図	87
第6図	野添遺跡	J3号竪穴住居跡実測図	89
第7図	野添遺跡	J4号竪穴住居跡実測図	90
第8図	野添遺跡	J5号・J6号竪穴住居跡実測図	91
第9図	野添遺跡	J1号土坑実測図	92
第10図	野添遺跡	J7号・K2号竪穴住居跡、K1号土墳墓実測図	93
第11図	野添遺跡	J1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	94
第12図	野添遺跡	J1号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	95
第13図	野添遺跡	J2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	95
第14図	野添遺跡	J2号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	96
第15図	野添遺跡	J3号竪穴住居跡出土遺物実測図	97
第16図	野添遺跡	J4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)	97
第17図	野添遺跡	J4号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)	98
第18図	野添遺跡	J5号竪穴住居跡出土遺物実測図	98
第19図	野添遺跡	J7号竪穴住居跡、J1号土坑出土遺物実測図	99
第20図	野添遺跡	包含層出土土器実測図(1)	100
第21図	野添遺跡	包含層出土土器実測図(2)	101
第22図	野添遺跡	包含層出土土器実測図(3)	102
第23図	野添遺跡	包含層出土土器実測図(4)	103
第24図	野添遺跡	古墳時代の遺構分布図	108
第25図	野添遺跡	K1号竪穴住居跡実測図	110
第26図	野添遺跡	K3号竪穴住居跡実測図	111
第27図	野添遺跡	K1号土墳墓実測図	112
第28図	野添遺跡	K1号竪穴住居跡出土土器実測図(1)	113
第29図	野添遺跡	K1号竪穴住居跡出土土器実測図(2)	114
第30図	野添遺跡	K1号竪穴住居跡出土土器実測図(3)	115
第31図	野添遺跡	K1号竪穴住居跡出土土器実測図(4)	116
第32図	野添遺跡	K1号土墳墓出土遺物実測図(1)	116
第33図	野添遺跡	K1号土墳墓出土遺物実測図(2)	117
第34図	野添遺跡	K1号土墳墓出土遺物実測図(3)	118
第35図	野添遺跡	包含層(古墳時代)出土土器実測図	119
第36図	野添遺跡	包含層(古代)出土土器実測図	121
第37図	野添遺跡	中世から近世の遺構分布図	123

第38区	野添遺跡	T 1号・T 2号土壇墓、T 1号土坑実測図	124
第39区	野添遺跡	T 2号土坑実測図	126
第40区	野添遺跡	1号・2号溝状遺構実測図及び土層断面図	127
第41区	野添遺跡	1号道路状遺構実測図及び土層断面図	128
第42区	野添遺跡	2号道路状遺構実測図	129
第43区	野添遺跡	T 1号土壇墓出土土器実測図	130
第44区	野添遺跡	T 2号土壇墓出土土器実測図	130
第45区	野添遺跡	T 1号土坑出土土器実測図	130
第46区	野添遺跡	包含層(中世～近世)出土土器実測図	131
第47区	野添遺跡	石器実測図(1)	132
第48区	野添遺跡	石器実測図(2)	133
第49区	野添遺跡	石器実測図(3)	134

表 目 次

豊満大谷遺跡 表目次

第1区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(1)	23
第2区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(2)	24
第3区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(3)	25
第4区	豊満大谷遺跡	出土土器及び古銭・土製品計測表	59
第5区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(1)	61
第6区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(2)	62
第7区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(3)	63
第8区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(4)	64
第9区	豊満大谷遺跡	出土土器観察表(5)	65

野添遺跡 表目次

第1区	野添遺跡	出土土器観察表：縄文時代(1)	104
第2区	野添遺跡	出土土器観察表：縄文時代(2)	105
第3区	野添遺跡	出土土器観察表：縄文時代(3)	106
第4区	野添遺跡	石器計測表	134
第5区	野添遺跡	出土土器観察表(1)	135
第6区	野添遺跡	出土土器観察表(2)	136
第7区	野添遺跡	出土土器観察表(3)	137
第8区	野添遺跡	出土土器観察表(4)	138
第9区	野添遺跡	縄文住居跡出土炭化種子一覧(参考資料)	140

図 版 目 次

豊満大谷遺跡 図版目次

巻頭 1	豊満大谷遺跡	上空から豊満大谷遺跡方面を展望、遺跡全景	
図版 1	豊満大谷遺跡	石囲い炉・集石状遺構・1号竪穴住居跡・1号土坑検出状況	71
図版 2	豊満大谷遺跡	4号・5号土坑、A区溝状遺構、畝状遺構、5号・10号溝状遺構	72
図版 3	豊満大谷遺跡	出土土器	73
図版 4	豊満大谷遺跡	出土土器	74
図版 5	豊満大谷遺跡	出土土器	75
図版 6	豊満大谷遺跡	出土土器	76
図版 7	豊満大谷遺跡	出土土器	77
図版 8	豊満大谷遺跡	出土土器	78

野添遺跡 図版目次

巻頭 2	野添遺跡	上空から野添遺跡方面を展望、遺跡全景	
図版 1	野添遺跡	縄文住居跡出土炭化種子顕微鏡写真	141
図版 2	野添遺跡	J 1号・J 2号竪穴住居跡検出状況	146
図版 3	野添遺跡	J 3号・J 7号・K 2号竪穴住居跡、K 1号土墳墓完掘状況	147
図版 4	野添遺跡	K 1号・T 1号土墳墓検出状況、K 1号竪穴住居跡完掘状況	148
図版 5	野添遺跡	T 1号土墳墓・K 1号竪穴住居跡土器検出状況、T 2号土坑・T 2号土墳墓・ 1号道路状遺構完掘状況	149
図版 6	野添遺跡	出土土器	150
図版 7	野添遺跡	出土土器	151
図版 8	野添遺跡	出土土器	152
図版 9	野添遺跡	出土土器	153
図版 10	野添遺跡	出土土器	154
図版 11	野添遺跡	出土土器	155

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

緑資料公団（旧農用地整備公団）では、都城地区の農業生産性の向上と安定を目的とする圃場整備事業（204ha）と農産物流通の迅速化を図るための農業用道路整備事業（総延長19.1km）を核とする農用地総合整備事業を計画した。そこで事業に先立ち、県文化課に九州農政局南部九州土地改良調査管理事務所長より事業予定地内の埋蔵文化財の有無の照会があった。それを受けて県文化課は、平成6年3月に予定地内に33の遺跡と試掘調査が必要な29箇所が存在することを回答した。以後、その回答に基づき埋蔵文化財の保護、発掘調査面積の平準化、調査員の確保などについて継続的に協議した結果、現状保存が困難な部分については発掘調査を行い記録保存の措置をとることになり、平成9年度に母智丘谷遺跡から発掘調査を開始した。

今回報告する豊満大谷遺跡と野添遺跡は、農業用道路建設予定地の7工区に位置し、周知の遺跡である王子原遺跡などに隣接することから遺構・遺物の存在が確実視された。そこで県文化課が確認調査を行った結果（豊満大谷遺跡：平成12年5月24～31日、野添遺跡：平成12年10月30～31日）、設定した各トレンチにおいて検出状況や出土量に差異はあるものの遺構・遺物を確認した。両遺跡とも設定したトレンチから縄文時代後期の土器や中世の土師器類が出土したことから、本調査を実施する運びとなった。

調査は緑資源公団都城建設事務所長の依頼により宮崎県埋蔵文化財センターが、豊満大谷遺跡を平成13年7月24日～平成13年10月9日、野添遺跡を平成13年11月13日～平成14年2月15日の期間でそれぞれ実施した。

第2節 調査の組織

豊満大谷遺跡・野添遺跡 発掘調査（平成13年度）

宮崎県埋蔵文化センター

所	長	矢野 剛
副所長兼総務課長		菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長		岩永 哲夫
総務課総務係長		亀井 維子
調査第二課調査第四係長		永友 良典
同 主 査		玉利 勇二
同 調査員（嘱託）		工藤 基志（豊満大谷遺跡調査担当）

豊満大谷遺跡・野添遺跡 整理および報告書作成（平成14年度～平成15年度）

宮崎県埋蔵文化センター

所	長	米良 弘康
副所長兼総務課長		大 藪 和博
副所長兼調査第二課長		岩永 哲夫
総務課総務係長		野邊 文博（平成14年）石川 恵史（平成15年）
調査第二課調査第四係長		永友 良典（平成14年）近藤 協（平成15年）
同 主 査		玉利 勇二

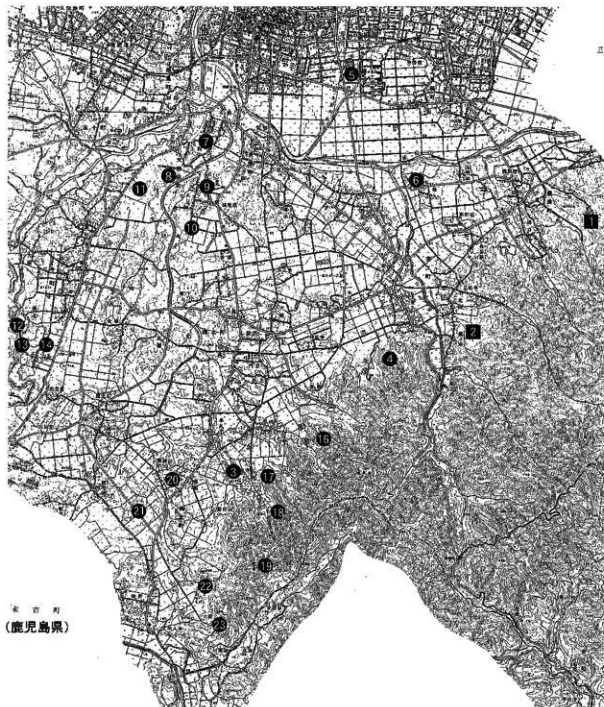
第二章 豊満大谷・野添遺跡の立地と環境

都城市は宮崎県西南端の鹿児島県境に接した位置にあり、東側を霧島山系、西側を瓶台山や白鹿岳などの山地や高千穂峰をはじめとする霧島山系に囲まれた盆地の中央部に位置する。盆地の北西側と南側には洪積層といわれる台地や段丘が残っているが、シラスとよばれる入戸火砕流やその上層の火山灰などからなる特殊な土壌であり、水利の便に乏しく、畑地や原野が大部分を占める。盆地の中央から東は、北に向かって流れる大淀川に支流河川の沖水川・萩原川・梅北川・横市川・庄内川・丸谷川などが流れ込み、その周辺に広大な沖積低地が発達して水田が多い。豊満大谷遺跡（第1図-1：都城市豊満町字大谷）と野添遺跡（第1図-2：都城市安久町字前畑）は市域南西部の豊満町・安久町に所在し、都城盆地南部を西流する萩原川左岸の金御岳（標高472m）から派生する標高約190mの丘陵裾台地上に位置する。

両遺跡周辺の遺跡の時代を追って概観してみると、旧石器時代では両遺跡北西部を北流する梅北川左岸に細石刃石器群が確認された大岩田上村遺跡（第1図-8）が位置する。縄文時代早期では大淀川と梅北川に挟まれた台地上の宮尾・立野遺跡（第1図-11）で斜縄文を施した深鉢形の土器が出土し、五十市式土器として市の有形文化財に指定され、萩原川左岸の天ヶ淵遺跡（第1図-6）でも早期の土器が出土している。梅北川上流の緩毛原第2遺跡（第1図-21）では前期～中期の土器、大岩田上村遺跡や隣接する大岩田村ノ前遺跡（第1図-7）、梅北川を挟んだ台地上の横尾原遺跡（第1図-10）、黒土遺跡（第1図-9）、嫁坂遺跡（第1図-20）、王子原遺跡（第1図-4）、梅北佐土原遺跡（第1図-3）などでは後期～晩期を中心とした遺物や住居跡が出土している。とくに、黒土遺跡では胎土に炭化珪を含んだ晩期末の浅鉢形土器などの珪痕土器、擦切りの石廂丁などが発見され、南九州の稲作開始に新たな資料を提供している。弥生時代～古墳時代の遺跡としては、黒土遺跡、大岩田村ノ前遺跡、市街地南東部の上ノ園第2遺跡（第1図-5）、鹿児島県に隣接した大淀川右岸の坂ノ下遺跡（第1図-12）、梅北川上流の段丘上に位置する大浦遺跡（第1図-22）など堅穴住居跡を検出した遺跡があげられる。中世～近世では、溝状遺構や道路状遺構を検出した大岩田村ノ前遺跡、大岩田上村遺跡、黒土遺跡、水田跡や畠跡を検出した天ヶ淵遺跡、鷺尾遺跡（第1図-13）、嫁坂遺跡、天ヶ淵遺跡の後背丘陵地に位置する中世城郭の六ヶ城、池平城、中世の砦跡といわれる天ヶ峯陣跡（第1図-19）、金御岳遺跡（第1図-15）、寺院跡の西生寺跡（第1図-17：古代、近世）、千手院跡（第1図-23）、勝軍院跡（第1図-16）、近世の道標である国指定史跡今町一里塚（第1図-14）など、多くの遺跡が確認されている。

【参考・引用文献】

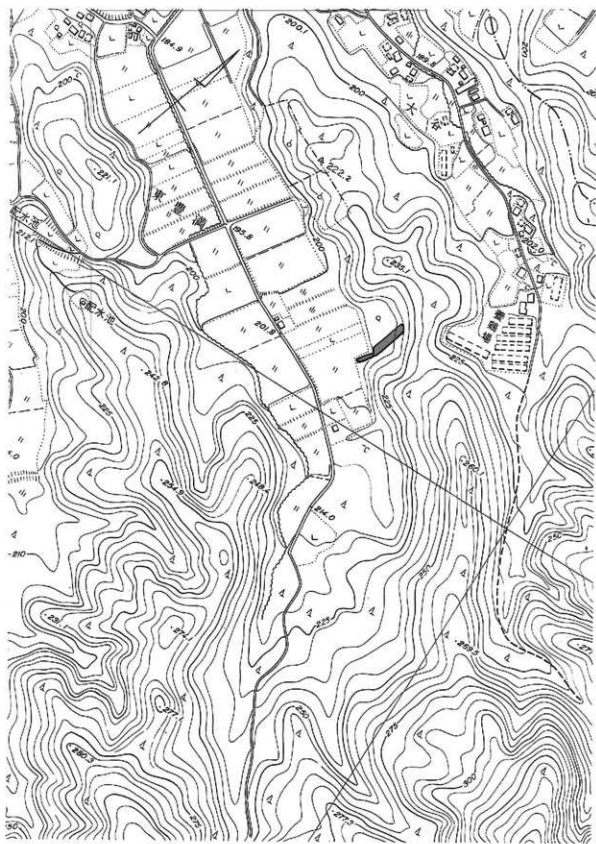
- 『宮崎県史』資料編 考古 I 宮崎県史刊行会 1989
- 『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』『都城市文化財調査報告書』第6集 都城市教育委員会 1987
- 『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』『都城市文化財調査報告書』第14集 都城市教育委員会 1991
- 『黒土遺跡』『都城市文化財調査報告書』第28集 都城市教育委員会 1994
- 『天ヶ淵遺跡』『都城市文化財調査報告書』第33集 都城市教育委員会 1995
- 『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・養原遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第42集 2001
- 『王子原遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集 2001



鹿児島県
(鹿児島県)

- | | | | |
|---------------|---------------|-------------|------------|
| 1. 豊満大谷遺跡 | 2. 野添遺跡 | 3. 梅北佐土原遺跡 | 4. 王子原遺跡 |
| 5. 上の園第2遺跡 | 6. 天ヶ洞遺跡 | 7. 大岩田村ノ前遺跡 | 8. 大岩田上村遺跡 |
| 9. 黒土遺跡 | 10. 横尾原遺跡 | 11. 宮尾・立野遺跡 | 12. 坂ノ下遺跡 |
| 13. 鞠尾遺跡 | 14. 今町一里塚 | 15. 金御岳遺跡 | 16. 勝軍院跡 |
| 17. 西生寺院 (近世) | 18. 西生寺跡 (平安) | 19. 天ヶ峯陣跡 | 20. 縁坂遺跡 |
| 21. 緩和毛原第2遺跡 | 22. 人浦遺跡 | 23. 千手院跡 | |

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2圖 豐滿大谷遺跡周辺地形圖 (1/5,000)

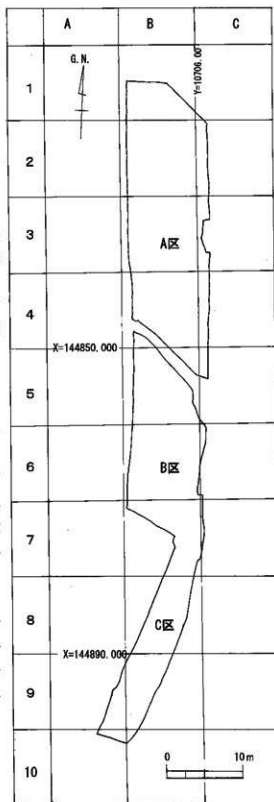
第三章 豊満大谷遺跡の調査

第1節 調査の概要

豊満大谷遺跡の発掘調査は農業用道路建設部分である約1,100㎡について実施した。調査ではまず試掘により調査区全体の遺物包含層の確認を行った後、畑境を基準に便宜的に調査区を北からA・B・Cと3分し、平成13年7月24日にA区・B区同時に本調査を開始した。調査区全体は、丘陵の尾根筋であったところを過去に開墾したと考えられ、各区はいずれも上部が攪乱されている状態であった。特に、C区は攪乱の状況がひどく、そのためまずC区を排土置き場に設定した。

調査方法は遺物包含層（Ⅱa層）まで重機により慎重に掘り進め、遺物が多く出土し始めたところで重機を止めた。以後は、包含層を手作業によって掘り下げ、第四層で遺構を検出した。遺物は主に第Ⅱc層からⅣ層にかけて出土するが、第四層からの検出遺構は竪穴住居跡1軒（SA1）、掘立柱建物跡1棟（SB1）土坑4基（SC4・5・6・7）、集石状遺構1基、溝状遺構8条（SE1・2・3・4・5・6・7・8）、畝状遺構、道路状遺構1条（SG1）である。さらに掘り下げたところ、第Ⅴ層からは、土坑3基（SC1・2・3）、石囲い炉1基を確認した。第Ⅴ層調査終了後にC区を重機により第Ⅴ層まで掘り下げたが、攪乱の状況がひどいこともあり、道路状遺構1条、溝状遺構1条だけで遺物は確認できなかった。調査区が狭小であったためそれ以上の深掘は避け、平成13年10月9日に調査を終了した。

調査区には、国土座標に準じた10m×10mグリッドを単位とし3つの調査区を覆うように設定し、東西方向にアルファベット（東よりA・B・C）を、また南北方向に数字（北より1・2・3・・・）をそれぞれ付した。



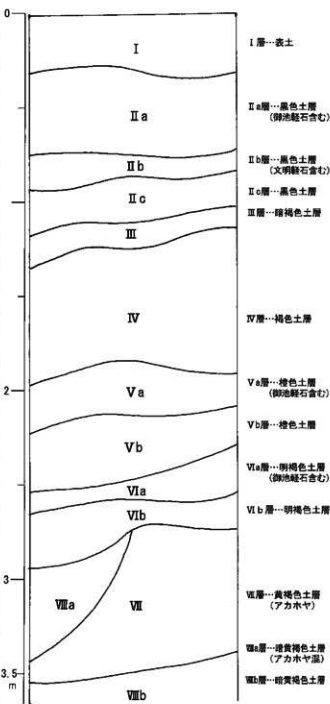
第3図 豊満大谷遺跡 グリッド配置図 (1/500)

第2節 基本層序

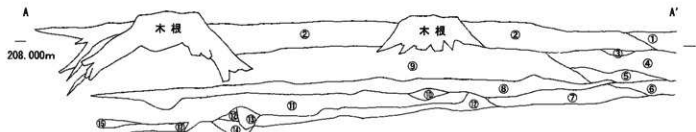
遺跡の地形は、北側から山裾に向けて緩斜面を形成している。また調査区の中央付近は明治以降の開墾地であったため、土層の堆積が一様ではなく、各層とも全体的には調査区南側の山裾に向かって堆積が厚くなる。調査区は基本的に、霧島御池軽石（霧島御池から約4,200年前に噴出したと思われる）上面まで掘り下げたが、より下位の文化層の存在を把握するために、A区北側の壁面に深掘りトレンチを設定し、アカホヤ火山灰層下位面まで確認した。そのトレンチの土層断面図を基本土層として、層ごとに堆積状況について記述する。

第I層は、現代の畑の耕作土および、山林の腐植土層で、オリブ黒色砂質シルト層が20cm～30cm堆積している。第II層は文明降下軽石（白ボラ）・御池軽石（御池ボラ）の混入割合によって性質が異なっており、3層に細分できる。上層から1mm程度の御池軽石粒がわずかに混入し粘性の全くない黒色土をII a層とし、1mm～5mm程度の文明降下軽石粒が多く混入し粘性の無い黒色土層をII b層、1mm以下の黄橙色粒子を微量に含み粘性のある黒色土層をII c層とした。II c層の下位から第III層の暗褐色にかけ古代～中世の遺物が豊富に出土した。第IV層の霧島御池軽石混じりの褐色土層は遺物包含層が50cm～60cmで堆積しており、縄文後晩期の遺物と遺構が確認された。第IV層下位には霧島御池降下軽石純層が堆積し、第V層も2層に細分できるV a層は粘性のない1mm以下の黄橙色粒子が30cmほど堆積し、V b層は粘性のない1mm～3mmの黄橙色粒子が40cm～50cm堆積している。第VI層は明褐色土層で霧島御池軽石の混入の割合によって2層に分かれる。直径2mm～5mm程度の軽石を多量に含み明褐色土で軟質でやや粘性を持つVI a層と直径1cm～3cmの軽石を少量含み軟質で粘性がない明褐色土をVI b層とした。約40cmほど堆積している。第VII層はアカホヤ火山灰層で70cm～80cmある。約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した火山灰である。第VIII層は暗黄褐色軽石混褐色土で上部に直径2mm～5mm程度の黄・クリーム色の軽石粒を多く含み、下部からは2mm～5mm程度の橙・黄褐色の軽石粒を含んでいる。

上記の基本土層はA区～B区で確認されたが、C区は攪乱の状況がひどく大きく堆積状況が異なる。

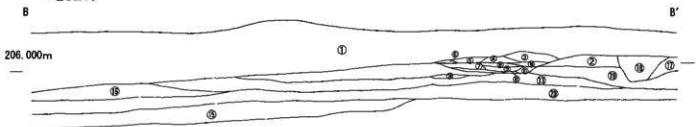


第4図 豊満大谷遺跡 基本土層柱状図



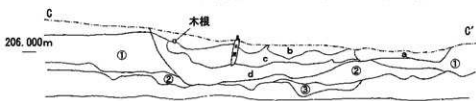
【土層注記】A区西壁土層断面

①…黒褐色土 (10YR3/1) 細かい粒子でしまりが有る硬質。にぶい光沢を出し、中に0.1mm~2mmの灰色のボラを多く含む。又0.1mm大の白灰色のボラを多く含む。②…黒褐色土 (10YR2/2) 細かい粒子でしまりが有る。中に0.1mm~2mm大の灰色のボラを多く含む。③…黒褐色土 (10YR2/2) 細かい粒子でしまりが有る硬質。中に0.1mm以下の砂粒を多量に含む。④…黒褐色土 (10YR2/2) ③よりややにぶい細かい粒子で軟質。0.1mm~2mm大の灰色のボラを含むが③よりまだら。⑤…黒褐色土 (10YR2/3) 細かい粒子でやや軟質。砂粒を含み砂質感が強い。中に0.5mm~2mm大の灰色のボラを多く含む。⑥…黒褐色土 (10YR3/2) 粗い粒子でしまりが有る軟質。にぶい光沢を出す。ボラは少量。褐色の粒子が混在する。⑦…黒褐色土 (10YR2/3) 細かい粒子でしまりが有る軟質。ボラの量が少ない。⑧…黒褐色土 (10YR3/2) 細かい粒子でしまりが有る軟質。0.1mm~3mmの灰色のボラを多量に含む。やや褐色に近い。⑨…黒褐色土 (10YR2/3) 粗い粒子でしまりが有る。砂粒を多く含む。砂質感が強い。⑩…黒褐色土 (10YR3/1) 粗い粒子でしまりが有る。やや軟質。中に含まれるボラが少い。⑪…混在土。黒褐色と褐色の粒子が混在。⑫…黒褐色土 (10YR3/3) 粗い粒子で軟質でしまりが有る。ボラはほとんど含まれない。⑬…混在土。褐色の粒子が多く含まれ、暗褐色土に近い。⑭…黒褐色土 (10YR2/3) 黒褐色に褐色の粒子が混ざりやや明るい色を出す。



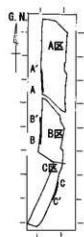
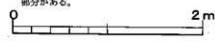
【土層注記】B区西壁土層断面

①…灰黄褐色土 (10YR4/2) やや粗い粒子でしまりが有る。ボラを含み多少にゴリがある。②…黒褐色土 (10YR3/2) やや粗い粒子でしまりが有る。やや軟質。③…黒褐色土 (10YR3/2) 硬質土。黒褐色の土と黄色のボラや砂粒があり硬くしまっている。④…黒褐色土 (10YR2/2) 黒褐色の土と黄色のボラがあり硬くしまっている。⑤…黒褐色土 (10YR2/2) ④に類似。黄色のボラが少なく、黒色の土が硬くしまっている。⑥…黒褐色土 (10YR2/2) 粗い粒子でしまりが有る。やや軟質。⑦…黒褐色土 (10YR2/2) 粗い粒子でしまりが有る。灰色のボラを含む。⑧…黒褐色土 (10YR2/2) 硬質土。黒褐色の土と砂粒があり硬くしまっている。⑨…黒褐色土 (10YR3/2) 硬質土。黒色の硬い土の上下に赤褐色の層が包むように入る。⑩…黒褐色土 (10YR2/2) 粗い粒子でしまりが有る。やや軟質。⑪…黒褐色土 (10YR2/2) 粗い粒子でしまりが有る。軟質。中に砂粒をお含む。⑫…暗褐色土 (10YR3/3) 細かい粒子でしまりが有る。やや軟質。中に0.5mm~2mm大の黄色のボラを含む。⑬…暗褐色土 (10YR3/2) 硬質土。暗褐色の上に黄色のボラを多く含む。⑭…暗褐色土 (10YR3/2) 粗い粒子でしまりが有る。やや軟質。下層に比べてやや明るく。黄色のボラの量が少い。⑮…暗褐色土 (10YR3/2) やや粗い粒子でしまりが有る。軟質。0.1mm~1mm大の黄色のボラを多く含む。⑯…混在土。暗褐色土と褐色土が混在する。⑰…暗褐色土 (10YR3/3) 粗い粒子でしまりが有る。軟質。⑱…黒褐色土 (10YR2/2) 細かい粒子でしまりが有る。硬質。中に0.5mm~1mm大の灰色・白色・黄色のボラが含まれる。⑳…黒褐色土 (10YR2/2) 細かい粒子でしまりが有る。硬質。中に0.5mm~1mm大の灰色のボラが含まれる。



【土層注記】C区東壁土層断面

a…褐色 (5YR6/8) 1mm~3mmぐらいまでの褐色の礫石の層で、無機鉱物粒を含む。
 b…暗褐色土 (5YR2/1) 粘性があり軟らかく、にぶい黄色の礫石を含む。
 c…にぶい黄色土 (2.5YR6/3) 1mm~10mmぐらいまでのにぶい黄色の層で白色鉱物粒を含む。
 d…褐色土 (10YR1.7/1) 粘性がありしまっている。明黄褐色の礫石を含む。
 ①…黒褐色土 (10YR3/1) 粘性があり、しまっている。明黄褐色の礫石を含む。
 ②…暗褐色土 (10YR3/3) 粘性があり、固くしまっている。明黄褐色の礫石を含む。
 ③…赤褐色土 (2.5YR4/6) 粘性があり、非常に固い。下層はIV層と同じような部分もある。
 ④…明黄褐色 (10YR6/8) 0mm~1mmと3mm~4mmの明黄褐色の礫石の層で、固くしまっている部分とそうでない部分がある。



第5図 豊満大谷遺跡 土層断面実測図 (1/40)

第3節 調査の記録

遺構を検出した第Ⅲ層～第Ⅳ層は、標高208.25m～204.60mの南向き斜面で、調査区の北側から中央(A区)は山頂に向かって急傾斜を形成するが、中御梶部から南(B・C区)に向けては緩傾斜となる。確認した遺構は竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑6基、集石状遺構1基、溝状遺構8条、畝状遺構、進路状遺構3条で、A・B区全域から検出した。第Ⅴ層では、土坑1基、石囲い炉1基を検出した。遺物は縄文時代後晩期および古代のものが出土した。その中でも古代の遺物が多数を占める。

1 縄文時代の遺構と遺物

豊万大谷遺跡では縄文時代の遺構については、土坑1基、石囲い炉1基が検出された。遺構出土の遺物を概観すると、縄文時代後晩期に属するものであり、遺構もおおむね縄文時代後晩期の所産と考えられる。

(1) 土坑

3号土坑(SC3:第7図)

A区中央のB3グリッドから検出された。確認面は第Ⅴ層(御池軽石=御池ボラ層)上面で、平面形態は不整形で断面形態は皿状を呈する土坑である。既掘部分の規模は長軸約1m、短軸約0.52m、深さ17cmを測る。埋土は4層をなし、橙色土の濃度で分層している。上層より径3mm内外の御池ボラと炭化物粒子を多く含む明赤褐色の焼土が混在する暗褐色土層(硬)、径2mm内外の御池ボラと炭化物を多く含む黒褐色土層、御池ボラと炭化物を多く含む橙色と明赤褐色の焼土が混在する黒褐色土層、底面は径4mmの御池ボラを含む暗褐色土で固い。橙色土は土坑内のほぼ中央に集中しているが、炭化物の混在する範囲は、南北方向2.4m、東西方向2.8mである。当初、竪穴住居跡を予測していたが、床面が判断できないことから、上面がほぼ削られた土坑とした。用途は不明で、出土遺物もない。

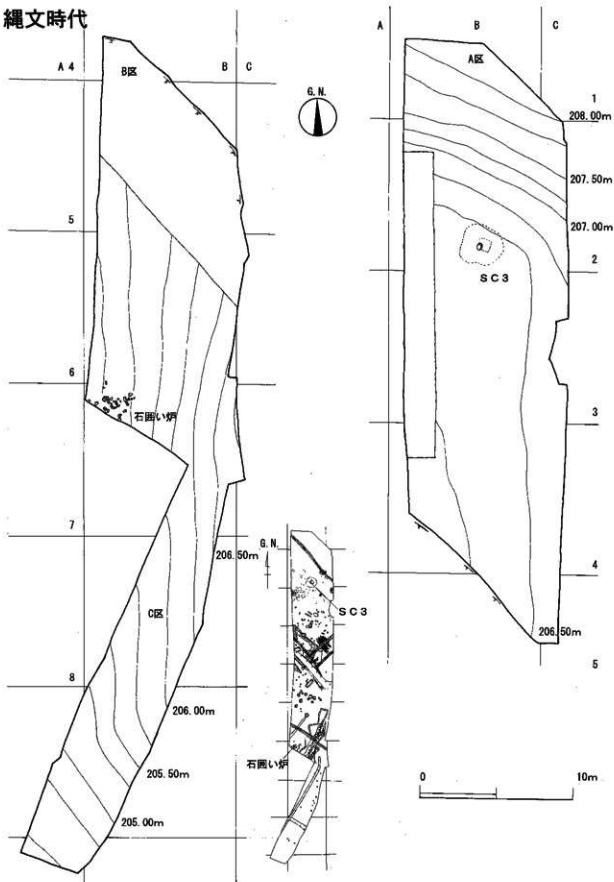
(2) 石囲い炉

石囲い炉(第8図)

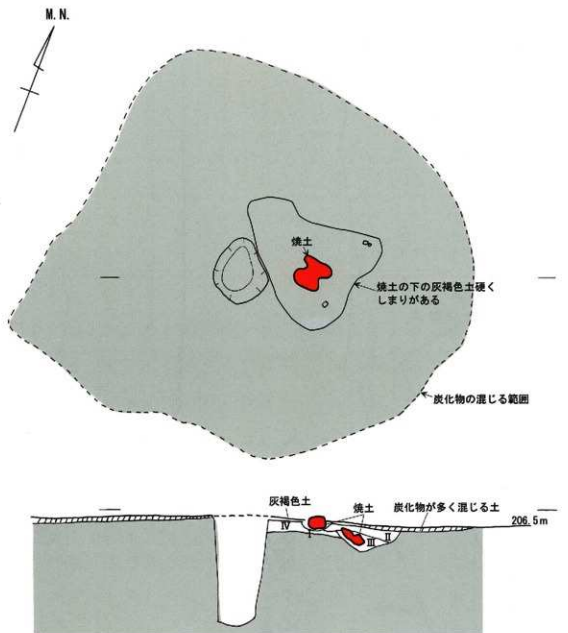
B区南端西側のB7グリッドから検出された。確認面は第Ⅴ層(御池ボラ層)の上面で遺構は260×270cmの範囲に礫が見られた。検出時は平面的に土坑を確認することはできなかったが、約15cmの厚みで重なった礫を除去すると、浅い皿状の落ち込みとなった。10cm前後の大きさの礫が使用され、全体に角張ったものが多かった。赤化した礫も数点あった。底面は径4mmの御池ボラを含む暗褐色土で固く、厚さ1cm前後の焼土が60×70cm、105×145cmの範囲で2ヶ所で確認された。当初、竪穴住居跡を予測していたが、上面がほぼ削られ床面が判断できないことから検出不可能であった。また、炭化物等は確認できなかったが、遺物は出土している。

出土遺物は第9図に示している。この遺構に伴う遺物は主に中・下層から出土しており、ブランのほぼ全域に分布している。1・3は内湾しながら口縁部が大きく開く浅鉢である。2・4・5は胴部があまり張らずにそのまま緩やかに外反する器形で口縁部に最大径をもつ深鉢である。1は口縁部に穿孔しており、内外面とも横・斜方向にナデ仕上げである。2は内外面に横・斜方向の貝殻条痕がみられ、一部指押えもある。3は内外面に横方向の条痕が施されている。4・5は深鉢の胴屈曲部である。4は口縁部が緩やかに外反する。外面は横方向の貝殻条痕の後に横方向のナデを施し、内面には横方向の貝殻条痕の後に指ナデを行っている。5は胴上部で屈曲し口縁部がわずかに外反しながら開く。外面に横

縄文時代



第6図 豊満大谷遺跡 縄文時代の遺構分布図 (1/250)



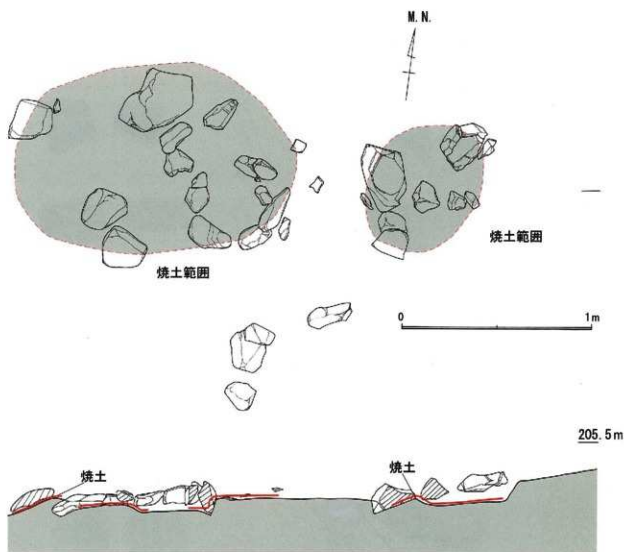
【土層注記】SC3

- I：暗褐色土（7.5YR3/3）固くしまりのある明赤褐色の焼土を含み、2mm～3mmの黄褐色の軽石（御池ボラ）と炭化物が多く混じる。
- II：黒褐色土（5YR2/1）1mm～2mmの黄褐色の軽石と炭化物を多く含む。粘性あり。
- III：黒褐色土（5YR3/1）IIと類似しているが、橙色と明赤褐色の固くしまりのある焼土を含み、ボラと炭化物を多く含む。粘性あり。
- IV：暗褐色土（7.5YR3/3）Iと似ているが焼土を含まない。粘性あり。

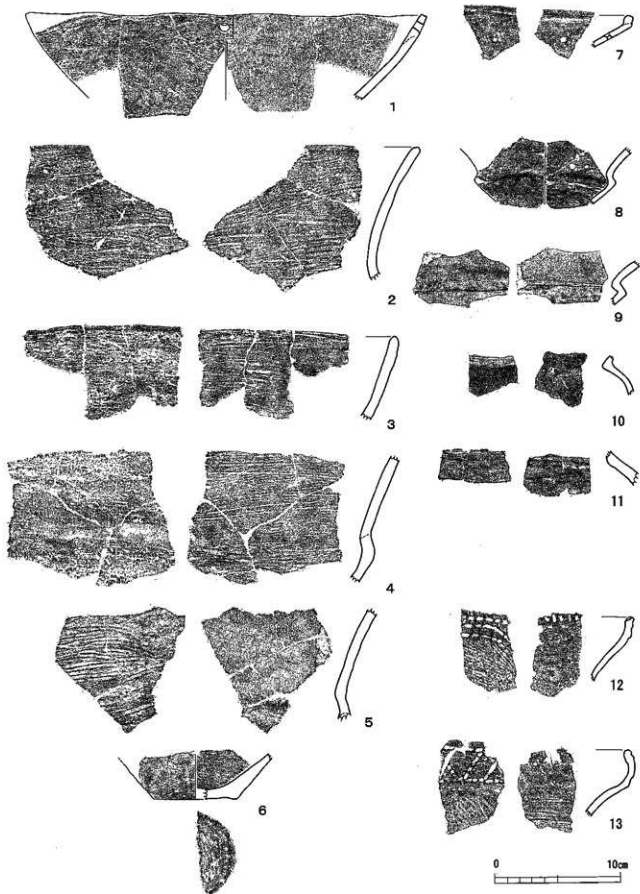


第7図 豊満大谷遺跡 3号土坑実測図（SC3：1/20）

方向の貝殻条痕文、内面には横方向のナデを施している。6は底部である。7～11は口縁部が短く、頸部で「く」字状に折れ、肩部から胴部にかけて緩やかに湾曲する黒色磨研系の精製浅鉢である。両面には横方向の研磨を施している。7は口縁部に穿孔を持つ。8・9は口縁部が外反し、頸部で短く屈曲している頸部片である。10・11は口縁部が欠損している肩部～胴部片である。12・13は外面が条痕、内面はナデ仕上げで、棒状工具による刺突も見られる。



第8図 豊満大谷遺跡 石囲い炉遺構実測図 (1/20)



第9圖 豊満大谷遺跡 石囲い炉出土土器実測図(1/3)

(3) 包含層出土の遺物

縄文時代の遺物包含層はA区・B区の第IV層である。粗製土器、黒色磨研土器を中心に後期・晩期の土器が出土している。これらは、器形や文様によって分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し若干の説明を行う。個々の遺物についての詳細は観察表に記載している。出土遺物は第11図～第18図に示している。

1類 (第10図14～第14図66)

粗製の深鉢を一括した。器形により6類に分類できる。

- A 胴部屈曲部が張り、口縁部が緩やかに外反するもの。(14・33～35・65・66)

14は屈曲部に蝶ネクタイの貼付突帯を有し、器面調整は内外面に貝殻条痕後ナデを施している。

65は頸部が「く」の字に外反する。66は肩部に2条の沈線を巡らせている。

- B 口縁部が直口あるいはわずかに外反するもの。(15・17)

- C 口辺部が外傾するもので、最大径は口縁部にあるもの。(59～64)

59～62は無刻目突帯文で、63は鳥井原式の口縁帯をもつ中岳Ⅱ式である。64は口縁部にヒレ状の突起を有する。

- D 胴部があまり張らず口縁部が直口あるいは外反するもの。(19～32)

25は口唇部直下に1条に沈線を巡らせている。

- E 口縁部が外傾しながら直口するもの。(36～40)

36・37は外面に板状工具よる粗いナデ、内面は指圧痕がみられる。

- F 口辺部が内傾しながら立ち上がるもの。(16・60)

2類 (第13図45～58)

口縁部に突帯が巡るものを一括した。突帯の位置により2類に分類できる。

- A 口縁帯に突帯を巡らせるもの。(45～51・54・57)

57は口縁部外面に小孔を連続させる孔列文土器

- B 口縁部やや下位に断面三角形の突帯を巡らせるもの。(52・58)

3類 (第13図53・55・56)

口縁部が外傾するもの。(53・55・56)

4類 (第12図42)

胴部が張り出し口縁部に向かって内湾する精製の鉢(42)

5類 (第10図18、第12図40・43・44)

胴上部で屈曲し口縁部がわずかに外反しながら開く粗製の鉢(18・40・43・44)

18は口縁部にヒレ状の突起を有する。

6類 (第14図67～69)

粗製深鉢の底部を一括した。

- A 端部が張り出し胴部がわずかに外傾しながら立ち上がる深鉢(67・68)

- B 端部が張り出し胴部が開きながら立ち上がる深鉢。(69)

7類 (第15図70~第17図108)

黒色磨研系の精製浅鉢を一括した。器形により8類に分類できる。器面調整は内外面とも丁寧なミガキ、ヘラミガキが施されている。

- A a 胴上部で屈曲し、口縁部がわずかに外反しながら開くもの。(70~75)

70・71は同一個体である。71~75は内外面に沈線を巡らし、玉縁状の口縁を呈するものである。

- b 口縁部が大きく外反するもの。(76) 口縁内外面に沈線を巡らせている。

- c 皿状の器形を呈するもので、口縁部にリボン状の突起を有するもの。(77・78)

- d 口縁部が外傾するもので、口唇部直下両面に沈線を巡らせているもの。(79~81)

80は口縁部にリボン状の突起を有する。

- B 胴上部で屈曲し口縁部が短く外反するもの。(82~85)

口縁部玉縁状を呈し基本的に内外面に沈線を巡らせるが、沈線が不明で段を形成するものもみられる。

- C 胴部が屈曲せず膨らみ口縁部が屈曲して短く外反するもの。(86~91)

87・89・90は口縁端部に内外面に沈線を巡らせ端部が玉縁状を呈する。91は胴部上方に穿孔をもつ。

- D 丸い胴部に直接短い口縁部が貼付されるものである。(92~94)

- E 胴部で屈曲し、口縁部が内傾した後大きく外反し口縁端部が屈曲して立ち上がるもの。(95~97)

95は口縁部にリボン状の突起を有し、97はリボン状の突起を有する。

- F 胴部が屈曲し、口縁部が屈曲して短く外反するもの。(98・100)

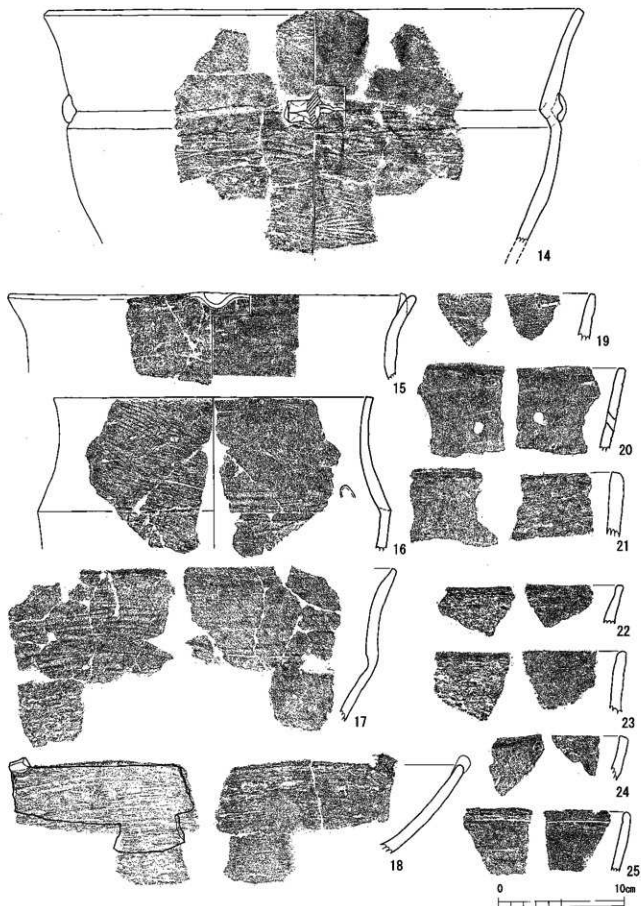
98は屈曲部にリボン状の突起を有する。

- G 胴部が屈曲せず膨らみ口縁部が屈曲して短く外反するもの。(99・101)

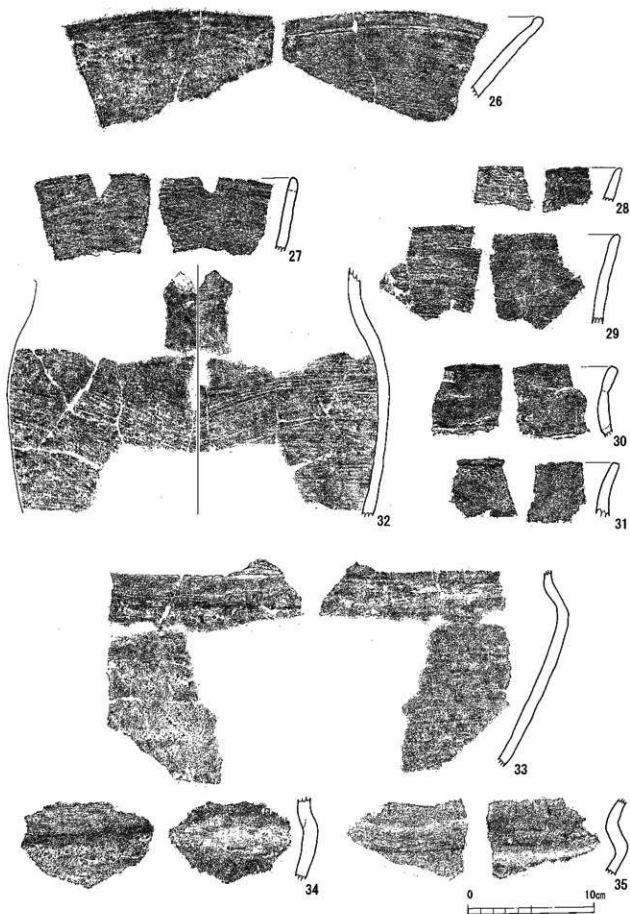
- H 胴部で屈曲し口縁部が内傾するもの。(102~108)

8類 (第17図109~105)

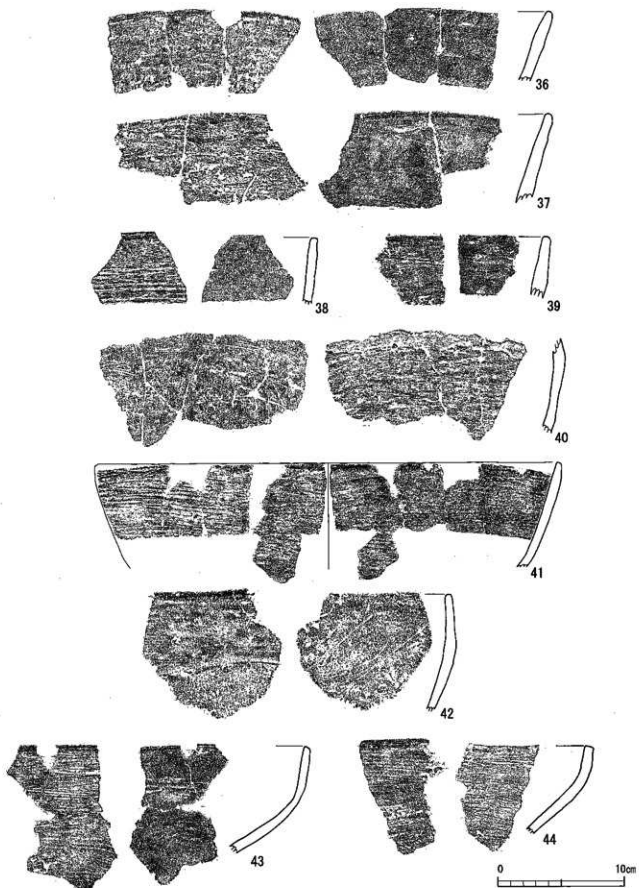
109~115は第IV層その他の土器である。109は口縁に向かって外反ぎみに開く深鉢の口縁部片である。外面の調整は胴部から口縁部にかけて斜方向のナデ、口縁端部に横方向のナデを施している。一部黒変が見られる。内面は胴部から口縁部にかけて横方向のナデを施し、口縁端部に一部黒変が見られる。110は皿状の器形を呈する浅鉢の口縁部片である。内外面ともミガキが施されているが、外面の調整は粗い。111は胴上部で屈曲し口縁部が短く外反する精製浅鉢の口縁部片である。内外面に丁寧なナデが施されている。112は口縁部が外傾しながら立ち上がる精製浅鉢の口縁部~胴部片である。内外面に丁寧なナデが施され、口縁部にリボン状の突起を有する。113は胴上部で屈曲し口縁部が短く外反する口縁部~胴部片である。胴屈曲部と口縁端部がほぼ同径で最大径となる。内外面に横方向の粗いミガキが施されている。114は外側に向けて大きく開く口縁部で頸部と胴部の2ヵ所で「く」字状に屈曲する深鉢の胴部片である。器壁は3mm~5mmと薄い。内外面ともミガキが施されている。115は縄文時代前後半の曾畑2式土器の口縁部片である。口縁部が直線的弱い外反をもった深鉢丸底の器形と思われる。口縁部には平行線文を4~5条施し、内面にも同様の文様が施されている。文様は整然と規則的な配列をなし文様は詳明である。内外面とも横方向のナデが施されている。



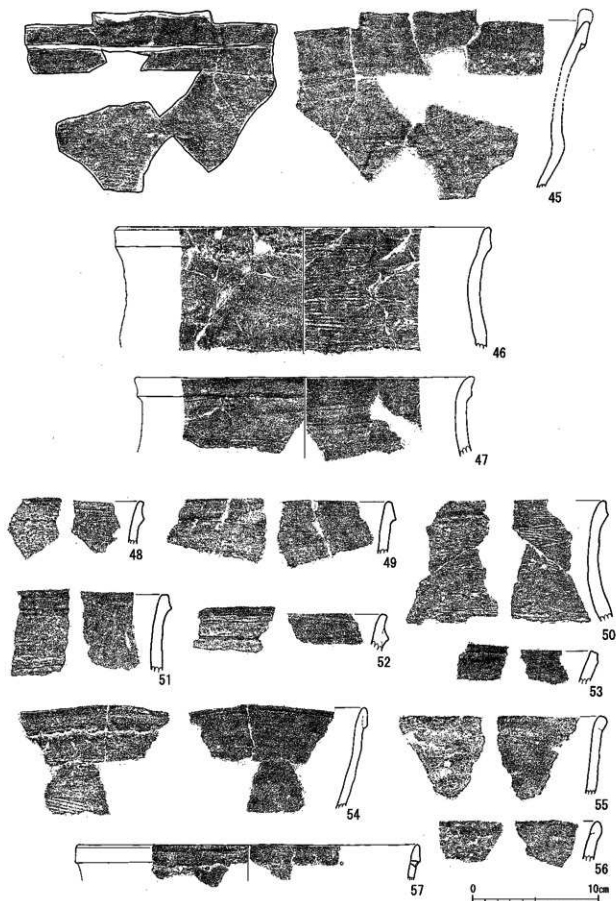
第10圖 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(1) (1/3)



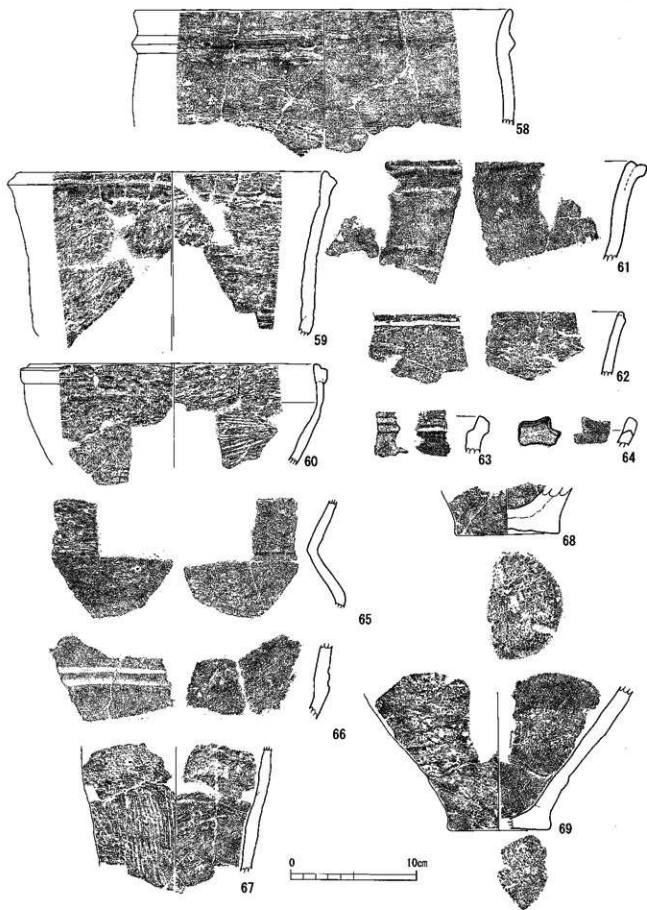
第11圖 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(2) (1/3)



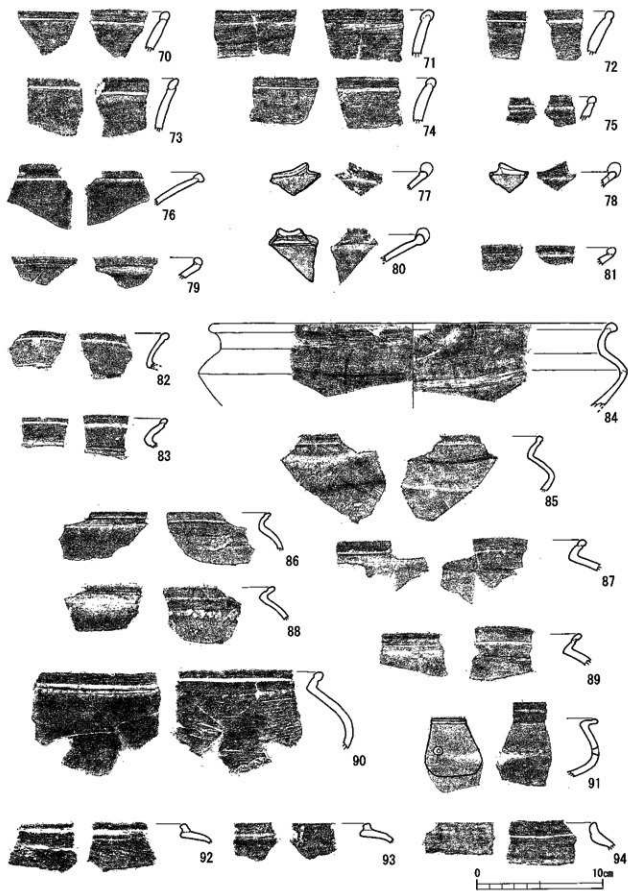
第12圖 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(3) (1/3)



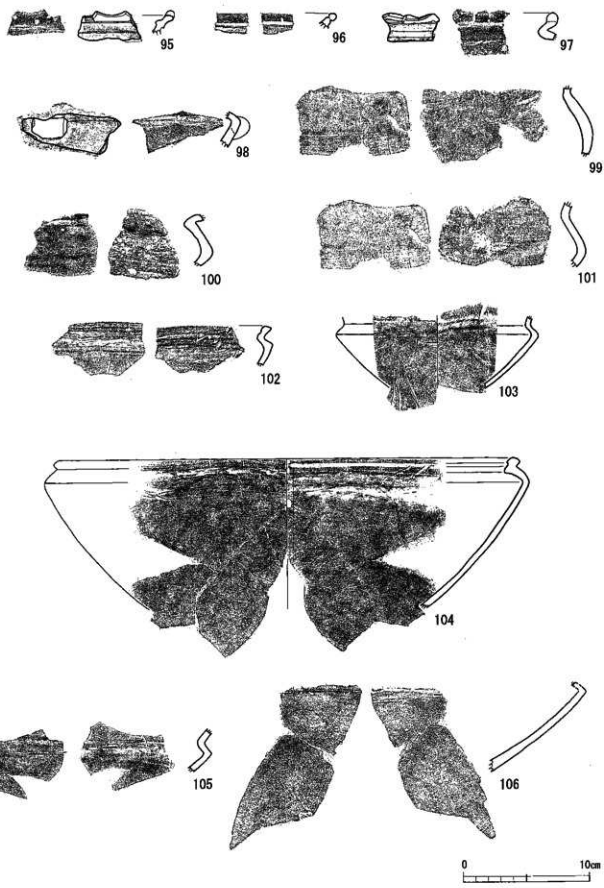
第13圖 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(4) (1/3)



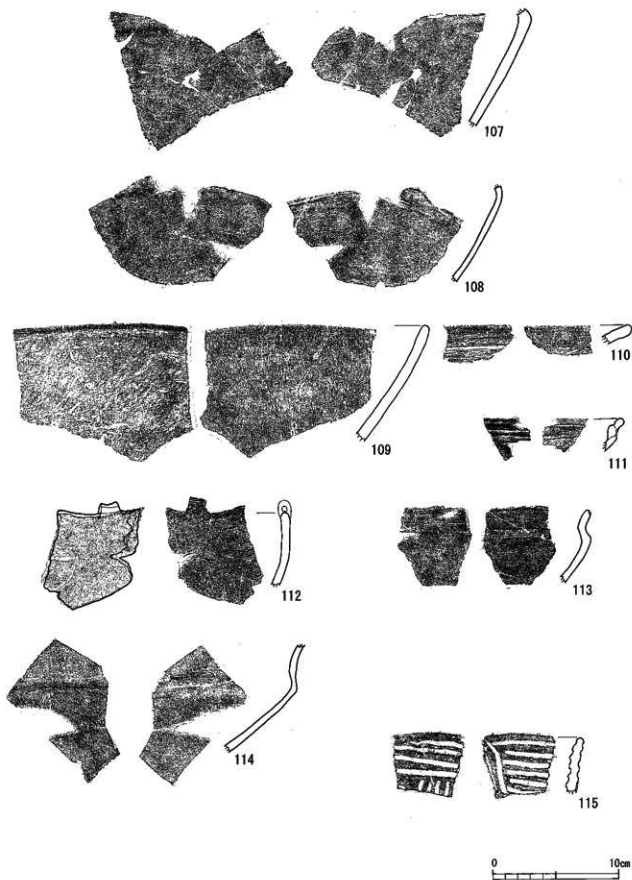
第14图 丰满大谷遗址 包含层出土土器实测图(5) (1/3)



第15圖 豐滿大谷遺跡 包含層出土土器実測圖(6) (1/3)



第16圖 豐滿大谷遺跡 包含層出土土器実測図(7) (1/3)



第17圖 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(8) (1/3)

第1表 豊満大谷遺跡 土器観察表(1)

遺物番号	種別	出土地点	器種	部位	(cm)		平 面 ・ 側 面 ・ 文 様 ほか		色		胎 土 の 特 徴	備考
					口徑	底徑	外 形	内 面	外 形	内 面		
1	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	口縁部	推定31.7		横方向のナゲ、スス付着、斜いナゲ	横方向のナゲ、スス付着	外 形	内 面	4mm以下の褐色の砂粒、2mm以下の半透明、透明の光沢粒、微細な黒色の光沢粒	
2	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	口縁部			貝殻条痕文、スス付着指痕	貝殻条痕文、指痕	外 形	内 面	3mm以下の半透明の光沢粒、2mm以下の褐色の砂粒及び砂粒及び透明の光沢粒、1.5mm以下の半透明の光沢粒、3mm以下の半透明の光沢粒	
3	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	口縁部			横方向の条痕	横方向の条痕の斜いミガキ	外 形	内 面	微細な黒色光沢粒、微細～2mm次の透明光沢粒、2mm以下の赤褐色の砂粒	黒化
4	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	胴底部			貝殻条痕文後に横方向のナゲ	貝殻条痕文、指ナゲ	外 形	内 面	3mm以下の半透明、半透明の光沢粒、2mm以下の黒褐色の砂粒、微細な黒色の光沢粒	黒化
5	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	胴底部			貝殻条痕文、スス付着部分的に指痕	横方向にナゲ	外 形	内 面	6mm以下の褐色、3mm以下の透明・不透明の光沢粒	
6	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	底部	推定6.4		工具によるナゲ	横方向にミガキ	外 形	内 面	微細な乳白色、褐色色・赤褐色、透明光沢粒、2mm以下の褐色の砂粒、2mm以下の褐色の光沢粒	
7	縄文土器	B区：南東石段1号	浅鉢	口縁部～胴部			横方向にミガキ	横方向にミガキ	外 形	内 面	6.1～1mm次の灰白・灰褐色の粒、3mm以下の赤褐色の粒	
8	縄文土器	B区：南東石段1号	浅鉢	胴部			ミガキ	ミガキ	外 形	内 面	1mm以下の半透明光沢粒	
9	縄文土器	B区：南東石段1号	浅鉢	胴部			ミガキ、スス付着	ミガキ	外 形	内 面	黒粒 灰黒粒 黒粒 黒粒	
10	縄文土器	B区：南東石段1号	浅鉢	胴部～胴部			ミガキ	ミガキ	外 形	内 面	2mm以下の光沢粒、微細な乳白色粒	
11	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	胴部～胴部			ミガキ、スス付着	ミガキ、ケズリ	外 形	内 面	1.5mm以下の乳白色粒、半透明光沢粒	
12	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	口縁部			指ナゲ、具押印、沈線、条痕、スス付着	指ナゲ、押印跡、ナゲ	外 形	内 面	2mm以下の乳白色・茶褐色・灰色光沢粒	
13	縄文土器	B区：南東石段1号	深鉢	口縁部			指ナゲ、具押印、条痕、指ナゲ	横方向のナゲ、指ナゲ	外 形	内 面	1mm前後の黒褐色・灰褐色の粒、白色透明光沢粒	
14	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部～胴部	推定42.2		条痕文、ネクタイ状の突起、指痕	横ナゲ後指ナゲ、条痕	外 形	内 面	3mm以下の透明、半透明の光沢粒、3mm以下の褐色の砂粒、2mm以下の褐色の光沢粒	
15	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横方向のナゲ、スス付着	工具による横方向のナゲ	外 形	内 面	2mm以下の赤褐色・灰色色、1mm以下の灰白・乳白・透明色粒	黒化
16	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部～胴部			指痕、斜め方向にミガキ、ナゲ	丁寧な横方向のナゲ、指痕	外 形	内 面	微細な光沢のある白色の粒、1mm以下の白い粒	
17	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部～胴部			横・斜め方向の条痕文	横方向の条痕文後ナゲ	外 形	内 面	2mm以下の褐色・透明光沢粒	黒化
18	縄文土器	A区：IV層	鉢	口縁部	推定46.4		斜いナゲの上を工具によるナゲ	斜いナゲの上を横方向にへらミガキ	外 形	内 面	透明に光るガラス製の破片、半透明のガラス製の破片、0.3～2mm次の乳白色・茶褐色の砂粒、3mm次の褐色の砂粒	
19	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横方向のナゲ、スス付着	ナゲ	外 形	内 面	光る黒砂子、黒く光るガラス製の破片、0.6～1mm次の灰・灰・茶色の砂粒	
20	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部～胴部			ナゲ、沈線	横方向のナゲ	外 形	内 面	微細な光沢のある白色の粒	
21	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横いナゲ、スス付着	ナゲ	外 形	内 面	5mm以下の赤褐色色、2.5mm以下の乳白色粒・半透明光沢粒	
22	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横いナゲ、スス付着、指痕	横ナゲ、指痕	外 形	内 面	3mm以下の灰白色の砂粒、2mm以下の褐色の光沢粒及び透明の光沢粒	
23	縄文土器	C区	深鉢	胴部			ナゲ、スス付着	ナゲ	外 形	内 面	3mm以下の透明光沢粒、1mm以下の乳白色粒、褐色光沢粒	
24	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横いナゲ、スス付着	板状工具による横方向のナゲ	外 形	内 面	7mm以下の黒褐色の砂粒、1.5mm以下の透明の光沢粒及び赤褐色の砂粒、1mm以下の灰白色の砂粒	
25	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			沈線、丁寧なナゲ、スス付着	沈線、丁寧なナゲ	外 形	内 面	3mm以下の半透明な光沢粒、1mm以下の透明な光沢粒、1mm以下の褐色の光沢粒	
26	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横いナゲ、全体にスス付着	工具による横方向のナゲ	外 形	内 面	微細～2mm次の透明光沢粒、1mm以下の褐色の粒	
27	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横いナゲ、ナゲ	横方向のナゲ	外 形	内 面	1mm以下の乳色・白色・灰色・褐色の粒、ガラス製の破片	
28	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			条痕文、スス付着、指痕	ミガキ、指痕	外 形	内 面	2.5mm以下の透明な光沢粒、1mm以下の褐色の光沢粒	
29	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			ナゲ、ミガキ、スス付着	ミガキ	外 形	内 面	3mm以下の半透明光沢粒	
30	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			ナゲ、工具痕	ナゲ、工具痕	外 形	内 面	2mm以下の透明・半透明の光沢粒、1mm以下の褐色・褐色・褐色色粒	
31	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			ナゲ、スス付着	ナゲ	外 形	内 面	3mm以下の褐色色、2mm以下の半透明光沢粒、1.5mm以下の褐色光沢粒	
32	縄文土器	A区：IV層	深鉢	胴部			丁寧なナゲ、スス付着、条痕(横い)	丁寧なナゲ、スス付着、条痕(横い)	外 形	内 面	2mm程度の褐色・灰色・乳色・白色・乳白色の粒、光沢粒	
33	縄文土器	A区：IV層	深鉢	胴部～胴部			ミガキ、斜いナゲ、指痕	条痕の後ナゲ	外 形	内 面	4mm以下の灰白・黒・灰褐色・透明光沢黒色光沢の粒	
34	縄文土器	A区：IV層	深鉢	胴部			横ナゲ、スス付着	横方向のナゲ、指痕	外 形	内 面	4mm以下の白色不透明の粒、光沢のある黒粒	
35	縄文土器	A区：IV層	深鉢	胴部			ナゲ、スス付着	ナゲ	外 形	内 面	3mm以下の灰褐色・灰白・褐色・褐色光沢の砂粒	
36	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横方向に板状工具による斜いナゲ、指痕	横方向のミガキ、指痕、黒粒	外 形	内 面	3mm以下の透明の光沢粒、2mm以下の灰色の砂粒、微細な褐色の砂粒	
37	縄文土器	A区：IV層	深鉢	口縁部			横・斜め方向に板状工具による斜いナゲ	横方向にミガキ、指痕	外 形	内 面	4mm以下の褐色の砂粒、4mm以下の透明の光沢粒、2mm以下の褐色の光沢粒	黒化

第2表 豊満大谷遺跡 土器観察表(2)

遺物番号	種類	川上地点	器種	部位	(cm)			手法・修整		文様区画		色		胎土の性状		備考
					口徑	底徑	器高	外	内	外	内	外	内	外	内	
38	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				糸痕	ミガキ			灰黄	黄灰	2mm以下の半透明光沢粒		
39	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				糸痕の上ナゲ	ナゲ			灰黄	灰黄	3mm以下の赤褐色粒、2.5mm以下の黒色・半透明光沢粒		
40	縄文土器	A区:IV層	深鉢	底面				貝殻糸痕の後指ナゲ、一部スス付着	横方向の糸痕の後指ナゲ			暗灰黄	灰黄	1mm以下の白色半透明の粒		
41	縄文土器	A区:IV層	鉢	口縁部				横方向のナゲ、斜め方向のミガキ	一部糸痕、横方向のミガキ			黒褐	にぶい黄緑	1mm以下の黄赤・褐色、透明光沢・黒色光沢粒	黒化	
42	縄文土器	A区:IV層	鉢	口縁部～胴部				横方向のナゲ、スス付着、粗ミガキ	ナゲ			にぶい灰黄	にぶい黄緑	微細な赤褐色粒、1～2mmの黄赤・白色光沢粒		
43	縄文土器	A区:IV層	鉢	口縁部～胴部				横方向の糸痕文後ナゲ、スス付着	糸痕文後ミガキ			灰黄	浅黄	1mm以下の灰白・半透明色の粒	黒化	
44	縄文土器	A区:IV層	鉢	口縁部～胴部				横方向の糸痕文、丁寧なナゲ	糸痕文後ミガキ			橙	橙	2mm以下の黒・灰白・半透明・透明光沢粒		
45	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				粗い指ナゲ	糸痕文の後ナゲ			灰黄	灰黄	3mm以下の灰白・半透明色の粒、1mm以下の透明光沢粒		
46	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部	推定 29.4			粗い横方向のナゲ、指痕、全体的にスス付着	ナゲ後に指押え、横方向のナゲ後に指ナゲ			灰褐	にぶい橙	2mm以下の灰白・にぶい褐色・焼けた砂粒、微細な透明・半透明の光沢粒	黒化	
47	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部	推定 27.0			工具によるナゲ、スス付着	工具によるナゲ、糸痕、糸痕の後ナゲ			黄灰黄	灰黄 橙	2mm以下の黒色光沢・透明光沢・乳白色の粒		
48	縄文土器	4トレンチ	深鉢	口縁部				指痕、斜線、糸痕文	糸痕文			灰	灰ナリーブ	1mm以下の灰白色、透明光沢粒		
49	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				黒化青しい、スス付着、指痕	ナゲ、指押え後ナゲ			焼灰	にぶい黄緑	3mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒		
50	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				指押え、糸痕の後指押え	指押え、斜め方向の糸痕文指押え後ナゲ			灰黄	灰	2mm以下の灰白・透明光沢粒、微細な黒色光沢粒		
51	縄文土器	B区:III層	深鉢	口縁部				突起、糸痕の上ナゲ、スス付着	ナゲ、スス付着			黒褐	黒褐	2.5mm以下の半透明光沢粒、2mm以下の乳白色粒		
52	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				粗い指ナゲ	糸痕文の後ナゲ			灰黄	灰黄	3mm以下の灰白・半透明色の粒、1mm以下の透明光沢粒		
53	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				ナゲ	ミガキ、丁寧なナゲ			にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の褐色粒、1mm以下の乳白色粒		
54	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				横方向のナゲ、指痕	横方向のミガキ			にぶい黄緑	橙	4mm以下の焼灰・灰、2mm以下の半透明な透明の光沢粒、1mm以下の赤褐色粒	黒化	
55	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				粗いナゲ、スス付着	横方向に丁寧なナゲ、工具痕			橙	にぶい黄	白色・灰色・褐色・赤色・灰色の粒、光る粒		
56	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				粗いナゲ、スス付着、指押え	斜め・斜め方向に粗い指押え			黄灰	緑灰黄	3mm以下の透明の光沢粒、1mm以下の灰白色の粒		
57	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部	推定 27.0			横ナゲの指押え、スス付着、穿孔	穿孔、横ナゲ、指痕			灰褐	灰褐	3mm以下の褐色の砂粒、3mm以下の褐色の砂粒		
58	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部	推定 30.0			工具による横方向のナゲ	ナゲ、糸痕の上のナゲ			橙	にぶい黄	1mm以下の黒色・乳白色・灰色の粒、2mm以下の赤褐色の粒、4mm以下の赤褐色粒、8mmの赤褐色粒1個		
59	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部	推定 24.2			斜め方向にナゲ、スス付着	糸痕			にぶい黄緑	黄緑	2mm以下の乳白色・灰褐色・赤褐色を多く含む白色光沢粒、5mm系褐色粒		
60	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部	推定 22.0			糸痕の上ナゲ、スス付着	糸痕、一部スス付着			浅黄	にぶい黄緑	2.5mm以下の半透明光沢粒、1mm以下の褐色光沢粒		
61	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				粗い横方向のナゲ、指痕、全体的にスス付着	ナゲ後に指押え、横方向のナゲ後に指ナゲ			灰褐	にぶい橙	3mm以下の灰白・にぶい褐色・焼けた砂粒、微細な透明・半透明の光沢粒	黒化	
62	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				横方向のナゲの後に指押え、スス付着、工具痕	横方向のナゲの後に指押え			浅黄緑	浅黄緑	5mm以下の褐色の砂粒、3mm以下の浅黄緑の砂粒、半透明・不透明の光沢粒	黒化	
63	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				修飾工具による凹線、灰ナゲ	横方向のナゲ			にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰白色の砂粒、2.5mm以下の赤褐色の砂粒		
64	縄文土器	A区:IV層	深鉢	口縁部				粗いナゲ	横方向にミガキ			にぶい黄	明赤黄	1.5mm以下の透明の光沢粒、微細な灰白色の砂粒		
65	縄文土器	A区:IV層	深鉢	底面				ナゲ、スス付着	ナゲ			にぶい黄緑	暗灰黄	2mm以下の黄赤・黄・灰白色・透明光沢の砂粒		
66	縄文土器	1トレンチ	深鉢	底面	推定 8.4			ナゲ、2段の花巻	ナゲ			浅黄	にぶい黄緑	2mm以下の黄赤・灰白色・透明光沢・黒色光沢の砂粒		
67	縄文土器	A区:IV層	深鉢	胴部	推定 8.3			横ナゲの上を糸痕、斜め方向の糸痕	糸痕の後ナゲ、スス付着、ナゲ			にぶい黄緑	浅黄	微細な1mm以下の白色透明の粒、黒い粒		
68	縄文土器	A区:IV層	深鉢	底面				ナゲ、粗いナゲ	工具によるナゲ、工具痕			にぶい黄緑	にぶい黄緑	2mm以下の焼灰・灰・赤褐・褐色の粒、3mmの灰・褐色の粒		
69	縄文土器	A区:IV層	深鉢	底面				ナゲ、不定方向の工具痕	ナゲ			にぶい黄緑	浅黄	微細な1mm以下の褐色光沢・赤褐色・黄褐色の粒、2mm以下の透明光沢・焼灰色の粒		
70	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ			にぶい黄緑	にぶい黄緑	1mm以下の灰褐色・乳白色、微細な光沢粒		
71	黒色磨研	A区:IV層	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ			灰黄緑	黄灰	1.5mm以下の不透明な光沢粒、灰白色の砂粒、微細な黒色の光沢粒、透明の光沢粒		
72	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ、棒状工具による凹線	横方向のミガキ			灰黄緑	オリーブ黒	1mm以下の透明の光沢粒、灰白色の砂粒		
73	黒色磨研	A区	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ			にぶい黄緑	灰黄緑	1mm以下の灰褐色・乳白色の粒、微細な光沢粒		
74	黒色磨研	A区:IV層	浅鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ			暗灰黄	黄灰	1.5mm以下の灰白色の砂粒、2.5mm以下の褐色の砂粒		
75	黒色磨研	A区:IV層	浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ			にぶい黄緑	黄灰	1mm以下の赤褐色・灰褐色の粒、微細な光沢粒		

第3表 豊満大谷通跡 土器観察表(3)

通物番号	種別	出土地点	群	部位	(cm)			手法・調整・文様ほか		色			胎土の種類	備考
					口径	底径	高さ	外	内	外	内	外		
76	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ、沈澱	工具による横方向のナデ、ミガキ	黒褐色	黒褐色	1mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒		
77	黒色磨研	A区	洗鉢	口縁部				横方向にミガキ	横方向にミガキ	灰黄	暗灰黄	2mm以下の透明の光沢粒、1mm以下の褐色の砂粒	黒化	
78	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				横方向にミガキ	横方向にミガキ	灰黄褐色	灰褐色	1.5mm以下の褐色及び微細な灰白色の砂粒		
79	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	1mm以下の半透明光沢粒		
80	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				横方向にミガキ	横方向にミガキ	にぶい黄褐色	灰黄	1mm以下の灰白及び透明の光沢粒		
81	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部					丁寧なナデ	暗灰黄	黄灰	1.5mm以下の半透明光沢粒		
82	黒色磨研	A区	洗鉢	口縁部～唇部				横方向のミガキ、沈澱黒化	横方向のミガキ	黄灰	黄灰	1mm以下の透明の光沢粒、微細な灰白色の砂粒		
83	黒色磨研	A区	洗鉢	口縁部～唇部				横方向のミガキ、沈澱	横方向のミガキ、沈澱	黒褐色	黄灰	1mm以下の褐色の砂粒、微細な黒色の光沢粒		
84	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部	推定 31.8			横方向にミガキ、工具による部み	工具による部み、横方向にミガキ	黄灰	黒褐色	2mm以下の褐色の砂粒及び1mm以下の灰白色の砂粒、微細な透明の光沢粒		
85	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	1mm以下の茶褐色・黒褐色の粒、白色・微細な光沢粒		
86	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	1mm以下の半透明光沢粒、乳白色粒		
87	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ、沈澱、黒化現象	ミガキ、工具による部み	黄灰	黄灰	微細な灰白色、透明光沢粒	黒化	
88	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部				ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	精良	黒化	
89	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部				横方向のミガキ、沈澱	横方向にミガキ、ミガキの後に横方向にナズリ	黒褐色	黄灰	1mm以下の灰白色の砂粒、微細な透明の光沢粒		
90	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部				横方向にミガキ	横方向にミガキ、微細な	褐色	褐色	2mm以下の茶褐色の粒、1mm以下の灰褐色の粒		
91	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部				ミガキ	ミガキ	黒褐色	灰黄褐色	1.5mm以下の乳白色粒、微細な光沢粒		
92	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				横方向のミガキ、黒化現象、横方向のナデ	横方向のナデ、横方向のミガキ	黒褐色	灰黄褐色	1mm大の灰黄・茶色粒	黒化	
93	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒褐色	灰黄褐色	微細な灰黄色粒、1～2mmの灰黄・茶色粒	黒化	
94	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ、沈澱黒化、粗いナデ	暗灰黄	灰黄	光る顆粒子、きめが細かい		
95	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ、リボン状突起	ミガキ	にぶい黄	灰黄	白色、灰色の粒		
96	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	淡黄	淡黄	1mm以下の透明光沢粒		
97	黒色磨研	A区	洗鉢	口縁部				ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	オリーブ黒	洗黄	白色粒		
98	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ後ナデ、リボン状突起	ミガキ後ナデ	灰黄	灰黄褐色	2mm以下の黒褐色の粒、1.5mm以下の灰色の粒		
99	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	2mm以下の粒・にぶい粒の粒、灰色の砂粒		
100	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	3mmの灰色の砂粒、1mm以下の赤褐色・淡黄・灰白・黒色の砂粒	黒化	
101	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ	ミガキ	暗オリーブ黒	暗灰黄	2mm以下の灰白・粒・灰色の砂粒		
102	黒色磨研	A区	洗鉢	口縁部				ミガキ後ナデ	ミガキ、沈澱	灰黄	灰黄褐色	5mm以下のにぶい赤褐色粒、2mm以下の灰白色粒、微細な透明光沢粒	黒化	
103	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	唇部	推定 16.0			ミガキ	ミガキ	灰黄	灰黄	微細な黒色砂粒		
104	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部	推定 36.0			工具によるナデ後ミガキ、ミガキ	指ナデ後ミガキ、沈澱	黄灰	黒褐色	1mm以下の黒・灰白・半透明色粒		
105	黒色磨研	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ、横方向へ工具痕	灰褐色	褐色	微細な灰色・褐色の粒		
106	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	唇部～唇部				ミガキ	ミガキ	灰黄	灰黄	光沢のある微細粒	黒化	
107	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ、黒灰	ミガキ	にぶい黄褐色	黄灰	1mm以下の赤・粒・灰・灰褐色・透明光沢の砂粒		
108	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ、黒灰	ミガキ	灰褐色	褐色	1mm以下の赤褐色・灰白・にぶい褐色・透明光沢の砂粒		
109	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	口縁部				横方向のナデ、斜め方向のミガキ	一部黒灰、横方向のミガキ	黒褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の赤褐色・褐色・透明光沢・黒色光沢粒	黒化	
110	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	淡黄	淡黄	1.5mm以下の半透明光沢粒		
111	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄	灰黄	精良		
112	縄文土器	A区	洗鉢	口縁部～唇部				丁寧なナデ、リボン状突起	丁寧なナデ	灰黄	灰黄	微細な白色の粒		
113	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	口縁部～唇部				横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	微細な透明光沢粒、1～2mm大の茶褐色		
114	縄文土器	A区: IV層	洗鉢	唇部				ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	暗灰黄褐色	微細な黒色・褐色の粒	黒化	
115	縄文土器	B区	洗鉢	口縁部				横ナデ、スフ付、神杖工具による沈澱	横ナデ後に神杖工具による沈澱	褐色	にぶい黄	1mm以下の灰白色の砂粒、半透明の光沢粒		

2 弥生時代から中世の遺構と遺物

豊満大谷遺跡では、遺物包含層から弥生時代の遺物は出土したものの遺物は検出されなかった。しかし、古代から中世にかけての竪穴住居跡1軒、集石状遺構1基、土坑6基、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構9条、畝状遺構、ピット等が検出された。遺構出土の遺物を概観すると、竪穴住居跡及び集石状遺構、畝状遺構出土のもの古代の土師器を中心に出土している。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（SA1：第19図）

B区やや中央の第IV層上面で、B6グリッドから検出された。方形プランの住居跡でSE4・5に切られている。南北方向に2.95m、東西方向に2.98m、検出面からの深さ20～35cmを測る。なお、明らかな支柱穴は検出できなかったが、プラン北西において焼土が確認され、その埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。埋土は御池ボラを含む褐色土や暗褐色土である。床面には張り床も見られず、硬化面も確認できなかった。遺物の多くは床面直上から床面から20cm浮いた状態で出土した。

出土遺物は第21・22図（第5表）に示している。この住居に伴う遺物（116～140）は上層・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。

116～120は鉢である。116は平底の底部から体部が緩やかに内湾しながら延びる。117は半球形の体部と丸底の底部を持ち、内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。118～120は117より小型で基本的形態は同様であるが、118は口縁端部が外反している。116～119は外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。121は扁球条の胴部を持った小型丸底壺である。122は胴部が外方に延びる壺の底部である。

123～129は高坏である。123～127は坏部で、形態的なバリエーションが多様であり、坏部と脚部に分けて分類する。

坏部 a やや深さの有る体部に大きく延びる外反的な口縁部が付き、稜が明瞭なもの。(123)

b 浅い体部に大きく外反する口縁部が付き、稜が明瞭なもの。(124・125)

c 浅い体部にラッパ状に開く口縁部が付くもの。(126)

d 全体に丸みをもち、稜の不明瞭なもの。(127)

脚部 a 滑らかな「八」字形を呈し、裾部との区分が不明瞭なもの。(126・129)

b やや開き気味の直線的な脚に強く屈曲する直線的な裾部が付くもの。(130)

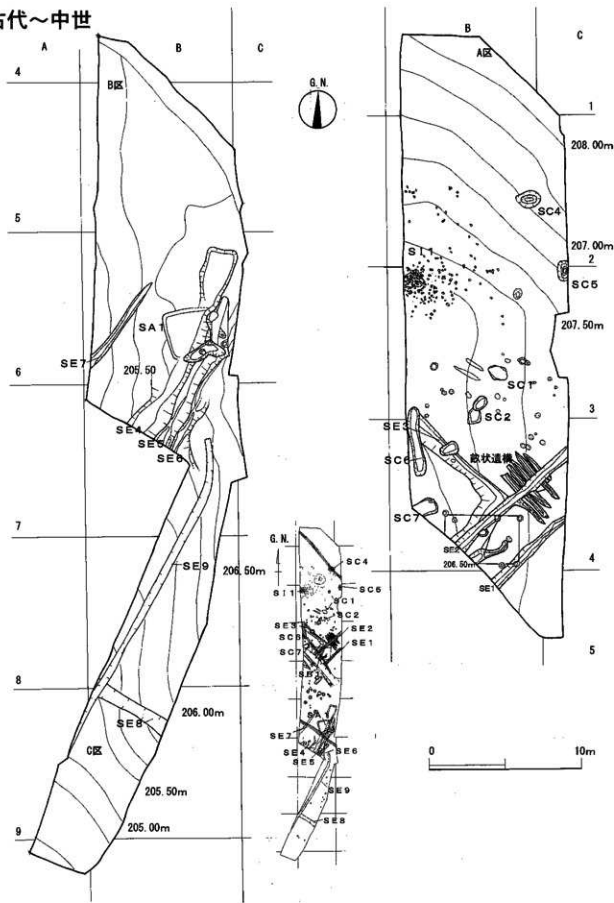
123～127の坏部の器面調整は外面はミガキ、内面は工具による丁寧なナデ、指頭痕などが見られる。

131は砥石である。長楕円形の扁平な礫を使用していると思われる。片面に研いた痕跡が見られる。

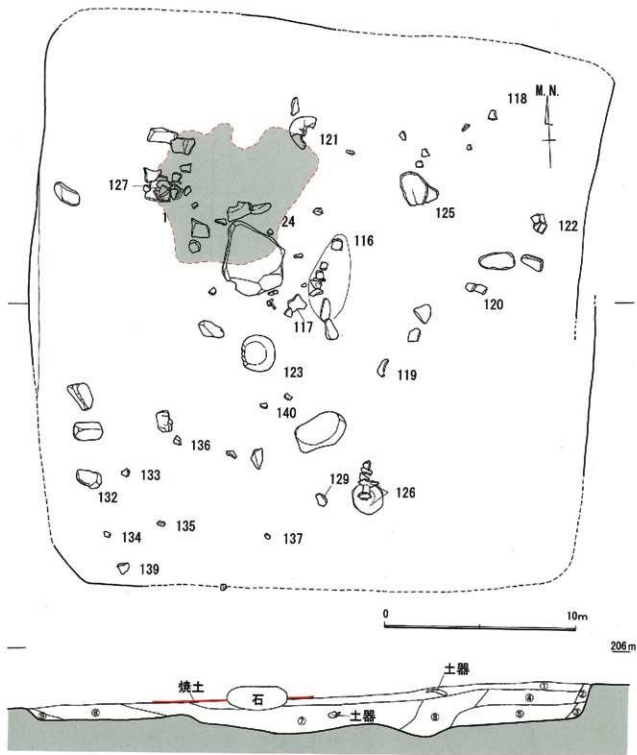
132～140は甕である。132から139は口縁部にくびれを持たないバケツ状の器形を呈するもので、胴部上位に貼付刻目突帯が巡るものである。口縁部が内湾し、両面とも工具によるナデ仕上げで、いずれの突帯も断面三角形を呈し、刻目内には布目圧痕が見られる。外面には全体的にススが附着している。132・134・139は口縁部端部外面に133・134・139は口縁部端部内面に指押えが見られる。135は、2条の貼付刻目突帯を有する。

140は壺の底部で、132と同じ形状を呈すると思われる。外面は丁寧なミガキ、内面は丁寧なナデが施され、一部黒変が見られる。

古代～中世



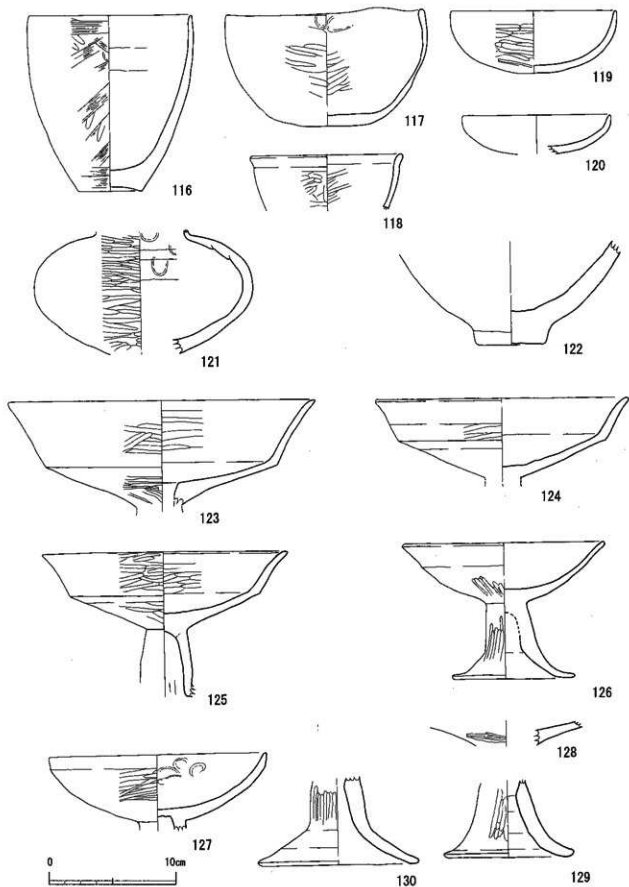
第18図 豊満大谷遺跡 古代から中世の遺構分布図 (1/250)



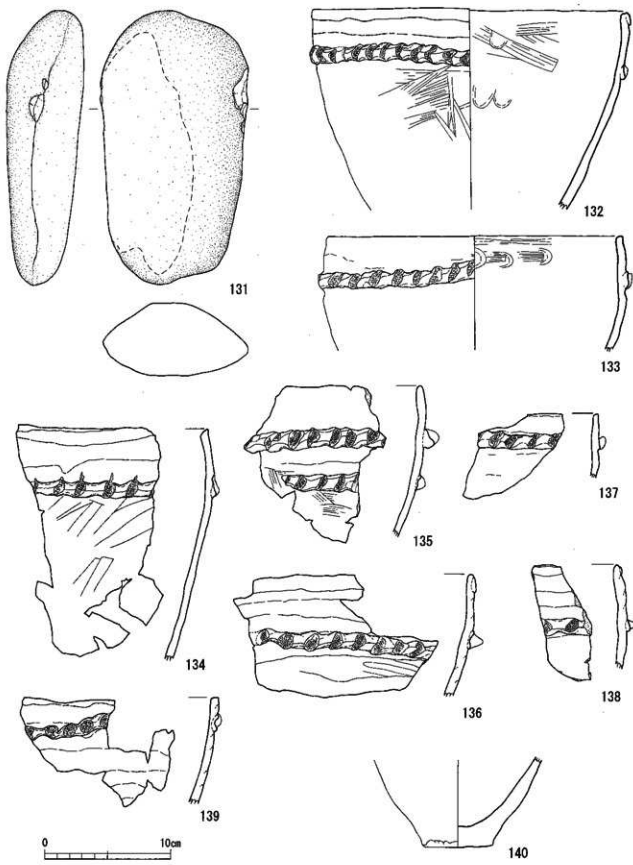
【土層注記】 SA1

- ①：暗褐色 (10YR 3/3) 細かい粒子でしっかりしめる硬質、ねばりがあり、0.5～2mm大の黄色のボラを含む。
 ②：暗褐色 (10YR 3/4) ④に類似し、やや粗い粒子だが見え、硬質でねばりがあり、0.5～2mm大の黄色のボラを多少含む。
 ③：黒褐色 (10YR 3/2) ⑤に類似し、粗い粒子だが見え、0.5～2mm大の黄色のボラを少し含む。
 ④：暗褐色 (10YR 3/4) 細かい粒子でしっかりとしまる。硬質で0.5～2mm大の黄色のボラを密に含む。
 ⑤：黒褐色 (10YR 3/2) やや粗い粒子だが見えしっかりとしまる。硬質で粘性があり、0.5～2mm大の黄色のボラを含む。
 ⑥：黒褐色 (10YR 3/1) 細かい粒子でしっかりとそまる。硬質で1～3mm大の黄色のボラを含む。
 ⑦：黒色 (10YR 2/1) ⑥と類似し、木炭を多く含む。
 ⑧：暗褐色 (10YR 3/2) ④と類似し、④に比べて明るい。
 ⑨：暗褐色 (10YR 3/4) ②と類似

第19図 豊満大谷遺跡 1号竪穴住居跡実測図 (SA1: 1/20)



第20圖 豊満大谷遺跡 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)

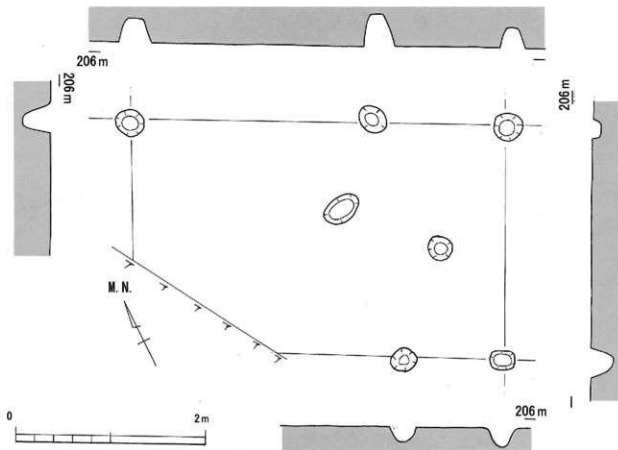


第21圖 豊満大谷遺跡 1号壺穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (SB1: 第22図)

A区の南端中央部で検出した掘立柱建物跡で梁間1間×桁行2間の長棟構造である。主軸方位はN-86°-Wの東西棟である。規模は北側柱の桁行4.9mで柱間隔は北から1.8m、3.1mでばらつきがある。南側桁行は一部削平しており検出できない部分があった。柱穴はほぼ円形を呈しており、直径28~32cm、深さ23~56cmとばらつきが見られた。埋土は暗褐色土層で、埋土中から遺物はなかった。



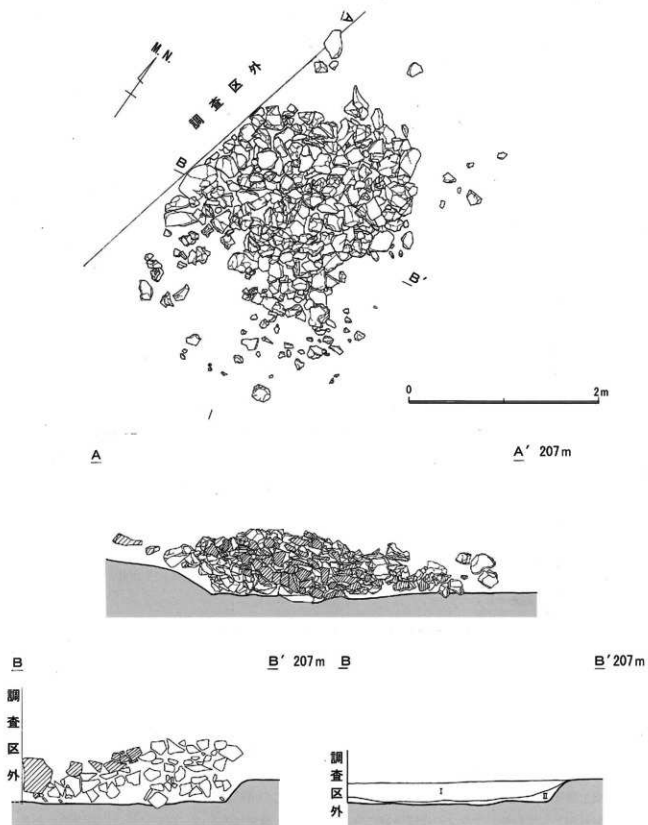
第22図 豊満大谷遺跡 1号掘立柱建物跡実測図 (SB1: 1/40)

(3) 集石状遺構

1号集石状遺構 (第23図)

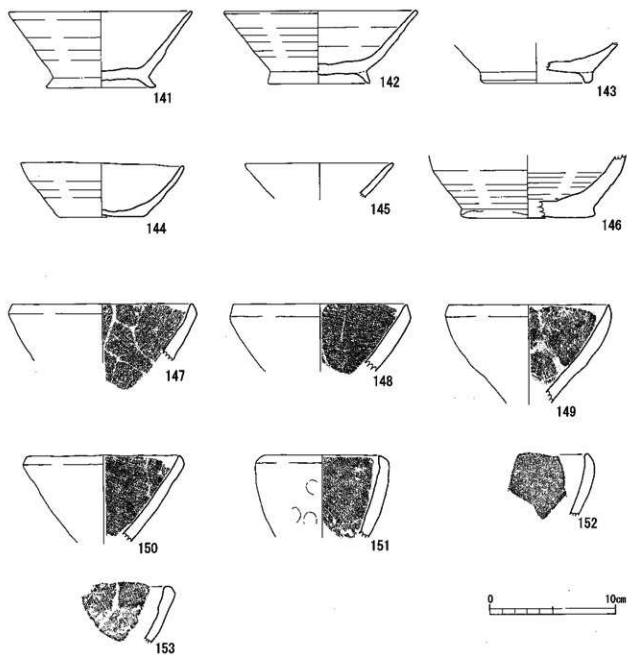
A区の西壁沿中央部のB3グリッドから検出された。確認面は第IV層(御池ボラ混褐色土)の上面で遺構は250×400cmの範囲に礫が見られた。検出時は平面的に土坑を確認することはできなかったが、約25cmの厚みで重なった礫を除去すると、浅い皿状の落ち込みとなった。埋土は単純な2層をなし、上層は径3mm内外の御池ボラ混褐色土層(やや硬)、下層は径5mmの御池ボラを含む暗褐色土で固い。なお、礫5~20cm前後の大きさで、全体に角張ったもの、赤化したものが多かったが、炭化物・焼土等は確認できなかった。遺物は多量に出土している。

出土遺物は第24図(第5表~第6表)に示している。この遺構に伴う遺物(141~153)は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物は内訳は、141~146は土師器境である。141~143は高台付の坏で器壁は薄く、両面の調整はナデである。144は底部と体部の境がやや丸みを持



第23図 豊満大谷遺跡 1号集石状遺構実測図 (S 1 1 : 1/40)

ち鋭角な稜を成さない。内外面とも回転ナデにより成形される。145は器壁が薄く、内外面の調整はナデである。146は斜めに張り出す円盤状の底部を持つ。147～153は布痕土器の口縁部から胴部である。全体的に軟質で長時間被熱を受けたような橙色を色調とする。体部から内湾気味に延びていき、端部断面を三角形に形成する。外面は指頭痕が残るナデ調整で、内面は布目圧痕を残している。



第24図 豊満大谷遺跡 1号集石状遺構出土土器実測図(1/3)

(4) 土坑

1号土坑 (SC1: 第25図)

A区中央南寄りのB4グリッドから検出された。確認面は第V層(橙色土層)で、平面形態は不整楕円形で断面形態は皿状を呈する土坑である。既掘部分の規模は長軸約1.34m、短軸約1.03m、深さ23cmを測る。埋土は2層をなし、I層は径3mm内外の御池ボラ混濁褐色土層、II層は径5mm内外の御池ボラと炭化物粒子を含むにぶい黄褐色土層である。底面は径4mmの御池ボラを含む暗褐色土で固い。II層上面に御池ボラの細粒がブロック状に存在していた。

遺物は第29図(第6表)に示している。この遺構に伴う遺物(154~165)は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。内訳は154・155は甕である。口縁部から頸部にかけてのもの、155は胴部上位に貼付刻目突帯が巡るものである。156~158は坏である。156・157は外傾して開く口縁部である。159は布痕土器の口縁部、160は底部である。161~165は鉢である。口縁部が162・163は直立気味で、164・165は外反する。

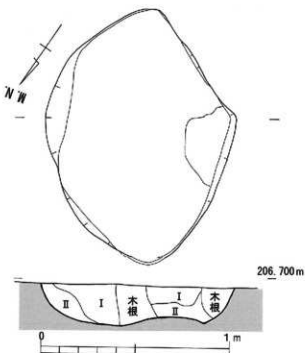
2号土坑 (SC2: 第26図)

SC1の南側に隣接し第V層上面より検出された土坑である。平面形態は不整楕円形で断面形態は皿状を呈する土坑で2つが重なり合った状態で検出された。規模は長軸約2.07m、短軸約0.82m、深さ27cmを測る。埋土は5層に分かれ、I層は御池ボラと炭化物が多く混在する黒褐色土層、II層は径5mm内外の御池ボラを多く含む褐色土層、III層は御池ボラを多量に含み炭化物が混在する暗褐色土層、IV層は御池ボラを多量に含み炭化物が混在する暗褐色土層(軟)、下層は御池ボラの細粒がブロック状に入った暗褐色土層である。底面は御池ボラを含む暗褐色土で固い。

出土遺物は第29図(第6表)に示している。この住居に伴う遺物(166・167)は主に中・下層から出土しており、遺物の内訳は、166は甕の底部で外傾しながら立ち上がる。167は浅鉢の口縁部で、端部に窪みが見られる。

4号土坑 (SC4: 第27図)

A区中央北寄りのB2グリッドから検出された。確認面は第IV層(御池ボラ混濁褐色土)で、平面形態は不整楕円形で断面形態は皿状を呈する土坑である。規模は長軸約3.3m、短軸約2.55m、深さ65cmを測る。埋土は3層をなし、I層は径5mm内外の御池ボラ混濁褐色土層(やや硬)、II層は径5mm内外の軽石を少量含むにぶい橙色層、III層は径5mm内外の御池ボラを含む褐色土層である。底面は径5mmの御池ボラを含む暗褐色土で固い。径10~35cmの礫が床面から浮いた状態で見られた。埋土中からの遺物はなかった。



【土層注記】SC1
I: 褐色土(10YR5/1)粘性がありしまっている。1~3mmの明黄色の軽石を含む。
II: にぶい黄褐色土(10YR4/5)粘性がややあり固くしまっている。1~3mmの明黄色の軽石を含む。炭化物も混在する。

第25図 豊満大谷遺跡 1号土坑実測図(1/20)

5号土坑 (SC5 : 第27図)

A区の東壁沿やや中央部のC3グリッドから検出された。東側の一部は調査区外の山裾に伸びているため、プランの約3分の2を検出した。確認面は第IV層(御池ボラ混褐色土)上面で急斜面直下に掘られており、平面形態は不整形で断面形態はU字状を呈する井戸状の土坑である。規模は長軸2.35m、短軸1.85m、深さ2.2mを測る。北東側から約38°の傾斜でU字型に下がっていく。傾斜の変わり目には足場状の段が見られ、南東側は初めから約130°で下がっていく。壁体は崩れやすくなっており、円形状に落ち込んでいく。埋土の主体は黄褐色粒子を含む黒褐色土と暗褐色土の複雑な混在土で覆われている。埋土中からの遺物はなかった。

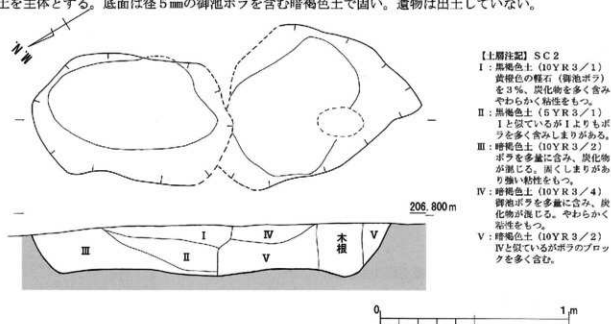
6号土坑 (SC6 : 第28図)

A区南端部の南西側、B4グリッドから検出された。確認面は第IV層(御池ボラ混褐色土)上面で、平面形態は長方形で断面形態は碗状を呈する土坑である。規模は長軸約4.5m、短軸約0.62m、深さ16cmを測る。北側端の部分はSE3号、ピットと切り合い、さらに調査区外に伸びている。埋土は、径1mm内外の御池ボラを多く含む暗褐色土と混在土を主体とする。底面は径5mmの御池ボラを含む暗褐色土で固い。

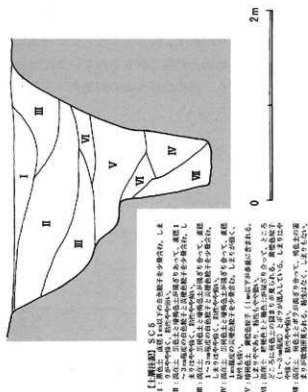
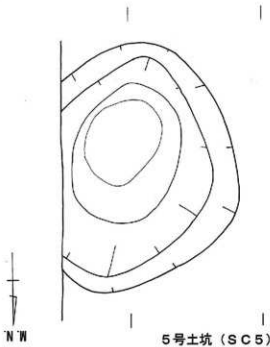
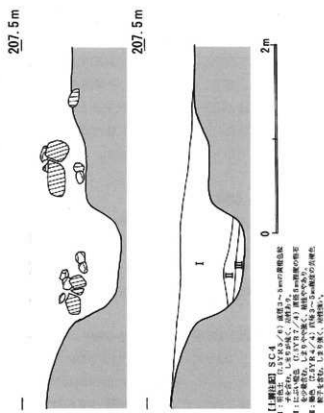
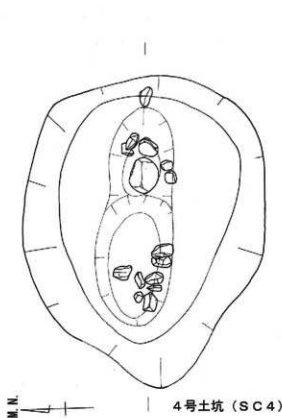
出土遺物は第29図～第30図(第6表)に示している。この遺構に伴う遺物(168～174)は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。内訳は、168・169は甕である。168・169は同一個体と考えられる。胴部上位に貼付刻目突帯が巡る。171は磨研土器の浅鉢である。半球形状で両面ともミガキ後丁寧なナデによる調整が見られる。172・173は粗製の深鉢である。172・173は口縁部で、173は口縁部外面に断面三角形の貼付突帯を持つ。174は編目圧底を持つ粗製の浅鉢である。

7号土坑 (SC7 : 第28図)

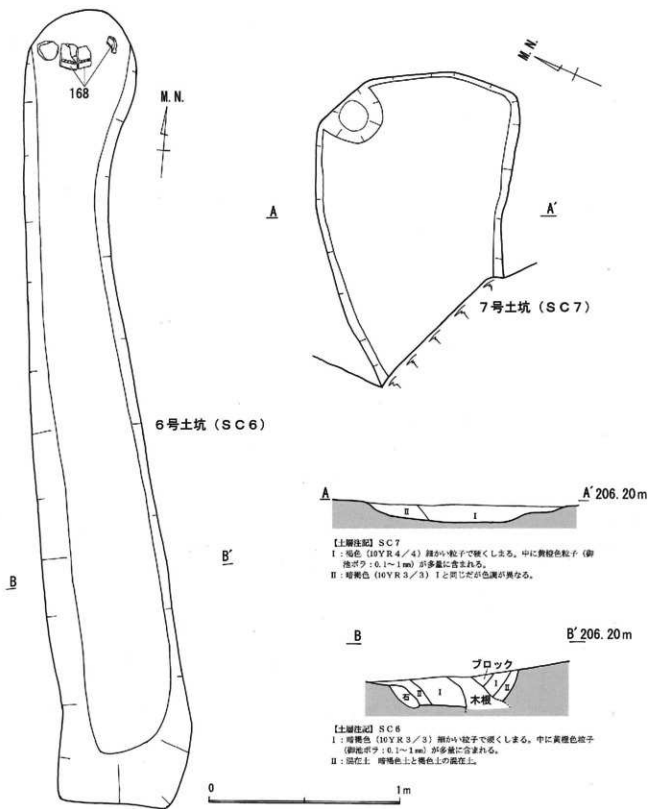
A区南端部、SC5の南1.4mから検出された。確認面は第IV層(御池ボラ混褐色土)で、平面形態は長方形で断面形態は皿状を呈する土坑である。規模は長軸約1.25m、短軸約0.95m、深さ10cmを測る。南端の部分はB区との境で削平されている。埋土は、径1mm内外の御池ボラを多く含む暗褐色土と混在土を主体とする。底面は径5mmの御池ボラを含む暗褐色土で固い。遺物は出土していない。



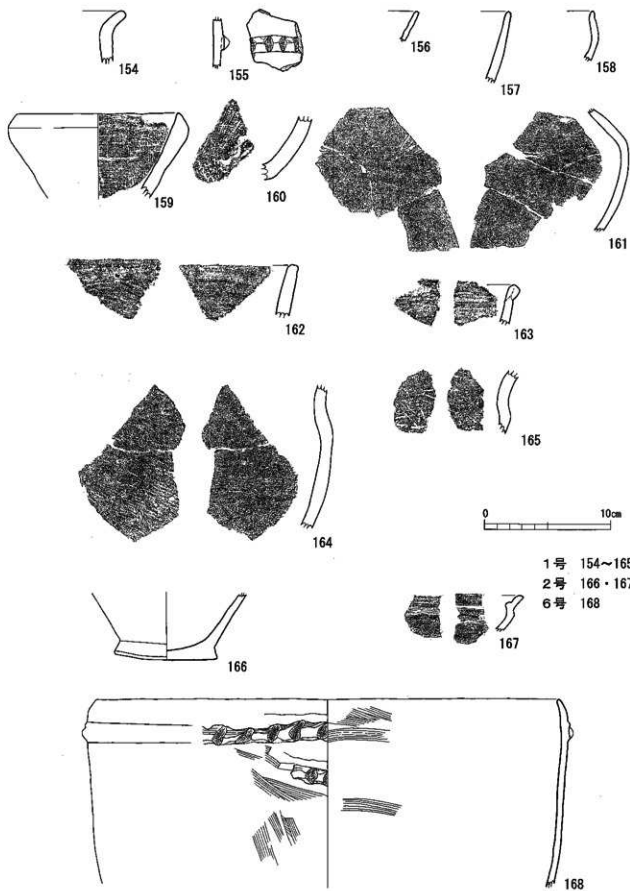
第26図 豊満大谷遺跡 2号土坑実測図 (SC2 : 1/20)



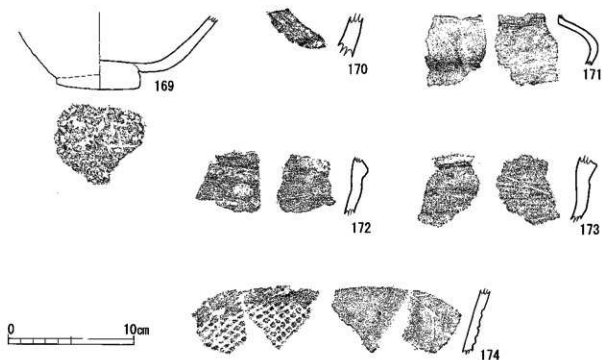
第27図 豊満大谷遺跡 4号・5号土坑実測図 (SC4・SC5: 1/40)



第28図 豊満大谷遺跡 6号・7号土坑実測図 (SC6・SC7 : 1/20)



第29图 豊満大谷遺跡 1号・2号・6号土坑出土土器実測図(1) (1/3)



第30図 豊満大谷遺跡 6号土坑出土土器実測図(2) (1/3)

(5) 溝状遺構

1号溝状遺構 (SE1: 第32図)

A区南端部で検出された。B区から連続している溝と考えられるが、A・B区の境が削平されているためにB区における溝は残存していない。溝は山の斜面に沿って南東方向に約6.45m延び、その先は調査区外へ続く。溝の幅は0.36m～0.6mを測る。上部削平のため、遺存する深さは最深部で15cmと浅い。底面は断面U字形を呈し、上位に向かって次第にさらに浅くなる。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や1～1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。

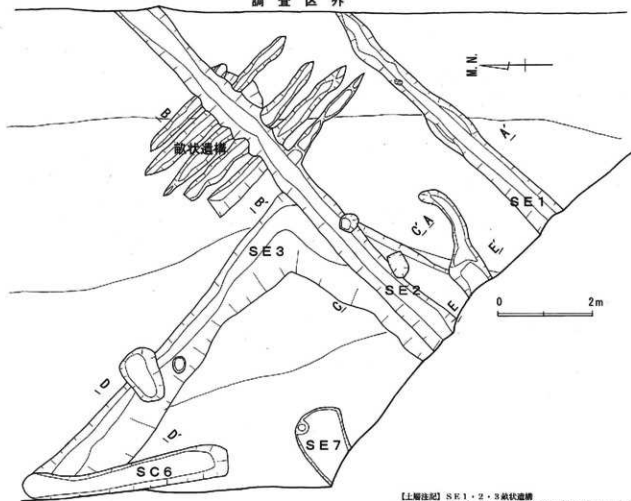
2号溝状遺構 (SE2: 第32図)

1号から、2.6m離れて平行している。南西端は削平のため不明で残存全長9.5mである。溝の幅は0.56～0.62cmを測る。これも上部削平のため深さは最深部で16cmと浅い。底面は断面U字形を呈し、北西に向かって次第に浅くなる。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や1～1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。

3号溝状遺構 (SE3: 第32図)

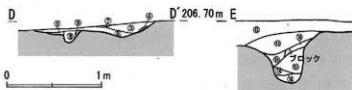
2号溝状遺構と切り合う形でL字状に折れる溝である。1号・2号と方向性を同じくするので、内区面を護る最も内側の施設であろうか。屈折部はほとんど直角をなしている。幅は1.1～1.55mで、1、2号より大きな溝である。底面は断面U字形を呈し、床面からの深さは25cmを測る。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や1～1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。

調査区外



【上層注記】SE1・2・3 陥状遺構

- ①: 埴土層 (2.8GY 4/1) やや粘質で細かい粒子でしまりがある。中に0.1~0.5mm次の黄色い、白色のボラを多く含む層がある。
- ②: 黒褐色 (10Y R 3/1) やや粘質で細かい粒子でしまりがある。中に5mm次の黄色いボラを多く含む。一薄層のような黒色の粒が見られ包含層と思われる。
- ③: 埴土層 (N 4/7) 細かい粒子だがボラを含みのために硬くしめる。0.5mm~1.5mm次の文形ボラを多量に含む。
- ④: 黄褐色 (10Y R 2/2) 細かい粒子と細かいボラの混在土で硬質。黄色いボラや褐色の粒子が混ざりやや粗い。
- ⑤: 黒褐色 (10Y R 2/3) 粘質で細かい粒子でしまりがある。1mm次の黄色いボラを多く含まれるだけで混在しない。
- ⑥: 黄褐色土 文形ボラを多く含む褐色土と黒褐色土の混在。
- ⑦: 黄褐色土 黒褐色の粒と黄色の粒が混ったように混在。
- ⑧: 黄褐色土 ボラを含む褐色の粒との混在土。
- ⑨: 黄褐色 (10Y R 5/1) 細かい粒子でやや砂質、しまりがない。
- ⑩: 褐色 (N 3/7) 2~4mm次の褐色のボラを多量に含む。
- ⑪: 褐色 (N 2/7) 細かい粒子で硬くしめる。中に0.5~2mm次の褐色のボラを多く含む。低層度で多量に含まれる。
- ⑫: 黒色 (10Y R 2/1) ⑩との混在に近い。
- ⑬: 黒褐色 (10Y R 2/3) 細かい粒子でしまりがある。中に0.1~1mm次の黄色いボラを含んでいる。
- ⑭: 黒色 (10Y R 1.7/1) 細かい粒子でしまりがある。中にはにも含まない。
- ⑮: 黄褐色土 ⑩と褐色の粒が混在する。



E' 206.70m

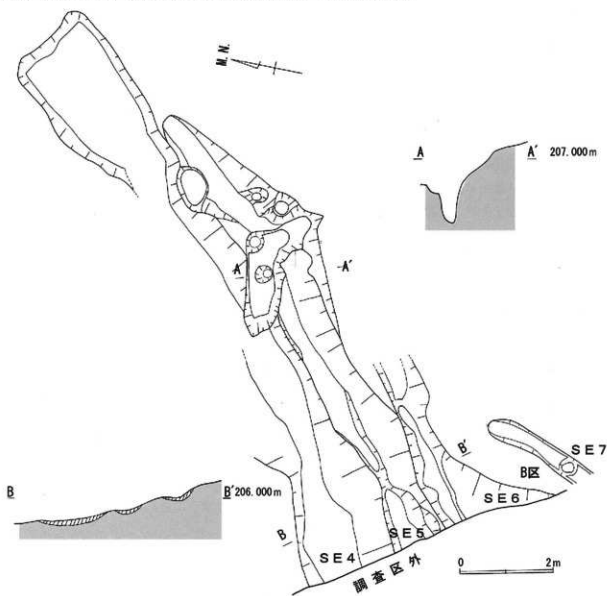
第31図 豊満大谷遺跡 1号・2号・3号溝状遺構、陥状遺構実測図 (1/80)及び土層断面実測図 (1/40)

4・5・6号溝状遺構 (SE4・SE5・SE6 : 第32図)

4号・5号・6号溝状遺構は、B区南端部で検出された。B区南端部分は山の斜面上で土地改良により大部分が掘削されている状況で南端部分から南西に向けての溝は残存しない。4号・5号・6号の三本の溝は隣接しながら平行して延びていることから、一対の遺構として取り扱うのが妥当とおもわれる遺構である。4号は、5号に平行しながら北東に13.5m延び、溝の幅は約1.2mを測る。溝中央部はSA1と切り合っているため、上部は削平され、遺存する深さは最深部で0.5cmと浅い。

5号は全長10.3m、全幅0.9~1.3mを測り、4号より全幅でやや狭くなる。方向は4号と平行し、大部分が4号東側側面と隣接しており、溝中央から北東に円形の浅い小ピットが5基遺存する。

6号は全長3.6m、全幅2.5~0.8mを測るが、その先は削平され検出不可能である。方向は5号と平行し、一部分は5号と切り合っている。三本の溝とも底面は断面U字形を呈し、径1~5mmの御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。なお、不明遺構が4号・5号溝中央部にまたがって検出された。規模は、長軸約2.8m、短軸約0.93m、深さ82cmでピット2基を配する。



第32図 豊満大谷遺跡 4号・5号・6号溝状遺構実測図及び土層断面実測図 (1/80)

7号溝状遺構 (SE7: 第33図)

C区中央部の第V層(御池ボラ層)上面で検出された。走行は斜面にそってきたから南西で、検出全長は約24.3m、溝の幅は約1mを測る。断面U字形を呈し、径0.5~1.5mmの御池ボラを含む暗灰色土で硬くしまっている。耕作等による攪乱のため、遺構上部が飛ばされており、検出面からの深さは10~15cm程度しかない。4号、5号、6号と同じ方向性を有するので相互に関連する遺構であろう。南西の端はさらに浅くなり以降検出ができない状態であった。埋土は、御池ボラを少し含む黒色土で、ややしまりがある。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

8号溝状遺構 (SE8: 第34図)

C区中央部の第V層(御池ボラ層)上面で検出された。調査区を東西に横断している。東から西に向かって傾斜している。全長約5.3m、全幅約1mを測る。底面は断面U字形を呈し、径1~5mmの御池ボラを含む暗灰色土で硬くしまっている。耕作等による攪乱のため遺構上部が飛ばされており、検出面からの深さは8~10cm程度しかなかった。埋土は、御池ボラを少し含む黒色土で、ややしまりがある。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

9号溝状遺構 (SE9: 第34図)

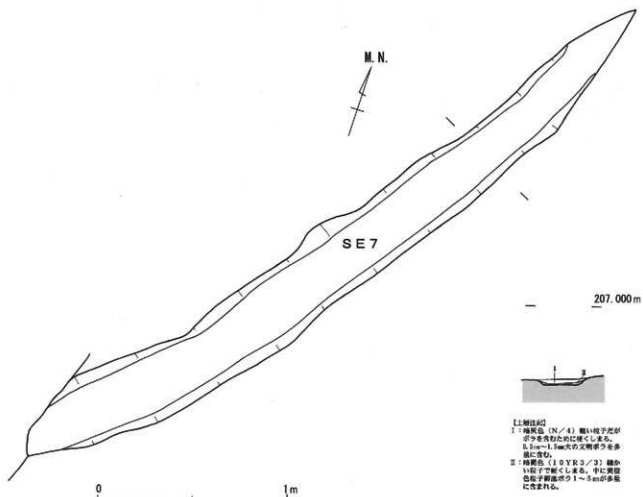
B区の北西に延びる溝状遺構である。全長4m、全幅0.4mを測るが、さらに北西に延びているものと推定される。4号、5号、6号と同じ方向性を有するので相互に関連する遺構であろう。上部は削平され、遺存する深さは最深部で5mmと浅い。埋土主体は粗い黄褐色粒子や1~1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。断面は浅いU字形を呈し、径1~5mmの御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

(6) 畝状遺構

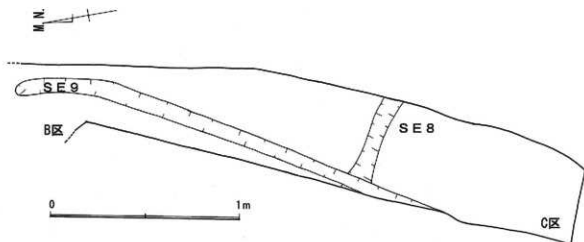
畝状遺構 (第31図)

中世以降の畝跡と思われる畝状遺構が第IV層(御池ボラ・白ボラ混褐色土)上面より検出された。白ボラはA区中央部南側に分布していたが、畝状遺構として最も残存状況がよく明瞭なラインが見えたのはA区南端部東側であった。平面的に平行して走る白ボラが残る部分が畝の基底部で、その間の白ボラが混入する黒褐色土を畝間として捉えた。畑地に降灰した白ボラを掘り上げて畝を作ったため、畝間は白ボラを混入する黒褐色土となったものと思われる。

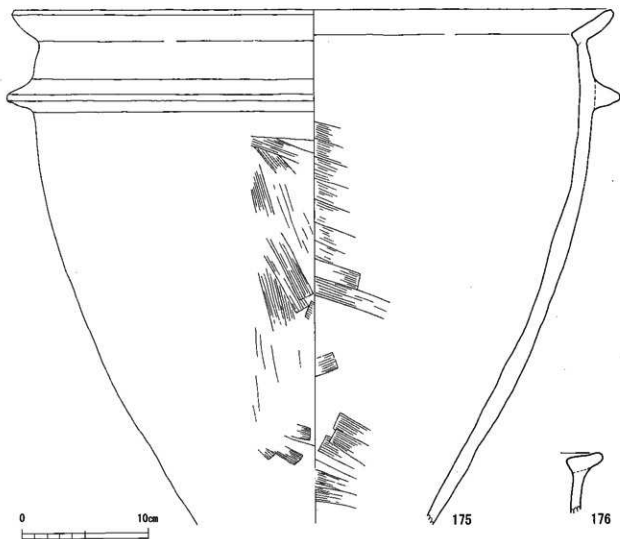
畝状遺構は、北西-南東方向に平行して走り、遺構の中央をSE2が北東-南西方向に走っている。溝と溝の間隔は約10cmである。遺構の規模は、長さは約1.5~2.0m、溝幅は約0.3~0.4mを測る。上部削平のため、遺存する深さは最深部で3~5cmと浅い。底面は断面U字形を呈し、径1~5mmの白ボラを含む黒褐色土で硬くしまっている。遺構は、一見整然と連なるように見えるが、後世の耕作等の影響を受けているためか部分的に不明瞭な部分もある。



第33図 豊満大谷遺跡 7号溝状遺構実測図 (SE7 : 1/40)



第34図 豊満大谷遺跡 8号・9号溝状遺構実測図 (SE8・9 : 1/200)

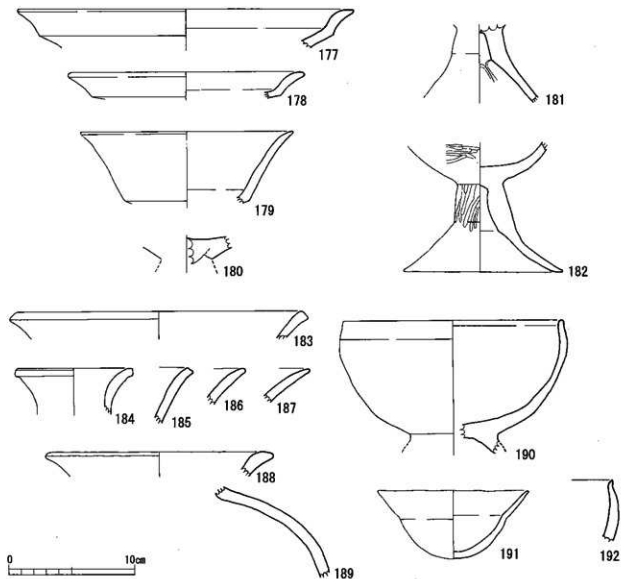


第35図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(1) (1/3)

(7) 包含層出土の遺物 (第35図～第43図)

弥生時代～中世の遺物包含層は第Ⅲ層～第Ⅳ層である。遺物は土器を中心に甕、壺、坏、高坏、鉢等が出土している。個々の遺物についての詳細は観察表 (第6表～第9表) に記載している。

第35図175～第37図192は弥生時代から古墳時代にかけての土器群であると思われる。175・176は弥生土器である。175は大型甕の口縁部が外側に大きく開き、内面に明瞭な稜を持つ。胴部上位に断面台形の貼付突帯をもつ。内外面ともハケ状工具によるナデの後ナデで突帯上部～中位にかけてススが付着している。内面は風化がはげしい。176は大型甕の口縁部である。内外面とも横方向のナデで、外面の口縁部下位にススが付着している。177～182は高坏である。177は坏部で、坏底部と口縁部との間にやや稜をもつ。口縁部は外側に開き、口縁端部が外側に反る。調整は外面はミガキ、内面はナデである。178は坏部で、坏底部と口縁部との間に明瞭な稜をもつ。口縁部は外側に反る。調整は外面ミガキ、内面ナデである。179は坏底部と口縁部との間に稜をもたない坏部で、口縁部が外側に反る。調整は外面はミガキでススが付着しており、内面は回転ナデである。180は坏底部で内外面ともミガキを施している。181は脚部で短い楕広ガりの「ハ」字状である。調整は内外面ともナデである。182は坏底部から脚部である。坏部は稜をもたない塊状を呈すると思われる。脚部は短い楕広ガりの「ハ」字状である。調整は



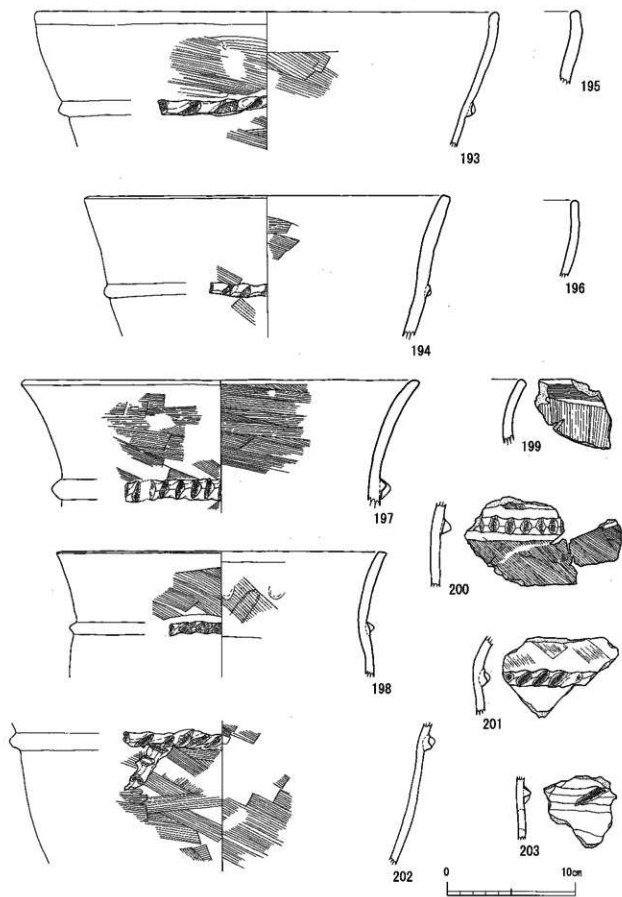
第36図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(2) (1/3)

内外面ともヘラミガキを施している。183～189は壺である。183は短頸壺で口縁部は外反する。調整は内外面とも回転ナデである。184は短胴の壺の口縁部片である。外面に回転ナデの後工具によるハケ目が施されており内湾が強い。185は口縁部が外方に開く小型の壺の口縁部片である。調整は内外面ともナデである。186～188は口縁部が斜め上方に延びる口縁部片で、186・188の調整は内外面にナデを施し、187は外面に横方向のナデ、内面にナデ、ミガキが施されている。189は肩部の張った偏球形を呈すると思われる。調整は内外面ともナデである。外面胴部中位にススが附着している。190～192は鉢及びび罎である。190は脚台を有し、胴部から口縁部にかけて内湾しながら延びている。調整は外面はミガキの後ナデ、内面は横方向のナデが見られる。191は胴部から口縁部にかけて内湾しながら外傾している。内外面ナデを施している。192は胴部から口縁部にかけて内湾しながら直立し口縁端部がわずかに外反する。調整は内外面ともナデ調整である。

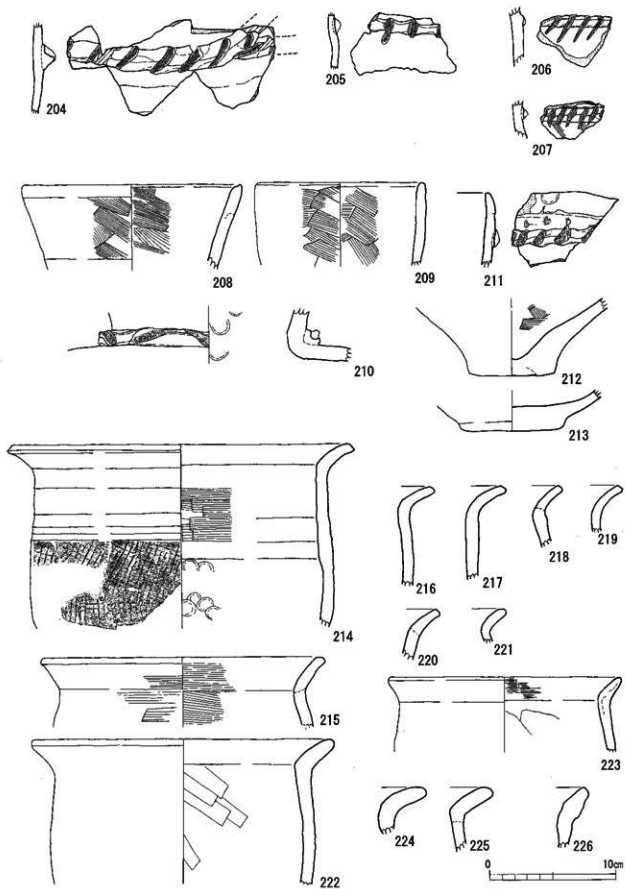
第37図193～第38図207は古墳時代の貼付刻目突帯をもった甕である。193～196は口縁下部にくびれをもたずに口縁部がわずかに内湾するバケツ状の器形を呈す。193・194は口縁部外面に断面三角形の貼付

刻目突帯が巡るものである。内外面ともハケ目後ナデ仕上げで刻目内に布目圧痕が見られる。195・196は内外面ともにナデが施されている。197～207は口縁部が頸部から緩やかに外反する形状を呈する。197・198・200は貼付突帯部でいずれの突帯も断面三角形を呈し、刻目内に布目圧痕が見られる。外面は工具による横方向のナデ、斜方向のハケ目が施され、内面は横・斜方向のハケ目、ナデが施されている。199は口縁部片である。外面は横方向のナデ、縦方向のハケ目を施しススが附着している。内面はナデ調整である。201～204は断面三角形の刻目突帯を貼り付けている。201は外面は斜方向の内面は横方向のハケ目が施されている。202は内外面とも斜方向のハケ目である。内面の一部に指ナデと黒変が見られる。203は胴部に貼付刻目突帯をもつ甕である。刻目内には布目圧痕が見られる。内外面ともナデ調整である。204は外面は斜方向のハケ目、内面はナデで外面にはススが附着する。205は断面長方形の刻目突帯を貼付刻目内に布目痕が見られる。外面はナデ、内面は指ナデ、ナデの調整が施されている。206・207は小さな断面三角形の突帯を貼り付けている。調整は206は外面はナデ、内面は斜方向のナデを施し、207は外面にススが附着しており、内面は横方向のハケ目が施されている。208～210・212・213は古墳時代の壺と思われる。208は長頸壺の口縁部から頸部付近である。内外面とも斜方向のハケ目調整である。209は口縁部が僅かに内湾して直口する。外面は横・斜方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目が施されている。210は直口壺の頸部に交互に刻目がある突帯をもち、刻目内に布目圧痕が見られる。外面は横方向のナデ、内面は工具によるナデである。一部指頭痕が見られる。211は壺の口縁部から頸部付近で口縁中位に刻目突帯をもつものである。212は平底を呈する壺の底部で、外面は横・斜方向のナデ、内面はハケ目、ナデが施されている。213は壺か鉢の底部と思われる平底を呈する。外面は横方向のナデ、内面はナデが施され一部黒変が見られる。

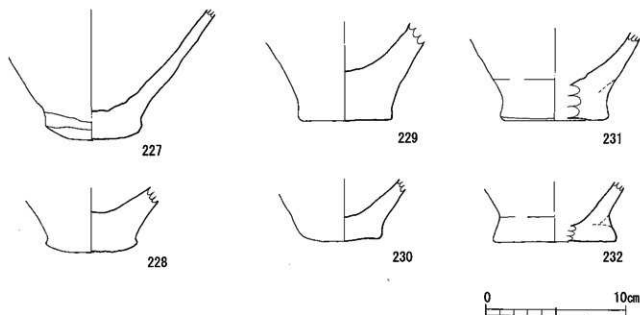
214～226は長胴形の土師器の甕である。214・221は胴部にやや膨らみをもつものと思われ、頸部がくびれて口縁部が外反している。調整は内外面ともナデである。214は外面の胴部中位に格子目のタタキが見られ、内面には指頭痕が見られる。215は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、調整は内外面とも横方向のナデで頸部下位にハケ目が見られる。202は張りをもたない胴部から頸部にくびれをもたずに口縁部が大きく外傾する。調整は内外面とも横方向のナデで、内面には斜方向に線状の工具痕、黒変が見られる。218は胴部にやや膨らみをもつものと思われ口縁部は外反する。調整は外面は横方向のナデで、内面は横方向の描目、横方向のナデが施されている。219は胴部にやや膨らみをもつものと思われ、口縁部が大きく外反している。調整は外面は横方向のナデで、内面は横方向のハケ目を施している。222・224～226は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、口縁部が最大径となるものである。222は内面に粘土紐継目が明瞭に残るもので、調整は外面に丁寧なナデ、内面に横方向のナデ、斜方向のケズリが施されている。223はくびれをもたずに長い胴部が内湾しながら延びる。頸部がくびれて短い口縁部が外に開くもので、胴部中位程に最大径をもつ。外面にはナデ、内面は横方向のナデ、ヘラケズリが施されている。224・225は内面に粘土紐継目が明瞭に残り、外面はナデ、内面は横方向のヘラケズリ、ナデが施されている。器壁が1.2～1.4mmと厚い。226は外面は横方向の粗いナデ、内面はヘラケズリが見られる。227～232は甕の底部である。227はわずかにくびれをもって内湾する胴部が外方に延びる。内外ともナデ仕上げである。228は端部がわずかに張り出し、平底を呈する。内外面ともナデである。229は平底でくびれをもたずに胴部が直線的に立ち上がるものと思われる。内外面ともナデである。230は端部に張り出しをもたないもので、平底を呈する。内外面とも不定方向のナデである。231はわずかにく



第37圖 豐滿大谷遺跡 包含層出土土器実測圖(3) (1/3)



第38圖 壹溝大谷遺跡 包含層出土土器実測図(4) (1/3)

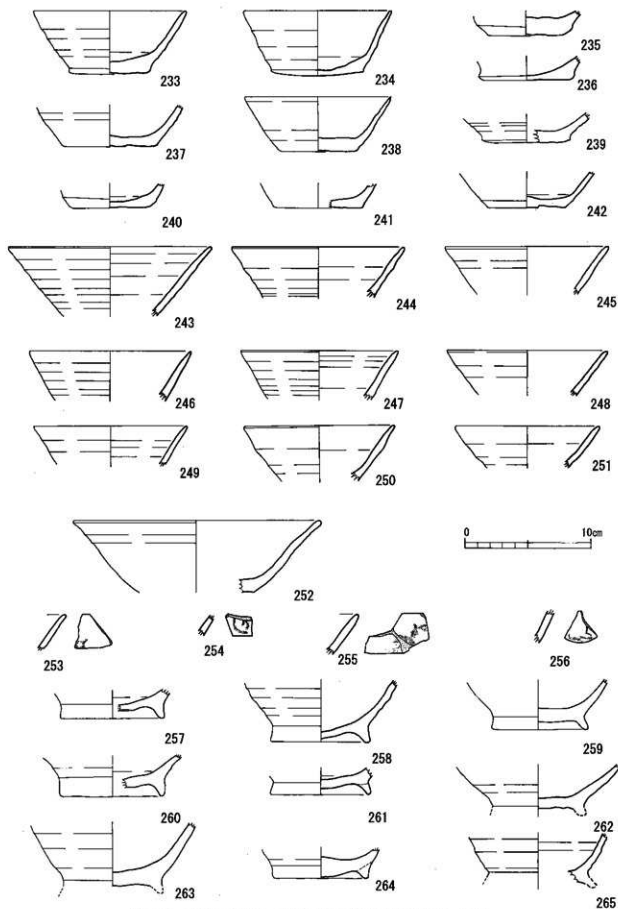


第39図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(5) (1/3)

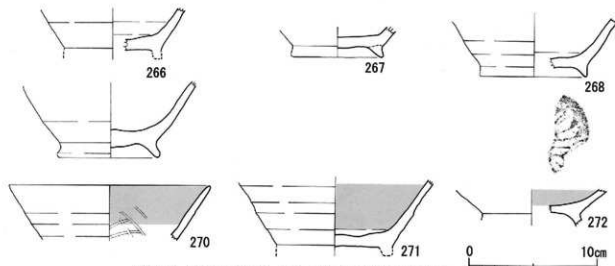
びれをもって内湾する胴部が外方に延びるものと思われ、底部の中央部が僅かに窪む。外面はナデ、内面は粗いナデである。232は底部がくびれ、端部が大きく張り出すものと思われる。内外面ともナデである。

第40図233～256は高台の付かない坏である。器形によってⅢ類に大別される。坏Ⅰ類(233～242)は口径と底径の差が小さく器高の低いもので、大型(234・236・237・241)、中型(233・235・238・240・242)小型(239)に分かれる。さらに体部の遺存しているもので観察すると、体部から口縁にかけてごくわずかに内湾(233)、外反するもの(235・237～242)、直線的に開くもの(234)に細分される。これらの中には底部の形態が235のように厚手のものと、234・244のように薄手のものが混在しているため、さらに細々分することも可能と思われる。底部は全てへら切りと思われ、器面調整は内外面とも回転ナデである。235・240・242は外面に意図部へら削りが施され、238は内面に回転ナデ後ナデが施されている。坏Ⅱ類(234～252)は底径と口径の差が大きくなり、体部は基本的にラップ状に大きく開くタイプのもので主流を占め、さらに体部を観察すると、体部から口縁にかけて、ごくわずかに内湾するもの(250・251)、緩く外反するもの(243・245・247・249・252)、直線的に開くもの(244・246・248)に細分される。器壁は体部から口縁部にかけて非常に薄く、口唇部は鋭利な雰囲気をもつ。器面調整は243～246・248・250～252は内外面とも回転ナデで、247・249は内外面ともナデである。坏Ⅲ類(253～256)は基本的に小型のもので器壁は薄い。墨書土器である。器面調整は内外面とも回転ナデである。なお253～256の体部に墨書がみとめられたがいずれも判読不可能であった。

257～269は高台が付く埴である。体部上半をほとんど欠いている為、高台の形状で細分した。257・258・265・266(高台付埴Ⅰ類)は高台が外方に開き端部が平坦に近いもので、高台上位に屈曲部があり段を有する器形と思われる。262～264は高台が外方に開き端部が丸いもので、体部は263のようにやや内湾しながら立ち上がるタイプと考えている。259・262・267～269(高台付埴Ⅱ類)は高台が外方に開き端部外方の強いナデ調整によって先端が尖り気味になるので、高台先端が三角形状になる。260(高台付埴Ⅲ類)は高台がほぼ直立断面が三角形状となる。264は器高に比して底部の器壁が厚く法量



第40圖 豐滿大谷遺跡 包含層出土土器実測圖(6) (1/3)



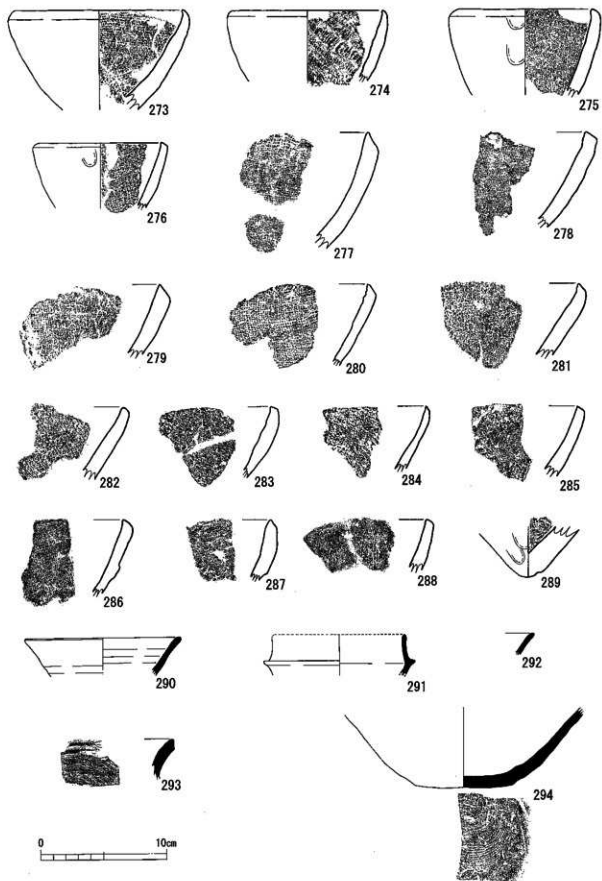
第41図 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(7) (1/3)

も小さい。器面調整は257・258・260・262・264～269は内外面とも回転ナデで、259・261・263は内外ともナデである。底部は全てヘラ切りと思われる。

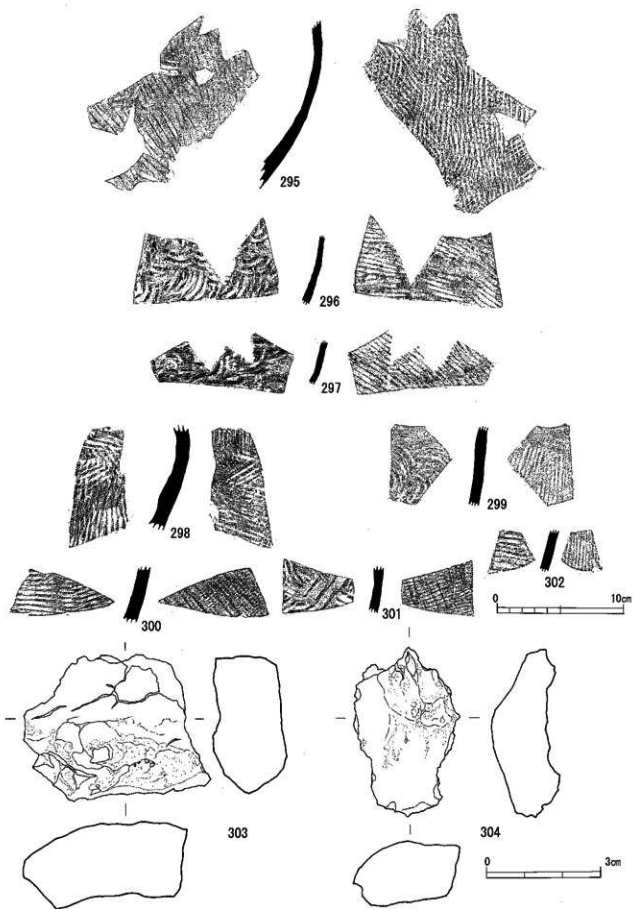
第41図270～272は黒色土器である。270は外面はナデ、内面は黒色でミガキが施され、光沢を帯びている。また外面に黒斑が見られる。271は高台の上位に屈曲部があり、段を有する器形を想像しているが体部や高台部を欠損しているため推測の域を出ない。また、271は内面にミガキが施され、光沢を帯びている。272は端部が外側に開いた高台が体部直下よりもやや外寄りに付き、底径はいくぶん小型化するが器高は低いままで、体部下端から緩く外反しながら立ち上がるものである。外面はナデで、内面は黒色でミガキが施されている。

第42図273～289は布痕土器である。製と塩や塩の運搬に使用されたと考えられている円錐状の器形でやや内湾気味の胴部と口唇部尖る特徴をもつ。南九州東岸部では一般的な形態で、「布痕土器」と呼称されている。内面に荒い布の圧痕、外面に指頭圧痕を残すものが多い。口唇部の形態では同一個体においても部分ごとにかなり差がみられるが、三角形の断面が基本とみられる。底部は尖底を基本とする。また口縁端部は製作過程によるヘラ切り落として面取りがされている。大きさや形状によって次のように分類できる。Ⅰ類は横からみた形状が横長の三角形状のもの(273)、Ⅱ類は横からみた形状が正三角形状のもの(274～278)、Ⅲ類は横からみた形状が縦長の三角形状のもの(279～288)、289底部である。

第42図290～第44図302は須恵器である。290・292は坏の口縁部片である。内外面とも回転ナデである。291は坏身、293は壺の口縁部片である。外面はタタキの上をナデ、内面はナデ調整である。294は東播系こね鉢の底部と思われる。糸切り底で、外面は回転ナデ後斜方向にナデを施し、内面は回転ナデ後横方向にナデを施している。295～297・300～302は壺の胴部である。295・296は外面は平行タタキ、296の内面は同心円当具痕がみられる。297は外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕がみられる。300・301は外面は格子目タタキ後ナデ、301の内面は同心円当具痕がみられる。302は外面は縦に平行タタキ、内面は斜方向に平行当具痕が施されている。298は壺の底部で、外面は格子目、平行タタキ、内面は横・縦・斜方向に平行タタキが施されている。299は壺の頸部である。外面は横方向にナデ、縦に平行タタキを施し、内面は横方向のナデ、同心円当具痕がみられる。303・304は土製のフィゴの羽口である。外器面にガラス質の自然釉が付着している。



第42图 丰满大谷遗址 包含层出土土器夹测图(8) (1/3)



第43圖 豊満大谷遺跡 包含層出土土器実測図(9) (1/3)

3 近世から近代の遺構と遺物

豊満大谷遺跡では、近世から近代にかけて、道路状遺構3条、溝状遺構1条が検出された。なお、検出面が傾斜地であり遺物の流れ込みも十分想定されるため、同一遺構内から時期の異なる遺物が出土しているものについては、出土状況について詳細に記することにする。

(1) 道路状遺構・溝状遺構

1・2・3号道路状遺構 (SG1・SG2・SG3 : 第45・46図)

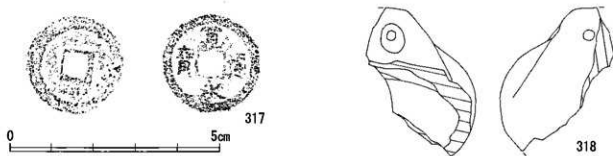
1号・2号・3号道路状遺構は、A区北端・南端部、B区南端2北側の第Ⅱ層(白ボラ・御池ボラ混入黒色土)で検出された。1号・2号・3号とも同一方向性を有し、斜面にそって北西から南東に走行する。検出全長は11.5mを測る。1号は、道路の幅0.6mで検出面の深さは最深部で20cmを測る。断面はU字形を呈し、系1~5mmの御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。断面を見ると幅約20~35cm、厚さ3~5cmの硬化層がある。硬化層は径1~3mmの黄橙色粒子と灰色粒子を多量に含み、上下が赤褐色の酸化鉄に覆われている。2号・3号も同じような埋土状況で、1号・2号・3号とも同年代のものとして推定される。どの遺構も埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

10号溝状遺構 (SE10 : 第45・47図)

B区先端部、A区との境で検出された。溝は斜面に沿って北西から南東で、検出全長は11.2mを測る。溝の幅は、0.32~0.5mで検出面の深さは最深部で38cmを測る。埋土の主体は粗い黄橙色粒子や1~1.5mm程度の文明ボラを多量に含む暗灰色土である。断面はU字形を呈し、径1~5mmの御池ボラを含む暗褐色土で硬くしまっている。なお、溝は南東に向かって次第に浅くなり、南東壁沿は削平され検出不可能である。また、最深部にピットが6基検出され、ピットは第Ⅴ層(御池ボラ層)より掘り込まれ、覆土は硬く御池ボラを少量混入した褐色土層である。ピットの形態は共に碗状である。規模は長径10~40cm、短径10~34cm、深さ25~30cmを測る。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

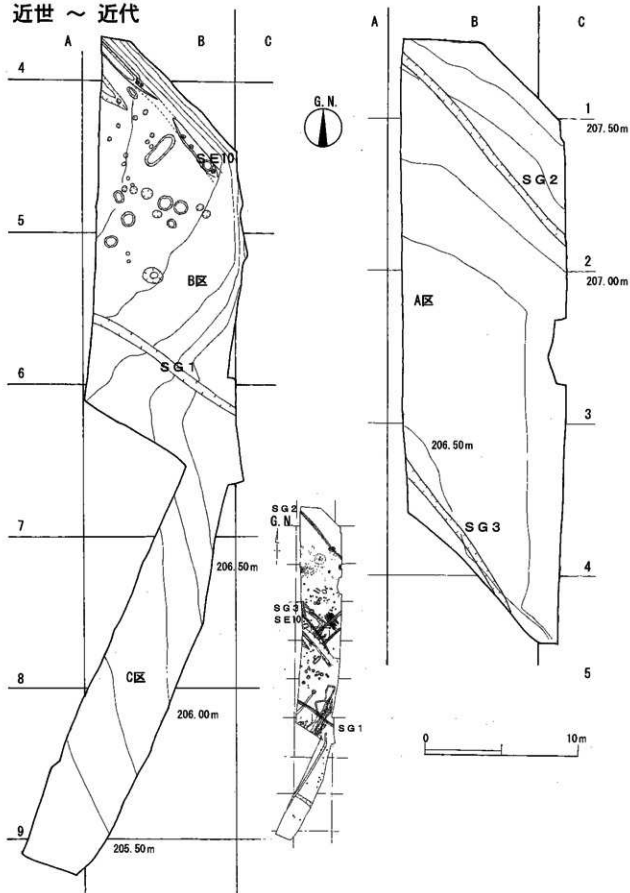
(2) 包含層出土の遺物 (第44図)

317は古銭で、寛永通宝であり、江戸時代のものである。318は土製の鈴ではないかと思われる。約半分以上が欠損しているため推測の域を出ない。

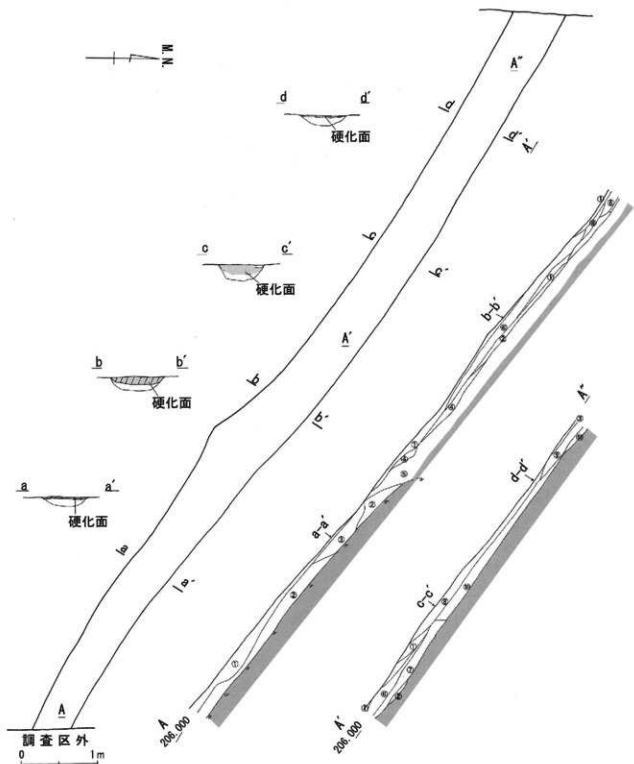


第44図 豊満大谷遺跡 古銭・土製品実測図 (1/3)

近世 ~ 近代



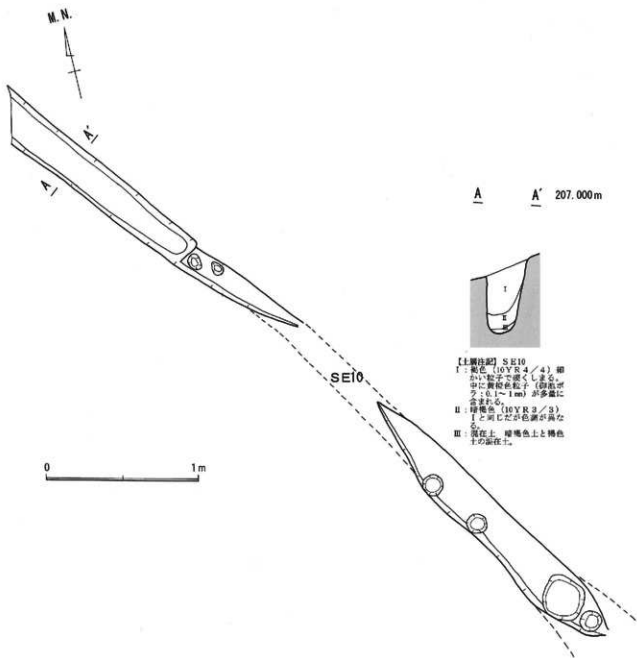
第45図 豊満大谷遺跡 近世から近代の遺構分布図 (1/250)



【土層注記】SG1

- ①：暗灰色 (N3/0) 硬化面 上下が赤褐色の酸化鉄におおわれている。中に0.1mm~3mm大の灰色・黄色のボラが多量に含まれる。
- ②：褐色 (10YR4/4) 基本土層
- ③：黒褐色 (10YR3/1) やや粘土質でしまりがある。中に0.1~3mm大の白色・黄色のボラが含まれているためザラザラ感がある。
- ④：黒色 (10YR2/1) 硬質の土でしまりが強い。中に0.1~3mm大の白色のボラを多く含む。
- ⑤：黒色 (10YR2/1) やや粘質土で硬くしまりが強い。中に0.1~1mm大の白色黄色のボラを少し含む。
- ⑥：オリーブ黒色 (7.5YR2/1) 硬化面 黒色土と砂の混合土。
- ⑦：黒色 (N7.5Y2/1) ⑥の黒色土のブロック。硬くしまりがあり、砂粒が含まれるため、多少のザラザラ感がある。
- ⑧：黒色 (N3/0) 硬化面 2mm~3mm大のしろボラが多く含まれる。
- ⑨：黒色 (N3/0) 硬化面 赤褐色の酸化鉄としろボラを含む。
- ⑩：オリーブ黒色 (7.5YR3/1) ⑥と同じだが硬化はしていない。
- ⑪：黒褐色 (10YR3/2) 硬質土でしまりが強い。中に0.1~1mmのしろボラがわずかに含む。

第46図 豊満大谷遺跡 1号道路状遺構実測図及び土層断面図 (1/50)

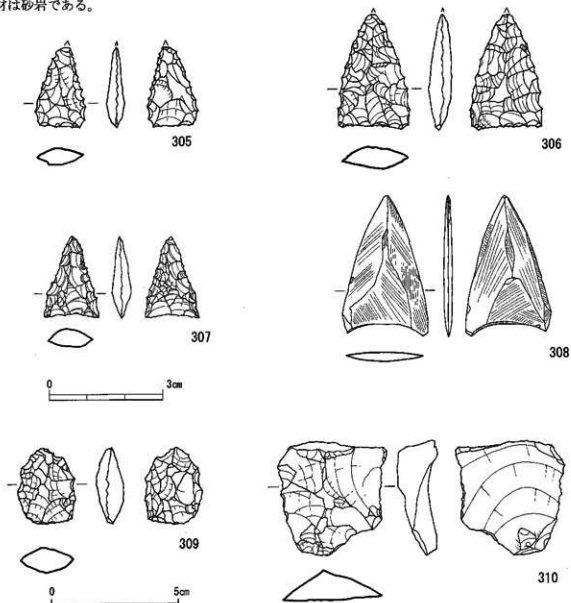


第47図 豊満大谷遺跡 10号溝状遺構実測図 (1/50)

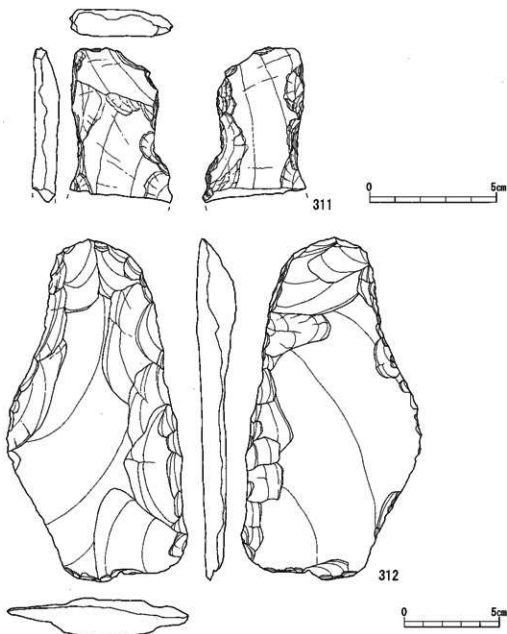
4 石器

包含層から出土した石器は少なく、第49図～第51図に記載したものがほとんどである。石器の使用された時期については特定できないので一括して記述したい。

第49図305～307は打製石鏃である。305は全体の形状が二等辺三角形をしている平基式の石鏃である。使用石材は頁岩である。306は平面形が二等辺三角形で基部は凹基であるが浅い。加工は全面におよび側縁部は曲線的である。307は平面形が二等辺三角形で基部は凹基である。側縁部は直線的である。306・307の使用石材はチャートである。308は磨製石鏃で凹基石鏃である。使用石材は緑色珪質岩である。309は表裏両面に剥離のある削器である。310は剥片である。使用石材は309・310ともにチャートである。311～313は砂岩製の打製石斧である。311は小型で両側縁部の基部近くに抉りを入れたものである。312は中型で基部近くに抉りを入れている。314～316は磨石である。314は楕円形の扁平な礫で、片面に磨痕が観察される。使用石材は砂岩である。315・316は楕円形の扁平な壁で表裏両面に磨痕がある。使用石材は砂岩である。



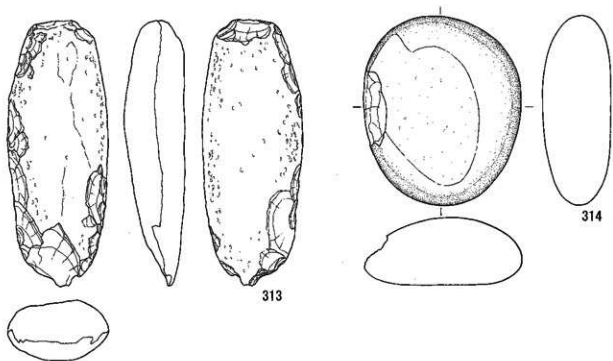
第48図 豊満大谷遺跡 石器実測図(1) (305～308…1/3、307～310…1/2)



第49図 豊満大谷遺跡 石器実測図(2) (311…1/2、312…2/3)

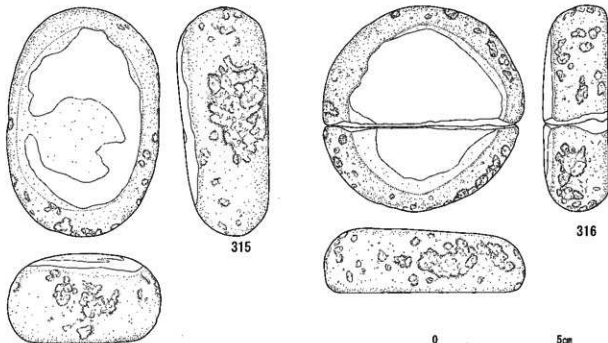
第4表 豊満大谷遺跡 出土石器及び古銭・土製品計測表

遺物	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	石材	備考
131	砥	石	B区: SA 1	29.2	15.7	8.0	4,500.0	砂岩
305	打製石	鐵	A区: II層	2.1	1.4	0.5	1.0	頁岩
306	打製石	鐵	A区: II層	3.0	1.9	0.5	2.7	チャート
307	打製石	鐵	2トレンチ	2.2	1.5	0.5	0.9	チャート
308	磨製石	鐵	2トレンチ	3.7	2.3	0.2	2.0	緑色珪質岩
309	剥片	片	A区: IV層	3.1	2.3	1.1	6.7	チャート
310	剥片	片	A区: IV層	4.6	4.4	1.6	24.4	チャート
311	石	斧	B区: S-5	8.2	5.5	1.5	78.7	砂岩
312	石	斧	B区	14.2	5.4	3.3	342.3	砂岩
313	石	斧	B区	14.2	5.4	3.3	342.3	砂岩
314	磨	石	B区: 南	10.1	8.3	3.6	428.3	砂岩
315	磨	石	C区	12.2	8.2	4.8	754.3	砂岩
316	磨	石	B区	11.0	10.7	3.5	648.9	砂岩
317	古	銭	A区	2.5	2.5	0.1	3.3	
318	土製品	(土鈴)	A区	3.8	2.3	1.4	6.3	



313

314



315

316

0 5cm

第50図 豊満大谷遺跡 石器実測図(3) (1/2)

第5表 豊満大谷遺跡 出土土器観察表(1)

遺物番号	種別	出土地点	部	位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形状・装束・文様ほか	色	裏	胎土の特徴	備考	
116	土師器	B区: SA1	鉢	口縁部～底部	12.9	5.0	14.1	横方向のナゲ、指押え、ミガキ後ナゲ	青 赤	外 内	明赤 明赤	2mm以下の褐色の砂粒及び透明の光沢	
117	土師器	B区: SA1	鉢	口縁部～底部	15.4		9.4	横方向のナゲ、ミガキ	横方向のナゲ、ミガキ後ナゲ	明赤 明赤	明赤 明赤	1mm前後の透明光沢、黄褐色粒、1～2mmの褐色・黒色の光沢の砂粒	黒灰
118	土師器	B区: SA1	鉢	口縁部～底部	推定 7.8			ミガキ	ミガキ	明赤	明赤	9mmの淡灰色の小石、3mm以下の赤褐色、微細な光沢	赤黒
119	土師器	B区: SA1	鉢	口縁部～胴部	13.0			横方向のナゲ、ミガキ	横方向のナゲ、ミガキ後ナゲ	明赤 明赤	明赤 明赤	1mm前後の透明光沢・黄褐色粒、1～2mm乳白・黒・褐色粒	黒灰
120	土師器	B区: SA1	鉢	口縁部～底部	推定 11.6			不定方向のナゲ、横方向のナゲ	横方向のナゲ、不定方向のナゲ	明赤	黒	5mm以下の褐色の砂粒、1mm以下の透明の光沢・黒色の光沢の砂粒	
121	土師器	B区: SA1	壺	頸部～底部				横方向に平なミガキ、一部スチ付着	丁寧なナゲ	明赤	明赤	4mm以下の褐色粒、2mm以下の赤褐色、灰黄褐色粒	一部黒灰
122	土師器	B区: SA1	壺	底部		8.2		ナゲ、一部指による強いナゲ、スチ付着	ナゲ、一層工具によるナゲ	明赤	明赤	1mm以下の光沢粒、2～3mm大の褐色粒	
123	土師器	B区: SA1	高杯	杯部	24.4			横方向のミガキ後ナゲ、縦方向のミガキ後ナゲ	ミガキ後ナゲ	明赤	黒	4mm以下の褐色粒、2mm以下の赤褐色、灰黄褐色粒	黒灰
124	土師器	B区: SA1	高杯	杯部	20.2			ミガキ、一部スチ付着	ナゲ	黒	黒	6mm以下の赤褐色粒、5mm以下の褐色粒、1mm以下の乳白色、透明光沢、3mm以下の半透明光沢	黒化
125	土師器	B区: SA1	高杯	杯部	13.0			横方向にミガキ、横方向のナゲ	横方向のナゲ	黒	黒	光る微粒子、0.1～2mmの乳白色、灰褐色粒、3mmの灰褐色、自白色の砂粒	黒化
126	土師器	B区: SA1	高杯	口縁部～杯部	16.1	9.7	10.8	横方向のナゲ、ミガキ、ナゲ、スチ付着	横方向のナゲ、工具による丁寧なナゲ	黒	明赤	微細～1mmの透明灰褐色粒、1～2mmの褐色粒	
127	土師器	B区: SA1	杯	杯部	17.3			ミガキ	指押え、ミガキ、ナゲ	黒	黄褐色 灰黄褐色	5mm以下の灰褐色、茶褐色粒を少し含む、1mm前後の褐色、乳白色粒、光沢	黒灰
128	土師器	B区: SA1	高杯	杯部				ミガキ、ナゲ	ナゲ	明赤	明赤	1mm以下の赤褐色・乳白色粒、1～2mmの透明光沢、褐色粒	
129	土師器	B区: SA1	高杯	杯部～胴部	10.3			ミガキ、スチ付着	丁寧なナゲ、スチ付着	明赤	明赤	2mm以下の透明光沢粒、灰色粒、赤褐色粒	
130	土師器	B区: SA1	高杯	杯部～胴部	推定 12.8			縦方向のミガキ、ミガキ後丁寧なナゲ	指ナゲ後上具ナゲ	明赤	明赤	1mm以下の明赤・灰色、黄褐色粒、微細な黒色、透明光沢	
132	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部	25.0			横ナゲ、貼付目突帯、ナゲ、スチ付着	指ナゲ、長い工具ナゲ	灰黄色	明赤	7mm以下の赤褐色の砂粒、1mm以下の灰白色砂粒、微細な透明光沢	
133	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部	23.2			貼付目突帯、ハケリ、スチ付着	指ナゲ、工具で横ナゲ後指ナゲ	明赤 黒	明赤 黒	光沢のある透明の砂粒	
134	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部				貼付目突帯、工具ナゲ	横方向のナゲ	明赤	明赤	1mm以下の赤褐色、灰色、黒色の砂粒	
135	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部				横方向のナゲ、貼付目突帯、指ナゲ	横方向のナゲ、ナゲ	明赤	黒	5mm以下の明赤・灰色、黒色の砂粒、1mm以下の明赤・灰色、2mm以下の褐色、透明光沢	
136	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部				指押え、長いナゲ、貼付目突帯、スチ付着	横方向のナゲ	黒	黒	2.5mm以下の褐色の砂粒及び灰白色の砂粒、微細な半透明及び光沢のある透明な砂粒	
137	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部				横方向のナゲ、貼付目突帯、スチ付着	縦方向のナゲ、ナゲ	明赤	明赤	光る微粒子、0.5～1mm大の茶、灰白、褐色の砂粒	
138	土師器	B区: SA1	壺	口縁部				貼付目突帯、ナゲ、スチ付着	ナゲ	明赤	明赤	1mm以下の茶褐色、灰褐色粒	
139	土師器	B区: SA1	壺	口縁部～胴部				指押え、工具ナゲ	灰褐色	明赤	明赤	3mm以下の褐色の砂粒、微細な光沢のある透明の砂粒	
140	土師器	B区: SA1	壺	底部	推定 5.6			ナゲ	不定方向の上具ナゲ	明赤	明赤	微細～1mm大の透明光沢・褐色光沢粒、1mm大の赤黄・茶色粒、2mm大の茶褐色、4mm大の褐色粒	
141	土師器	A区: IV南	埴	口縁部～高台	推定 14.7	推定 8.7		ナゲ	ナゲ	明赤	明赤	褐色・黒色・灰色等の微粒	
142	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部～高台	推定 15.4	推定 8.2		ナゲ	ナゲ	明赤	明赤	1mm以下褐色・灰色・茶色の砂粒	黒化
143	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	外側～底部	推定 8.9			ナゲ	ナゲ	灰黄	灰黄	黄緑	黒化
144	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部～底部	推定 13.6	推定 6.7		回転ナゲ	回転ナゲ	明赤	明赤	微細な褐色光沢、透明光沢粒、1mm以下の褐色・褐色の砂粒	
145	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部	推定 11.6			回転ナゲ	回転ナゲ	明赤	明赤	2mm以下の褐色の砂粒及び褐色の粒、微細な透明の光沢	
146	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	外側～底部	推定 10.7			ナゲ	ナゲ	明赤	明赤	4mm以下の白色粒、1.6mm以下の乳白色粒、1mm以下の褐色・透明光沢	黒化
147	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部～胴部	推定 14.3			ナゲ、指押え、ヘラ工具による側面	布目肌	黒	黒	5mm大の赤褐色粒	
148	土師器	A区: 安石状遺構	埴	口縁部	推定 13.8			ナゲ、指押え、ヘラ工具による側面	布目肌	灰黄	明赤	5mm大の褐色粒	
149	土師器	A区: 安石状遺構	埴	口縁部～胴部	推定 12.8			ナゲ、指押え、ヘラ工具による側面	布目肌	黒	黒	1～5mm大の赤褐色粒、4mm大の淡灰色、5mm大の灰黄色の粒	
150	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部～胴部	推定 10.2			ナゲ、指押え	布目肌	黒	黒	微細な褐色光沢粒、2mm以下の淡灰色の粒、2～5mm大の赤褐色の粒	
151	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部～胴部	推定 9.0			ナゲ、指押え	布目肌、ナゲ	黄褐色	黄褐色	1mm以下の茶褐色、2～3mmの黒・茶褐色	
152	土師器	A区: 安石状遺構	埴	口縁部				ナゲ、指押え	布目肌	黒	黒	微細な茶褐色粒、2mm以下の褐色粒、きめが粗い	
153	土師器	A区: 黒石状遺構	埴	口縁部～胴部				ナゲ、指押え	布目肌、側面	黒	黒	1mm大の茶褐色粒、2mm大の褐色粒	黒化

第6表 豊満大谷遺跡 出土土器観察表(2)

遺物番号	種類	出土地点	器種	部位	(cm)			手法・前蓋・文様ほか		色		胎土の特徴	備考
					口徑	底径	高さ	外	内	外	内		
154	土師器	A区:SC1	甕	口縁部				横方向の工具ナゲ、スズ付着	横方向の工具ナゲ、ケズリ	にぶい壁	にぶい壁	4mm以下の灰色粒、1mm以下の乳白色粒、透明な光沢粒、褐色粒	
155	土師器	A区:SC1	甕	胴部				ナゲ、黏付目貝殻(布目)	ナゲ	粒	粒	3mm以下の褐色粒、灰色粒、2.5mm以下の半透明光沢粒	黒炭
156	土師器	A区:SC1	坏	口縁部				横方向ナゲ	横方向のナゲ	粒	粒	灰色、黒色等の黒粒、ガラス質に光粒	
157	土師器	A区:SC1	坏	口縁部				横方向のナゲ	丁寧な横方向のナゲ	にぶい壁	にぶい壁	灰色、褐色、白色、黒色の粒	
158	土師器	A区:SC1	坏	口縁部				ナゲ、ミガキ	ナゲ、横方向のナゲ	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の白色、褐色、茶色等の粒	
159	土師器	A区:SC1	鉢	口縁部	推定12.6			ナゲ	布目肌	粒	粒	2mm以下の赤褐色の粒、5~7mm大の黒の粒4個、褐色の塵1個	
160	土師器	A区:SC1	鉢	底部分				ナゲ	布目肌	粒	粒	微細な乳白色粒	黒化
161	土師器	A区:SC1	深鉢	胴部~胴部				横方向のミガキ後ナゲ	横方向のミガキ後ナゲ	明褐色	明赤褐色	1mm以下の灰土、灰白色粒	黒炭
162	土師器	A区:SC1	深鉢	口縁部				指押え、貝殻条痕文スズ付着	ナゲ、指押え	にぶい壁	にぶい壁	1mm以下の灰土の砂粒及び半透明の光沢粒	
163	土師器	A区:SC1	深鉢	口縁部				ナゲ、横方向に貝殻条痕文	横方向に貝殻条痕文	黄灰	灰黄	2.5mm以下の灰土の砂粒及び半透明の光沢粒	
164	土師器	A区:SC1	深鉢	肩部				横方向に貝殻条痕文スズ付着	貝殻条痕文後に横方向のナゲ	黄灰	灰黄	2.5mm以下の黄灰の砂粒及び2mm以下の透明の光沢粒、半透明の光沢粒	
165	土師器	A区:SC1	深鉢	肩部				貝殻条痕文、スズ付着	横方向のナゲ	明灰黄	黄灰	2.5mm以下の黄灰の砂粒及び1mm以下灰土の砂粒、微細な透明の光沢粒	黒化
166	土師器	A区:SC2	浅鉢	胴部~胴部	推定8.1			斜め方向に貝殻条痕文ナゲ	斜め方向に貝殻条痕文ナゲ	黄灰	黄灰	4mm以下の灰土及び灰黄の砂粒、1.5mm以下の透明の光沢粒	黒化、黒炭
167	土師器	A区:SC2	浅鉢	口縁部				横方向にミガキ	ミガキ後に工具によって削がれている	増灰黄	黄灰	1mm以下の灰土の砂粒及び微細な透明の光沢粒	
168	土師器	A区:SC6	甕	口縁部~胴部				黏付目貝殻(布目)工具によるナゲ	工具によるナゲ	灰褐色	にぶい黄灰	3mm以下の黄灰色粒、1mm以下の灰白色粒	
169	土師器	A区:SC6	甕	底部				工具によるナゲ	ミガキ後ナゲ	灰褐色	にぶい赤褐色	8mm以下の暗褐色粒、5mm以下の灰黄色粒	
170	土師器	A区:SC6	鉢	胴部				ナゲ	布目肌	粒	粒	1mm前後の黒褐色、灰褐色の粒	
171	土師器	A区:SC6	浅鉢	胴部~胴部				ミガキ後丁寧なナゲ	横方向のミガキ、ミガキ後ナゲ	褐色	褐色	1mm以下の白色粒、微細な透明光沢粒	
172	土師器	A区:SC6	浅鉢	口縁部				横方向のナゲ	やや斜め方向のナゲ	灰黄褐色	にぶい黄灰	1mm以下の灰黄色粒、1~2mm大の黄灰・透明光沢・褐色、灰色粒、5mm以下の白色粒	黒化
173	土師器	A区:SC6	深鉢	肩部				横方向のナゲ	横ナゲ、横方向の赤褐色、条痕の上をナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黄灰・乳白・褐色、茶褐色、1~2mmの乳白・透明粒、3mm大の褐色粒	
174	土師器	A区:SC6	浅鉢	胴部				ナゲ、羅臼片痕	ナゲ	粒	にぶい黄褐色	2mm以下の茶褐色、灰褐色粒、透明な光沢粒	
175	土師器	A区:IV層	甕	口縁部~底部	推定47.4			斜方向にハケ目後丁寧な縦方向にナゲ、横方向のナゲ	横方向のナゲ、斜方向にハケ目	粒	粒	5mm以下のにぶい黄褐色・褐色の砂粒、5mm以下の金色光沢粒、1mm以下の褐色・灰土の砂粒	黒炭
176	土師器	A区:IV層	甕	口縁部				ナゲ、スズ付着	ナゲ、刺摩	にぶい壁	褐色	1.5mm以下の褐色・乳白色の粒	
177	土師器	A区:IV層	高坏	坏部	推定23.8			ミガキ	ナゲ	にぶい壁	にぶい黄褐色	3mm以下の黄褐色・灰色・褐色・黒色の砂粒微細な透明光沢	
178	土師器	A区:IV層	高坏	坏部	推定18.9			ミガキ	ナゲ	粒	粒	3mm以下の黄褐色の粒、1.5mm以下の黒粒透明の粒	
179	土師器	A区:IV層	高坏	坏部	推定16.8			ミガキ、スズ付着、刺摩痕	回転ナゲ	にぶい壁	明黄褐色	5mmの褐色粒、5mmの明黄褐色粒、3mm以下の灰白・褐色・透明光沢・灰色光沢の粒	
180	土師器	A区:IV層	高坏	坏部				ミガキ	内蓋	黒褐色	明赤褐色	1mm以下の光沢のある粒	24と同一器類
181	土師器	A区:IV層	高坏	胴部				ナゲ	ナゲ、指押え	にぶい壁	にぶい黄褐色	微細な黒い粒	
182	土師器	A区:IV層	高坏	胴部~胴部	推定12.6			ヘラミガキ、ナゲ、ヘラミガキ後のナゲ	ヘラミガキ	にぶい壁	にぶい黄褐色	微細な白い粒、黒い粒、光る粒	黒化
183	土師器	A区	甕	口縁部	推定9.3			回転ナゲ	回転ナゲ	にぶい壁	にぶい壁	5.5mmのにぶい黄褐色の粒、1.5mm以下の灰・褐色・灰土・にぶい黄色の砂粒	
184	土師器	A区:IV層	甕	口縁部	推定9.3			回転ナゲ後工具によるナゲ、ハケ目	回転ナゲ、刺摩	明黄褐色	黄灰	2mm以下のにぶい壁・黒・灰・明褐色の砂粒	
185	土師器	A区:IV層	甕	口縁部				横・斜方向にハケ目、丁寧なナゲ	ハケ目後ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒粒~1mm大の褐色の粒、光沢のある粒	
186	土師器	A区:IV層	甕	口縁部				横・斜方向のナゲ	ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微細な無透明の黒粒	
187	土師器	A区:IV層	甕	口縁部				横方向のナゲ	ナゲ、ミガキ	黄褐色	灰黄	微細な無透明の黒粒	
188	土師器	A区:IV層	甕	口縁部	推定11.2			ナゲ	ナゲ	にぶい壁	褐色	4mm以下の赤褐色の粒、2mm以下の褐色の粒	黒炭
189	土師器	A区:IV層	甕	胴部~胴部				ナゲ、スズ付着	ナゲ、指押え	にぶい黄褐色	明黄褐色	1mm前後の灰黄・茶褐色・黒褐色の粒	
190	土師器	A区:IV層	甕	胴部~胴部	推定17.2			ミガキ後ナゲ	横方向のナゲ、ナゲ、丁寧なナゲ	にぶい壁	粒	4mm以下の黄褐色・赤褐色・灰白・にぶい褐色の砂粒	
191	土師器	A区:IV層	鉢	口縁部~底部	推定11.9			不定方向にミガキ、指押え	不定方向にミガキ、指押え	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の褐色の砂粒、微細な灰色の砂粒、透明の光沢粒	黒炭

第7表 豊満大谷遺跡 出土土器観察表(3)

遺物番号	種類	出土地点	器種	部位	(mm)		手造・通器・文様ほか		色		胎土の特徴	備考
					口徑	底徑	外	内	外面	内面		
192	土師器	A区: II層	鉢	口縁部 ~胴部			ナデ	ナデ	明褐色	橙	9mm以下の灰白・赤褐色の粒。3.5mm以下の赤褐色・黒褐色・透明光沢・黒色光沢の砂粒	
193	土師器	A区: IV層	甕	口縁部 ~胴部	推定 35.4		ハケ目後ナデ、割目突香、布目笠底	ナデ、ハケ目	橙	橙	3mm前後の赤褐色・灰褐色の粒	黒灰
194	土師器	B区: S-3	甕	口縁部 ~胴部	推定 29.0		ハケ目後ナデ、割目突香、布目笠底	ハケ目	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の赤褐色・赤褐色の粒。2mm以下の灰白・赤褐色・半透明色粒	黒灰
195	土師器	A区: IV層	甕	口縁部			粗いナデ	粗いナデ、スス付着	淡黄褐色	淡黄褐色	4mm以下の赤褐色・赤褐色の粒。2mm以下の灰白・赤褐色	黒灰
196	土師器	A区: IV層	甕	口縁部			ハケ目、スス付着、斜方向の工具痕、ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の赤褐色・赤褐色の粒。3mm以下の灰白・赤褐色	
197	土師器	A区: IV層	甕	口縁部 ~胴部	推定 31.2		斜方向にハケ目、斜方向の工具痕、ナデ	横・斜方向にハケ目	にぶい橙	にぶい黄褐色	4mm以下の赤褐色・赤褐色の粒。2mm以下の不透明の光沢、灰色の砂粒	黒灰
198	土師器	A区: IV層	甕	口縁部 ~胴部			てびによる傷ナデ、斜方向のナデ、布目笠底	指ナデ、指押え後斜方向のハケ目	橙	にぶい橙	2mm以下の赤・赤褐色・赤褐色の粒	
199	土師器	C区	甕	口縁部 ~胴部			横方向のナデ、斜方向のハケ目、スス付着	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐色	3mm以下の赤褐色。1.5mm以下の乳白色粒。1mm以下の透明光沢粒	
200	土師器	A区: IV層	甕	胴部			横方向のナデ、斜方向のハケ目	斜方向にハケ目	にぶい黄褐色	淡黄褐色	1~2mm大の乳白・赤・灰色粒	
201	土師器	A区: IV層	甕	胴部			斜方向にハケ目、斜方向のハケ目	横	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の透明の光沢粒、褐色・赤褐色・白色の砂粒、微細な黒色の文様粒	黒灰
202	土師器	A区: IV層	甕	胴部			斜方向にハケ目後に割目突香	斜方向にハケ目、一節指ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	3mm以下の赤褐色・赤褐色の砂粒、不透明の光沢粒	黒灰
203	土師器	B区: 西	甕	胴部			ナデ、割目突香	ナデ	橙	明赤褐色	1.3mm大の褐色粒。5mm大のにぶい橙褐色粒。1mm以下の灰色、透明光沢粒	黒灰
204	土師器	C区	甕	胴部			割目突香、斜方向にハケ目	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい橙	1~2mm大の褐・赤・灰色粒	
205	土師器	A区: IV層	甕	胴部			ナデ、割目突香、布目笠底	指ナデ、ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の赤褐色粒。2mm以下のにぶい黄褐色・灰白・半透明色粒	
206	土師器	A区: II層	甕	胴部			ナデ、割目突香	斜方向にナデ	橙	橙	白色・赤褐色・灰色・赤褐色等の1mm以下の粒	
207	土師器	A区: IV層	甕	突香部			斜方向のハケ目、割目突香	横方向のハケ目	黒粒	にぶい黄褐色	灰色・赤褐色・赤褐色・茶褐色等の2mm程度の赤褐色の粒	
208	土師器	B区: P2	甕	口縁部	推定 17.3		斜方向のハケ目、ナデ	斜方向のハケ目	にぶい黄褐色	淡黄褐色	4mm以下の赤褐色・赤褐色の粒。2mm以下の乳白色の粒	
209	土師器	A区	甕	口縁部	推定 13.0		横・斜方向のハケ目、ナデ	横方向のハケ目、ナデ	淡黄褐色	灰白	3mm以下の赤褐色の粒。1.5mm以下の赤褐色の褐色の粒	
210	土師器	A区: II層	甕	胴部			横方向のナデ、斜方向にハケ目、斜方向のナデ	工具ナデ、指押え後、横方向のナデ	橙	にぶい橙	透明・黒く出るガラス質の薄片。0.5~2mm大の赤褐色・赤褐色・灰色粒。4~5mm大の灰褐色。にぶい褐色の砂粒	
211	土師器	B区	甕	口縁部			粗いナデ指押え後、割目突香、横方向のナデ	横方向のハケ目後に斜方向にナデ	橙	にぶい橙	3mm以下の赤褐色の砂粒。2mm以下の透明の光沢粒、微細な黒色の光沢粒	
212	土師器	A区: II層	甕	胴部 ~底脚部	推定 6.7		ハケ目、横方向のナデ、斜方向にナデ	ハケ目、ナデ	にぶい黄褐色	黒	2mm前後の黒褐色・灰褐色の粒	
213	土師器	A区: II層	竝	底脚部		8.2	横方向のナデ	ナデ	灰褐色	橙	3mm以下の灰白及び灰褐色の砂粒。2mm以下の赤褐色の光沢粒。半透明の光沢粒、微細な透明光沢粒	黒灰
214	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部	推定 27.5		ナデ、格子目タタキ、指ナデ	横方向のナデ、指押え後、ハケ目	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の赤褐色・にぶい黄褐色・灰・にぶい黄褐色・灰白・黒色・透明光沢の砂粒	
215	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部	推定 22.5		横方向のナデ、ハケ目	横方向のナデ、ハケ目	橙	淡黄褐色	4mm以下の赤褐色の粒。1mm以下の赤褐色の褐色の粒	
216	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部			横方向のナデ	斜方向に線状の工具痕	にぶい黄褐色	黄褐色	5mm以下の赤褐色・灰色・褐色の粒	黒灰
217	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部			横方向のナデ	ナデ、ケズリ	灰褐色	黄褐色	2mm以下の灰白・にぶい橙・灰褐色・黒色透明光沢の砂粒	
218	土師器	A区: IV層	甕	口縁部 ~胴部			横方向のナデ	横方向の指目、横方向のナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	4.5mm以下の赤褐色の粒。2.5mm以下の付加褐色・灰色の砂粒	
219	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部			ナデ	ナデ、横方向の指目	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3.5mm以下の褐色・赤褐色の粒	
220	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部			横方向のナデ	横方向のナデ、多方向の工具痕	淡黄褐色	淡黄褐色	3.5mm以下の赤褐色の粒。3mm以下の灰色の砂粒	
221	土師器	A区: II層	甕	口縁部			ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の赤褐色の粒。2.5mm以下の赤褐色の粒	
222	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部	推定 24.0		丁寧なナデ、横方向のナデ	斜方向の粗いナデ、横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	2~3mm大の褐色・白色の粒	
223	土師器	A区: IV層	甕	口縁部 ~胴部	推定 16.6		ハケ目の後ナデ、ヘラケズリ	ハケ目の後ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	2mm以下の赤褐色の粒。1mm以下の微細透明の粒。2mm以下の赤褐色の粒。1.5mmの灰色の粒	
224	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部			ナデ	ナデ	橙	橙	5.5mm以下の赤褐色の粒。2.5mm以下の赤褐色・灰色の粒。2mm以下の黒色光沢粒	
225	土師器	A区: II層	甕	口縁部 ~胴部			ナデ	ナデ、横方向のケズリ	にぶい橙	にぶい橙	8mm以下の赤褐色の粒。2mm以下の乳白色、無色で透明で光沢のある粒	
226	土師器	A区: II層	甕	口縁部			粗いナデ	粗いナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐色	橙	8.5mm以下の赤褐色の粒。2.5mm以下の灰白色の粒。1mm以下の赤褐色の粒。3mm以下の褐色の粒	
227	土師器	A区	甕	口縁部 ~底脚部	推定 6.7		横方向にナデ、指押え後、スス付着	ナデ、全体にスス付着	にぶい黄褐色	灰黄褐色	6mm前後の灰褐色・赤褐色の粒。微細な透明光沢粒	
228	土師器	B区: P2	つば	底脚部	推定 6.6		ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明赤褐色	微細な透明光沢粒。2~5mm大の褐色の粒。3mmの乳白色粒。5mm大の灰色の粒	

第8表 豊満大谷遺跡 出土土器観察表(4)

遺物番号	類別	出土地点	器種	部位	(cm)		手法・調整・文様ほか				色		胎土の性状	備考	
					口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面	外面			内面
229	土師器	A区: II層	甕	底部										1mm以下の乳白色、赤褐色、透明光沢	黒化
230	土師器	A区: II層	甕	底部					ナデ					縦線・1mmの縦溝、黒色光沢、透明光沢、3mm以下の褐色の粒、5mm以下の赤褐色の粒	
231	土師器	A区: IV層	甕	底部					ナデ					1mm以下の黒色光沢、灰・黄褐色、2mm以下の透明光沢、黒褐色の粒	黒化
232	土師器	A区: II層	甕	底部					ナデ、スス付着					3mm以下の褐色の粒、1mm以下の乳白色の粒	
233	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ、ヘラ切り						
234	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ、ヘラ切り						
235	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
236	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
237	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
238	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
239	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
240	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
241	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
242	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、ヘラ切り						
243	土師器	A区: IV層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
244	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
245	土師器	A区: IV層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
246	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
247	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					ナデ						
248	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
249	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					ナデ						
250	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
251	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
252	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ						
253	土師器	A区: II層	杯	口縁部					回転ナデ						
254	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、墨書						
255	土師器	A区: II層	杯	口縁部～底部					回転ナデ、墨書						
256	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ、墨書						
257	土師器	A区	高台付埴輪	底部					回転ナデ、墨書						
258	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					回転ナデ						
259	土師器	A区: IV層	杯	底部					回転ナデ						
260	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					ナデ						
261	土師器	A区: II層	杯	底部					回転ナデ						
262	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					ナデ						
263	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					回転ナデ						
264	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					ナデ						
265	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					回転ナデ						
266	土師器	A区: IV層	杯	底部					回転ナデ						
267	土師器	A区: II層	高台付埴輪	底部					回転ナデ						

第9表 豊満大谷遺跡 出土土器観察表(5)

遺物番号	種別	出土地点	形態	部位	(cm)		手法・調査・文様ほか		色		土の特長	備考	
					口径	底径	外	内	外	内			
268	土師器	A区: III層	高台付埴	底部～底面		推定 8.4		回転ナデ	回転ナデ	灰白質焼	灰白質焼	微細な光沢のある黒い粒、白い粒	
269	土師器	A区: III層	高台付埴	底部～底面		推定 7.6		回転ナデ	回転ナデ	灰白質焼	明黄焼	1mm以下の黒い粒	黒化
270	土師器	A区: III層	埴	口縁部～底面		推定 13.6		回転ナデ、黒炭	ミダキ、内黒	淡黄焼 黄灰	黒	1mm以下の淡黄色の砂粒	
271	土師器	A区: III層	高台付埴	底部～底面				ナデ	ミダキ、内黒	淡黄焼 淡黄焼	黒	1mm以下の灰質・灰白・黒色の砂粒	
272	土師器	A区: III層	高台付埴	底部～底面				ナデ	ミダキ後丁寧なナデ、内黒	黄灰	黄灰	1mm以下の砂・灰白・黒色・透明光沢の砂粒	
273	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部～底面		推定 15.2		ナデ、指研成	布目肌、指研成	椀	椀	約1mm以下の灰白色の砂粒、1mm以下の灰白・黒色の砂粒	黒化
274	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部		推定 11.8		ナデ、ソギ落とし、指研成	布目肌、指研成、斜方向に筋ナデ	椀	椀	5mm以下の灰白・黒色の砂粒、微細な透明の光沢粒、褐色・灰白の砂粒	黒化
275	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部		推定 10.6		ナデ、指研成	布目肌、指研成	椀	椀	6mm以下の黒色の砂粒、微細な灰白の砂粒	黒化
276	土師器	A区: III層	鉢	口縁部		推定 9.8		ナデ、ソギ落とし	布目肌	椀	椀	4mm以下の淡黄色の砂粒、褐色の砂粒	黒化
277	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部～底面				ナデ、指研成、指研成	布目肌	椀	椀	8mm以下の黒色の砂粒、1mm以下の灰白の砂粒、透明の光沢粒	黒化
278	土師器	A区: III層	鉢	口縁部～底面				ナデ、指研成、ソギ落とし	布目肌、指研成	椀	椀	7mm以下の灰白の砂粒、4mm以下の灰白の砂粒、2mm以下の灰白の粒	黒化
279	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部				ナデ、指研成、指研成	布目肌、指研成	椀	椀	7mm以下の砂の砂粒、微細な透明の光沢粒、灰白の砂粒	黒化
280	土師器	A区: III層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし、部分的に自然焼	布目肌	椀	椀	3～5mmの灰色・褐色・褐色の粒、黒色白土・灰色・褐色の炭粒	黒化
281	土師器	A区: III層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし	布目肌	椀	椀	2mm程度の褐色・茶色・肌色の粒	黒化
282	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部				ナデ	布目肌、指研成	椀	椀	5mm以下の黒砂粒、微細な灰白の砂粒	黒化
283	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部				ナデ、ソギ落とし	布目肌	椀	椀	1mm以下の灰白・褐色の砂粒、透明の光沢粒	黒化
284	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし	布目肌	椀	椀	4mm程度の褐色・茶色の粒、7mm程度の灰色・褐色の粒、褐色・灰色の粒	
285	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ、ソギ落とし	布目肌	椀	椀	2～4mmの褐色・茶色の粒、褐色・褐色白色の炭粒	
286	土師器	A区: IV層	鉢	底部				ナデ、指研成	布目肌、指研成	椀	椀	4mm以下の淡黄焼の砂粒、1mm以下の褐色及び不透明の光沢粒、褐色・褐色の砂粒	黒化
287	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ	ナデ	椀	椀	2mm以下の茶褐色・黒褐色の粒	黒化
288	土師器	A区: IV層	鉢	口縁部～胴部				ナデ	ナデ	椀	椀	1mm以下の茶褐色の粒	黒化
289	土師器	A区: IV層	鉢	底部				ナデ	指研成	椀	椀	4mm以下の淡黄焼、1mm以下の褐色及び不透明の光沢粒、褐色・褐色の砂粒	
290	土師器	A区: IV層	埴	口縁部		推定 12.2		回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	鱗片	
291	土師器	A区: IV層	埴	口縁部～受部		推定 13.5		回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	微細な灰白の砂粒	
292	土師器	A区: IV層	埴	口縁部				回転ナデ	回転ナデ	灰黄	灰黄	鱗片	
293	土師器	A区: IV層	埴	口縁部				タタキの上をナデ	自然焼	褐	明黄焼	灰色・白色・黒色の炭粒	292と同一体
294	土師器	A区: IV層	壺	底部		推定 7.8		回転ナデ後斜方向にナデ	回転ナデ後に不定方向に横ナデ	灰	灰	鱗片、微細な灰白の砂粒	
295	土師器	A区: IV層	壺	胴部				タタキ	タタキ	褐	明黄焼	灰色・白色・黒色の炭粒	291と同一体
296	土師器	A区: IV層	壺	胴部				同心円当て	同心円当て	淡黄	灰白質焼	微細な褐色粒	
297	土師器	A区: IV層	壺	胴部				格子目タタキ	同心円当て	灰黄	黄焼	微細な灰白土粒	
298	土師器	A区: IV層	壺	底部				格子目、平行タタキ	横・縦、斜方向に平行タタキ	暗灰黄	暗灰黄	鱗片、微細な灰白の砂粒	
299	土師器	A区: IV層	壺	胴部				横ナデ、縦に平行タタキ	横ナデ、同心円当て	灰	灰黄焼	鱗片	
300	土師器	A区: IV層	壺	胴部				格子目タタキ斜ナデ	平行当て	灰黄	淡黄	きめ細か	
301	土師器	A区: IV層	壺	胴部				格子目タタキ斜ナデ	同心円当て	暗灰黄	灰オリーブ	微細な淡黄色粒、5mm次の灰色粒	
302	土師器	A区: IV層	壺	胴部				縦に平行タタキ	横方向に間	灰オリーブ	椀	微細な透明の光沢粒	
303	土師器	A区: IV層	壺	胴部									
304	土師器	A区: IV層	壺	胴部									

第4節 総括

豊満大谷遺跡では、堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑7基、石囲い炉1基、集石状遺構1基、溝状遺構8条、畝状遺構3条が確認された。また遺物では縄文時代後期から晩期の土器や古代の上師器、須恵器、布痕土器等が出土している。石器では石鏃、剥片、石斧、磨石、砥石などが出土しており、多様な生業の痕跡が窺える当該地は約4000年前の御池降下軽石の堆積後、縄文時代後期後葉から晩期にかけて生活が営まれはじめ、古代を経て中世まで続き、桜島文明軽石が降下した頃まで断続的に生活の場として利用されたと思われる。以下、今回の調査の成果を総括してみたい。

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構について

縄文時代の遺構としてB区で石囲い炉、A区で土坑が検出された。この頃の地形は山の裾野に若干の平坦地があり、その平坦面から谷の中央の水流に向かってなだらかな傾斜があったと思われる。

(2) 縄文時代の出土遺物について

縄文土器は主に第四層（御池降下軽石層上面）から出土しているが、大半は破片資料で、全形を知り得るものは少ない。それらの所属期間は主に後期から晩期にかけての土器が出土した。出土土器は後期後半・晩期後半・その他の3つに分類し、従来の型式名と対比させながら若干の記述を行う。

I類は縄文時代後期後半に位置づけられるような土器群（2・5・20・25・29・32・33・35・63・66・69）である。型式名を比定できるものとして、2～5は器壁が薄く、よく研磨された精製土器で三万田式土器と思われる。63・66は口縁部が肥厚し、胴部が膨らむもので、口縁部外面と肩部に凹線や凸線文を施している。外面は縁辺部が横方向に、胴部以下が縦方向に研磨されているが、ススが付着しており煮沸容器として使用されたものと思われる。この土器は鹿児島県末吉町の中岳洞穴で出土した中岳Ⅱ式土器に類似しており、黒色磨研土器様式の在地形態と考えられる。

Ⅱ類は縄文時代晩期前半に位置づけられるような土器群（1・7・8・9・10・11・14・16・17・18・26・41～44・64・65・70～81・82～91・92～106・109・111～114）である。いずれも器内外ともに研磨された浅鉢形土器である。型式名を比定できるものとして、10～11は黒川式土器と思われる。

Ⅲ類は縄文時代その他の土器群（3・6・12・13・15・19・21～24・27・28・30・31・36～40・45～52・53～61・62・67・107・108・110・115）である。個々の土器に具体的な型式名称を冠することができるものもあるが、様々なバリエーションがあり、型式名称を比定することが難しい。比定できるものとして、12・13は縄文時代中期の春日式土器である。45～52・54・57～61は縄文時代晩期前半～中葉の無刻目突帯のころではないかと思われる。115は縄文時代前期の曾畑式土器である。

2 弥生時代から中世の遺構と遺物

当遺跡内から弥生時代の遺構は検出されなかったが、遺物は弥生後期の甕（175・176）が出土した。古墳時代に入ると豊満大谷の谷間に、再び定住空間が生まれる。古墳時代の次に、豊満大谷で生活の営みが見られるのは、古代である。古代の文化層はⅡc層で、根拠は文明軽石を多く含むⅡb層下という

ことである。堆積は10～15cmであったが、最も多くの遺跡を含んでいた。取り上げた遺物は3,000点を超えた。但しこの殆どが小さな土器片であった。これが何を意味するのかというと、古代以降もその後の生活の営みがあったということであり、遺跡の残りが悪いということは、その土地の使用頻度が高いということである。豊満大谷遺跡は都城盆地の南端にもかかわらず、古代の遺物は細かな碎片が多かった。それだけ土地の使用頻度が高かったということではないだろうか。中世以降について述べると、当遺跡周辺には六ヶ城、池平城、古城が築かれて豊満周辺の中世を賑やかしている。今日の豊満町の現風景が出来上がったのも西別府、田辺の集落が形成されたところではないかと考えられる。これ以降豊満大谷には生活の痕跡がない。

(1) 古墳時代の遺構について

古墳時代の遺構は、A区は掘立柱建物跡、土坑、B区では竪穴住居跡、土坑である。根拠はこれらの埋土がⅢ層の褐色土であること、そしてこの褐色埋土から刻目突帯をもつ土器が多く検出されたことにある。掘立柱建物跡はA区とB区の境で検出され、山裾の平地面の西際に作られている。竪穴住居跡はB区の傾斜面・西際に傾斜に即して掘られている。竪穴の堀方は浅く、明確な柱根も見つかっていない。隅丸方形の建物で2.5×2.5mの床面積6.25㎡である。遺物は全て土器で、高坏・埴・鉢類で作りはかかなり丁寧なつくりである。また石も多く、何に使用したかは不明であるが、一つだけ砥石に使ったものがあつた。

(2) 古墳時代の出土遺物について

遺物を見ると、177～192は壺・高坏・壺・台付の鉢・小型丸底埴・短頸壺で、全体の出土数からすれば1割も満たないが、Ⅲ層付近からの出土が多く、古墳の遺構の存在が推定できる。

古墳時代の壺は2類に大別できる。

I類(193～210)は刻目突帯のある土器である。調整は全て内外とも横方向のハケを行っている。形態から193～207を壺形、208～210を壺形とする。211はB区出土で、B区SA1上層出土の土器群(132～139)に類似している。壺形はさらに大きく2つに分けられる。193・194はバケツ型となり、胴部と口縁部を突帯によって分けられる。胴部から外側に向けてまっすぐ延びていき、端部で内湾している。208～210は特殊型の壺とする。208・209は突帯を持つとは限らないが、調整は同一ということで突帯土器に入る。口径が他よりも小さい。210は肩部から大きくくびれて口縁にいたる。器壁も厚く作られ、突帯の帯は断面三角形であるが210のみ断面四角で他と異なる。B区出土でSA1上層出土のものに近いと思われる。

II類(214～226)は肩部に張りがない長胴壺の系統に入る。そしてさらに2つに分けられる。214～221は端部を四角に整形しており、器壁は薄く仕上げている。調整は内外ともハケを基本としているが、214では体部下はタタキを行っているのが確認できる。格子目文で叩いているが、当て具は使わず指で押さえている。222～226は端部が丸く、器壁が厚い。調整は内側に削りを入れて器壁の厚さを調整している。この2種に時期差があるのかは不明であるが、技術的には明確な違いがある。つまり前者はタタキ具やハケを使って器壁を叩くか又は延ばして器面調整を行い、後者は内面を削って器面調整を行っている。

豊満大谷において刻目突帯のある土器は主に3ヶ所から出土した。B区SA1上層(132～139)・A区SC6(168・169)及びⅡ層下～Ⅲ層内である。それぞれ「刻目突帯」と装飾を共通としているが、

形・色調・突帯の位置・帯の太さ等が異なる点が多く、この違いは基本的に時期差の現れと思われる。時期的なものとしてA区とB区を同一と考えられないので、それぞれの組み合わせを行った。A区では168・169が出土した土はⅢ層の埋土である褐色系の土であることから、この形態が古いものと考えられる。206・210の型は基本的にⅢ層出土で168・169と同時にその下と考えられる。次にB区ではSA1上層土器群がある。132の型と194の型の二つがあるが、194の型はA区の193と同じタイプになり、そうなれば横並びでA区とB区の土器を繋ぎ合わせることが出来る。刻目突帯のある土器はいわゆる「在地系」と言われ南九州の内陸部を中心に弥生から古墳時代にかけて普遍的に見られる土器である。しかしその大部分が包含層出土扱いされ、細かい形態分類を行うものの、決定的な位置づけに躊躇される土器でもある。豊満大谷の刻目突帯のある土器は、遺構の上下関係と包含層でこまめに分布を落としした結果、SA1下層土器群(116~129)と214の型の間に入り、形式も2つまで分けることができた。以上のことからA区の刻目突帯のある土器よりもB区の刻目突帯のある土器のほうが古いと思われる。A区出土の刻目突帯のある土器胴部と口縁部が突帯によって明確に分かれており、突帯の位置が低い所にあること、そして作りが丁寧であることが上げられる。対してB区出土の刻目突帯のある土器は口縁部と胴部の明確な境が無く突帯によって分けられている。突帯の位置も高い所が多く、作りも巻き上げ痕が残る作りにも粗雑さが目立つ。

高坏はA区から包含層(177~182)、B区からは住居跡(123~129)から検出されている。A区の177~179は坏部のみであるが高坏とした。住居跡の高坏は8点である。口縁部を含む坏部が確認できるのは5点、台部が確認できるのは4点である。口縁部は2類に分類できる。

I類は123~125と177・178で、口縁部と体部が明確に分かれるタイプである。体部は付部は付根から外側にまっすぐに延びて、口縁部で屈曲する。口縁部と体部の比が1:1となる。

II類は126・127で、口縁部と体部が不明確なタイプである。126は口縁部と体部の境に稜線がみられるが、127は体部が口縁部まできている。

出土遺物の状況から、豊満大谷遺跡は縄文から弥生へ、弥生から古墳へという社会変革が推察できる遺跡であると思われる。残念なことに萩原川流域の発掘調査例がないということである。恐らく弥生の大集落であった黒土・大岩田から、古墳時代は分立し、その一つが恐らく安久川支流に形成された小集落があったのではと想像する。

(3) 古代から中世の遺構について

遺構は複合して検出された。A区とB・C区の関連性は根拠が見つからず、それぞれ独立して述べる。A区では集石状遺構・溝状遺構(平行溝・区画溝)・畝状遺構・土坑(井戸状)であった。この中で上下関係が分かったのは、区画溝→平行溝→畝状遺構の順である。このことから推察すると、豊満大谷では人跡を残した時が3回あるということである。古墳時代以降最初に作られてのは区画溝で「区内画を護る」という防衛のイメージで、この区画に誰か住んでいたと推測される。さらに井戸状の土坑も近くに検出されたことから関連性があると思われる。次の段階では区画溝後、2本の平行溝が作られる。排水溝(?)ではないかと考えられる。平行溝後は畝状遺構で、A区南側に相当広い範囲で検出された。今回の調査で確認された畝状遺構は、非常に遺存状態が悪かったために、調査及び調査成果において詳細を検討するには至らなかった。近年、水田跡や畠跡などの生産遺跡の調査が増加しており、これまでも当地域周辺の中尾山・馬渡遺跡・牧ノ原第2井積などで中世以降降下したとされる文明ボラ(以下、白

ボラ)が堆積する畝状遺構が確認されている。この畝状遺構は、遺構の性格について検討が必要である。現在、白ボラの堆積する畝状遺構(小溝状遺構)は、畑の畝間及び白ボラ降下後の復旧痕の両者が考えられているが、当遺跡では同じ単位の小溝状遺構が整然と走行する状況からみると小溝状遺構=畝間という捉え方が妥当であると思われる。B・C区の古代の溝状遺構SE4からSE7まではほぼ同じ方向に延びている。A区の平行溝とは異なり、明らかに時期差があると思われる。SE4からSE6は調査区外となるがC区にはいるSE7と同じくらい延びていくと考えられる。SE7からSE4に移行していったと考えられる。いずれにしても積み重なるように作られているのが特徴である。この特徴は波板状凹凸面や硬化面を伴う道路状遺構によくみられる特徴である。B区の溝状遺構はA区の古代の遺構と関連づけられるものである。

集石状遺構は、A区中央東端、山裾と平坦部の境界で検出された。東側が調査区外であったため全容は確認されなかったが、推察すると1×3mの長槽円形になると思われる。集石状遺構を中心に放射状に焼成した礫が拡散しており、集石内やその周辺からは、布痕土器や高台付の埴が出土した。単に開墾時に寄せ集められた石の集まりがどうか、集石の用途は不明である。

(4) 古代から中世の出土遺物について

組成は須恵器・土師器・黒色土器である。器種は甕と坏(高台付・無高台)、そして鉢(布痕土器)で、時期は古代と推測され、土器区分からも布痕時の頃だと考える。土師質土器の出土量は他の同時期の遺跡に比較して少ない方である。坏の底部切り離しには、ヘラ切りと糸切りが見られるが前者の方が多い。

このように当遺跡では、断片的ではあるが掘立柱建物跡、土坑(井戸状)、が確認され、出土遺物や白ボラの堆積する溝状遺構、畝状遺構の存在から、古代～中世の継続的で小規模な集落であった状況がうかがえる。

3 近世から近代の遺構と遺物

近世以降は若干の近世陶磁器(小片)・寛永通宝が出土している。杉の植林のためA区とB区の境界は段が作られたと思われる。当初は畑作による開墾と考えていた。いずれにしても近世以降は居住跡は無かったと思われる。Ⅱ層上層から検出した3本の硬化面が、その時期に該当すると思われる。山の等高線に沿って平行に走っているということで、生活道路というより植林の際に使用したものだと思われる。

<参考・引用文献>

- 『宮崎県史 資料編 考古1』 宮崎県史刊行会
「宮崎県史 通史編 原始・古代1」 宮崎県史刊行会
「宮崎県史 通史編 原始・古代2」 宮崎県史刊行会
「王子原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第45集 2001
「ワクト石遺跡」『熊本県文化財調査報告書』 第145集 1994
「梅木原遺跡」『小林市文化財調査報告書』 第11集 2000
「都之城跡・久玉遺跡・宮ノ下遺跡・堂山（南地区）遺跡・牟田ノ上遺跡・屏風谷第1遺跡」
『都城市文化財調査報告書』 第13集 1991
「大岩田村ノ前遺跡」『都城市文化財調査報告書』 第14集 1991
「天神原遺跡」『都城市文化財調査報告書』 第23集 1993
「久玉遺跡第5次・油田遺跡・正坂原遺跡」『都城市文化財調査報告書』 第25集 1993
「権山・郡元地区遺跡」宮崎県教育委員会 1992
堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』 第31号 1997
水ノ江和同「北部九州の縄文後・晩期土器—三万田式から刻目尖裕土器の直前まで—」
『縄文時代』8 縄文時代研究会 1997
「横市地区遺跡群 脇穴遺跡(1)・今房遺跡・馬渡遺跡(第1次)」『都城市文化財調査報告書』 第50集 2000
「谷丸地区遺跡群」『都城市文化財調査報告書』 第34集 1996
「上牧第2遺跡・母智丘原第2遺跡」都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内中央部)
『都城市文化財調査報告書』 第5集 1986
「母智丘谷遺跡・畑田遺跡・線坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第63集 2002
都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内中央部)『都城市文化財調査報告書』 第5集 1986
都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)『都城市文化財調査報告書』 第6集 1987
「梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・養原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第42集 2001
戸高充則編『縄文時代研究辞典』東京堂出版 1994
「東田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第16集 1996
「学頭遺跡・八兄遺跡」宮崎県教育委員会 1995
「右甚ヶ迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第21集 2000



B区：石囲い炉検出状況



B区：1号竪穴住居跡遺物検出状況



A区：集石状遺構検出状況



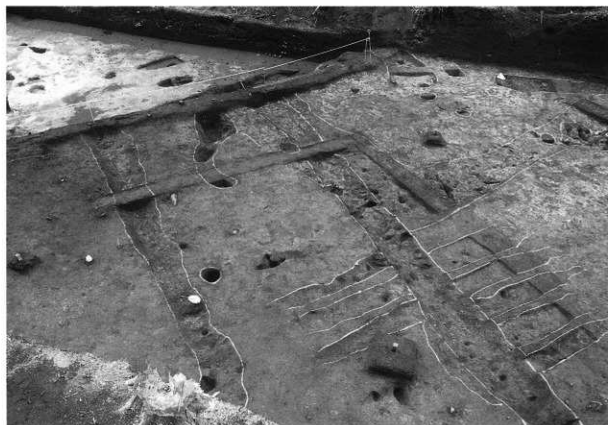
A区：1号土坑検出状況



A区：4号土坑検出状況



A区：5号土坑検出状況



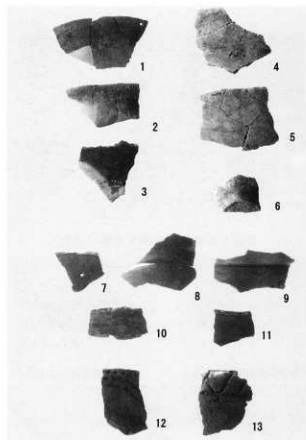
A区：遺構検出状況（溝状遺構・畝状遺構）



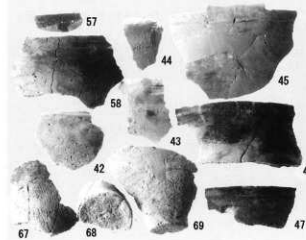
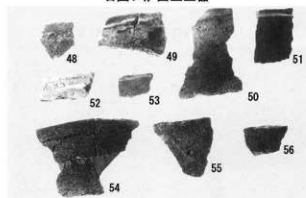
B区：5号溝状遺構検出状況



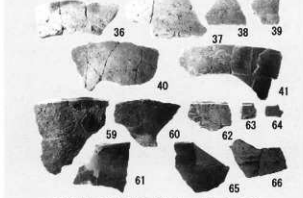
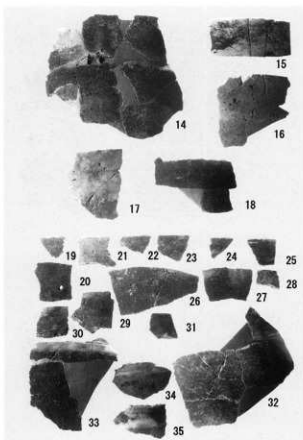
B区：10号溝状遺構検出状況



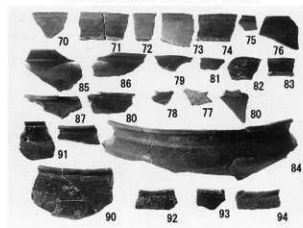
石囲い炉出土土器



豊満大谷遺跡出土縄文土器 (2~6類)

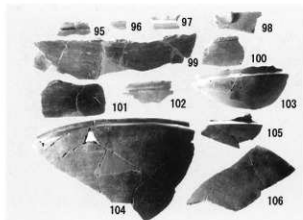


豊満大谷遺跡出土縄文土器 (7類)

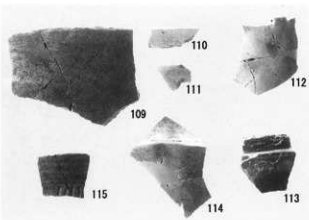


豊満大谷遺跡出土縄文土器 (7類) 1

豐滿大谷遺跡 圖版 4



豐滿大谷遺跡出土縄文土器 (7類) 2

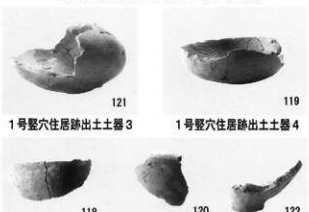


豐滿大谷遺跡出土縄文土器 (8類)



1号竪穴住居跡出土土器 1

1号竪穴住居跡出土土器 2



1号竪穴住居跡出土土器 3

1号竪穴住居跡出土土器 4

1号竪穴住居跡出土土器 5

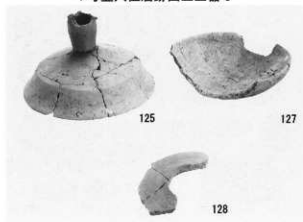


1号竪穴住居跡出土土器 6

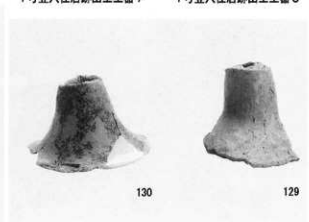


1号竪穴住居跡出土土器 7

1号竪穴住居跡出土土器 8



1号竪穴住居跡出土土器 9

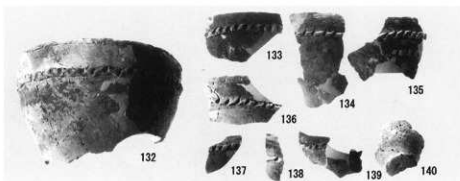


1号竪穴住居跡出土土器 10



131

1号竖穴住居跡出土遺物11



1号竖穴住居跡出土土器12

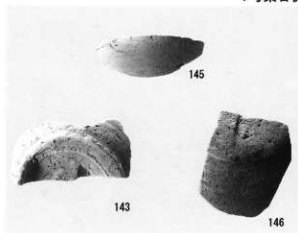


141

142

144

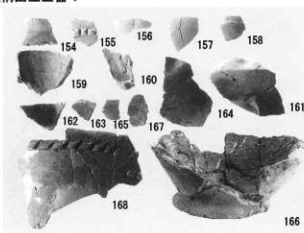
1号集石状遺構出土土器1



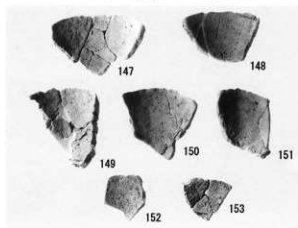
143

146

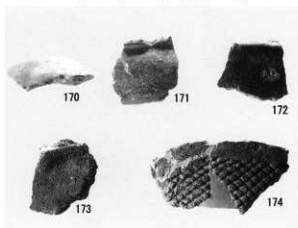
1号集石状遺構出土土器2



1号・2号・6号土坑出土土器



1号集石状遺構出土土器3



6号土坑出土土器1



175

豐滿大谷遺跡出土土器 (弥生~古墳時代) 1



169

6号土坑出土土器 2



182

出土土器 (弥生~古墳時代) 2



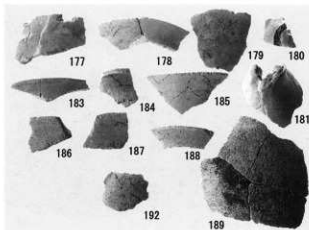
190

出土土器 (弥生~古墳時代) 3

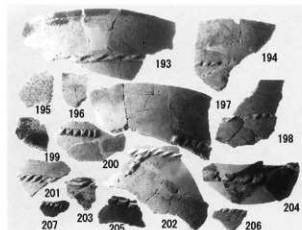


191

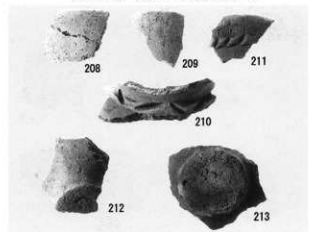
出土土器 (弥生~古墳時代) 4



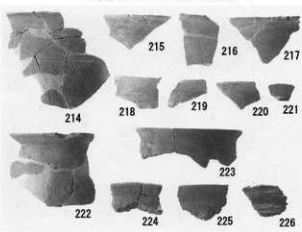
出土土器 (弥生~古墳時代) 5



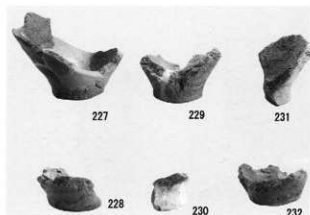
古墳時代出土土器 (壺類) 1



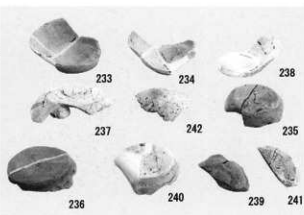
古墳時代出土土器 (壺類) 2



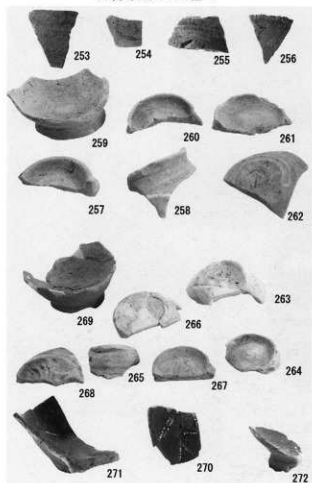
古墳時代出土土器 (壺類) 3



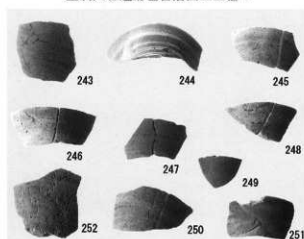
古墳時代出土土器 4



豐滿大谷遺跡包含層出土土器 1



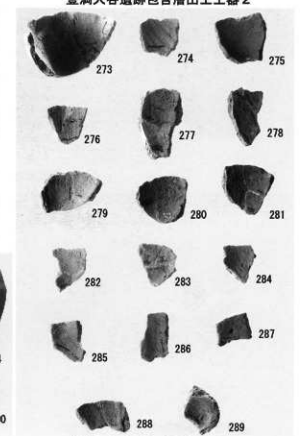
豐滿大谷遺跡包含層出土土器 3



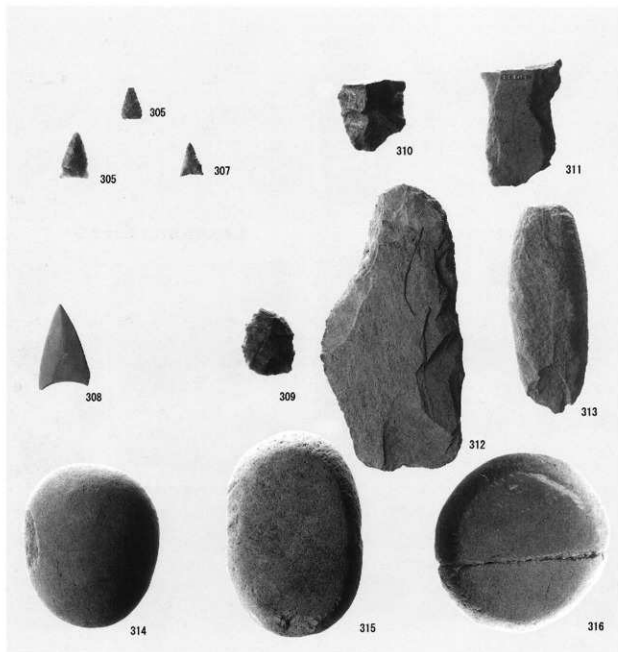
豐滿大谷遺跡包含層出土土器 2



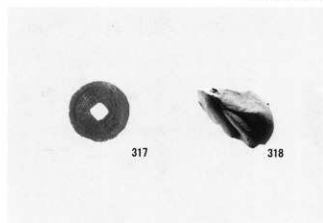
豐滿大谷遺跡包含層出土土器 5



豐滿大谷遺跡包含層出土土器 4



豐滿大谷遺跡出土石器



豐滿大谷遺跡出土古錢・土製品

第IV章 野添遺跡の調査

第1節 調査の概要

調査対象は鰐塚山系南端部の金御岳（標高472m）から連なる標高約190mの丘陵裾部台地上に位置し、調査前は東から西に緩やかに傾斜する平坦な畑地として利用されていた（第1図）。

確認調査の結果、縄文時代後期の土器や中世の土師器が暗褐色土層（Ⅱ層）から、住居跡や柱穴が黄色軽石層（Ⅳ層：霧島御池軽石層で約4200年前噴出と考えられる）上面から検出されることが確認された。この結果に基づき発掘調査は農業用道路建設部分である約1,500㎡について実施した。本調査は表土（耕作土）を重機により剥ぎ取り、その後御池ボラ層の上面まで手作業で一層づつ掘り下げ遺構・遺物を検出した。また、排土置場の確保のため調査区を4分（A・B・C・D区）し、本調査を平成13年11月13日に東側のD区から開始した。

Ⅱ層上面で検出された遺構としては、中世の土壇墓2基・土坑2基・溝状遺構2条・硬化面を伴う道路状遺構1条、近世の道路遺構1条、ピット群である。

Ⅳ層上面で検出された遺構としては、縄文時代後期の堅穴住居跡（SAJ）7軒・土坑1基、古墳時代の堅穴住居跡（SAK）2軒（SAK1～2）・土壇墓1基がある。堅穴住居跡9軒はA・B・C区で検出され、7軒（SAJ1～7）は円形プランで直径2～3m、2軒は方形プランで1辺約5mの中規模住居である。遺物の出土状況を見るとSAK1は土師器の破片が床面付近から数多く出土し、SAJ1・SAJ2・SAJ3・SAJ7は縄文後期の土器小片が床面付近にかたまって出土した。ただ、いずれの住居跡も炉跡（火処）は明確ではなかった。

Ⅳ層上面検出遺構の調査を終了した時点で、御池ボラ層の下までトレンチを入れたが、遺構・遺物の確認はできなかつたため、平成14年2月15日に調査を終了した。

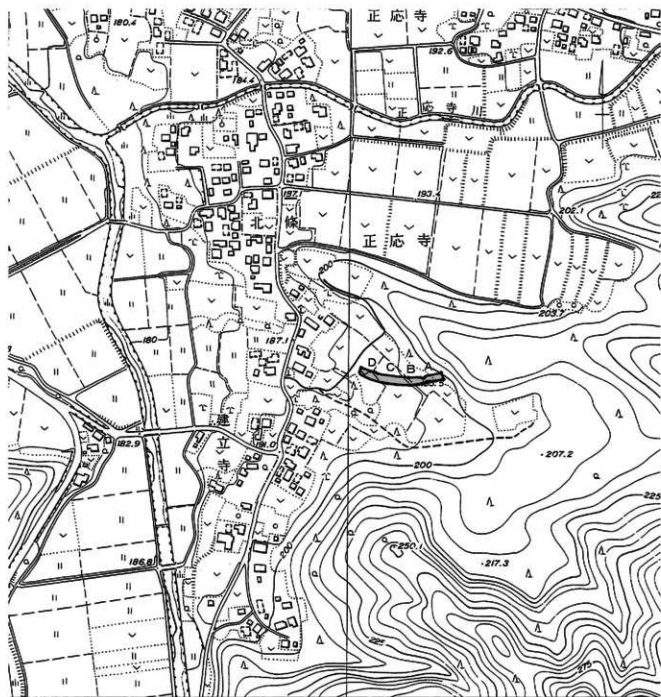
調査区には、国土座標に準じた10m×10mグリッドを単位とし、4つの調査区を覆うようにグリッドを設定し、南北方向にアルファベット（北よりA・B・C・D）を、また東西方向に数字（東より1・2・3…）をそれぞれ付した。

第2節 基本層序

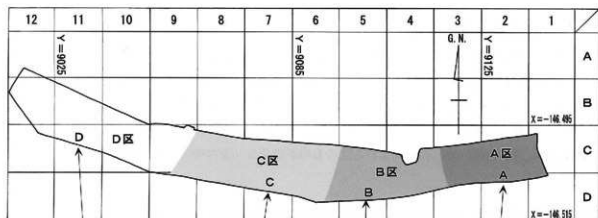
野添遺跡の基本層序を第2図に示した。遺跡周辺は丘陵の尾根筋の地形であったが削平されたために、場所によって大きく地層の堆積が異なる。

第Ⅰ層は褐色の表土であり、調査前まで畑の耕作土であった。調査区全体で確認され45cm～50cmの厚みがある。第Ⅱ層はやや硬質の暗褐色土で、御池ボラを含み縄文後晩期・古墳・中世の遺物包含層である。厚さは15cm～20cmである。A・B・C区で確認された。第Ⅲ層は黒褐色土層であるが、各調査区の一部にしか堆積していない。第Ⅳ層は黄色軽石層で、霧島御池軽石層と考えられる。A・B・D区の一部で確認された。厚さは30cm～35cmである。第Ⅴ層は鬼界アコホヤ火山灰（約6300年前噴出と考えられる）の一次堆積層であり、下部に2～3mm程度の褐色火山豆石を多く含む。第Ⅳ層は暗黄褐色軽石混褐色土で上部に直径2～5mm程度の黄・クリーム色の軽石粒を多く含む、下部からは2～5mm程度の橙・

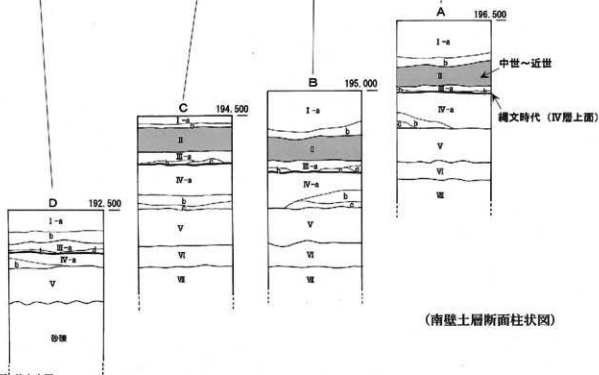
黄褐色の軽石粒を含んでいる。上記の基本土層はA区～C区で確認されたが、D区は河川の氾濫と土地改良によって調査区の半分の層が攪乱している状態である。なおアカホヤ下層の第VI層以下はトレンチを4m×10m規模で開けて確認したが、遺物、遺構の検出はできなかった。



第1図 野添遺跡 周辺地形図 (1/5,000)



(グリッド配置図)



(南壁土層断面柱状図)

【土層注記】基本土層

- I-a 褐灰色 (10YR 5/1) 耕作土 しまりがなく、粘性なし
- I-b 褐灰色 (10YR 4/1) 文明礫石 (1%程度) 含む。しまりが弱く、粘性あり。
- II 暗褐色 (10YR 3/4) 文明礫石 (5%程度) 含む。しまりややあり、粘性あり。
- III-a 黒褐色 (10YR 2/2) 文明礫石を多量に含む。しまりよく、粘性なし。下位ほど粒が小さく、下層付近では砂粒状となる。
- III-b 黒褐色 (10YR 3/2) 1~3mmの白色粒子を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
- III-c 黒褐色 (10YR 3/2) 1~3mmの白色粒子が密に混入し、非常に硬くしまる。
- III-d 黒褐色 (10YR 3/2) 1mm以下の白色粒子を多く含む。しまりがなく、粘性なし。
- III-e 黒褐色 (10YR 3/1) 3~5mmの白色粒子を多く含む。しまりがなく、粘性なし。
- IV-a 黄褐色 (10YR 5/6) 御池礫石層、1~10mmの黄褐色粒子のみで構成、下位ほど粒が大きくなる。
- IV-b 黄褐色 (10YR 5/8) 黄褐色粒子を少量含む。しまりややあり、粘性あり。
- IV-c 黄褐色 (10YR 5/8) 黄褐色粒子を少量含む。しまりよく、粘性あり。
- V 明褐色 (10YR 6/6) アカホヤ層、下部に2~3mm程度の暗褐色火山豆石を多く含む。
- VI 褐色 (7.5YR 4/3) 1~10mm程度の黄色の軽石を多く含む。
- VII にぶい赤褐色 (5YR 5/4) 2~5mm程度の褐色粒子及び赤色粒子をまばらに含む。粘性あり。

第2図 野添遺跡 グリッド配置図 (1/500) 及び南壁土層断面図

第3節 調査の記録

遺構を検出した第Ⅱ層は標高190m～198mの西向き斜面で、調査区の中央から東側は山頂に向かって急傾斜を形成するが西に向けては緩傾斜となる。確認した遺構は土墳墓(SD)2基、土坑(SC)2基、溝状遺構(SE)2条、道路状遺構(SG)2条で、緩傾斜面で検出した。第Ⅳ層からは、堅穴住居跡(SA)9軒、土墳墓(SD)1基、土坑1基で、堅穴住居跡2軒、土坑1基以外はすべて緩傾斜面で検出した。遺物は縄文時代後期および古代のものが出土し、その中でも縄文時代後期が多数を占める。

1 縄文時代の遺構と遺物

調査区のA区・B区・C区から本時代に帰属すると思われる遺構が検出されている。検出された遺構は堅穴住居跡7軒、土坑1基である(第3図)。遺物はごく一部の例外を除いて後期に属するものであり、遺構もおおむね同時期の所産と考えられる。

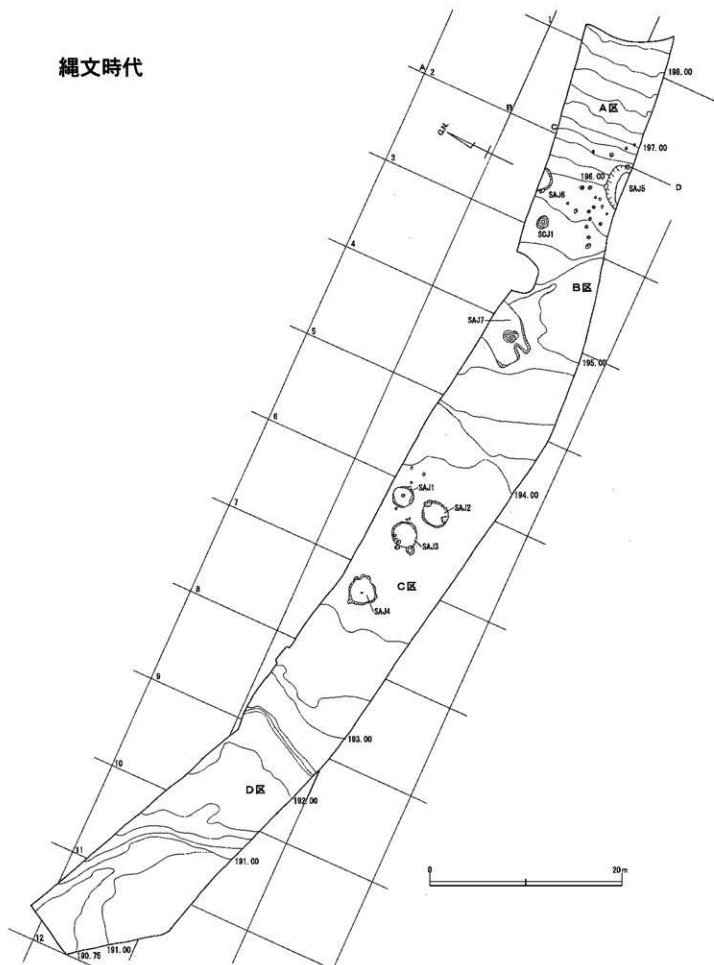
(1) 堅穴住居跡

1号堅穴住居跡(SAJ1:第4図)

C区の中央やや北寄りの御池ボラ層上面で、C7グリッドから検出された。円形プランの住居跡で、南北方向2.25m、東西方向2.2m、検出面からの深さ12cmを測る。床面中央にわずかに窪みがあり、その埋土中には多くの炭化物が含まれていた。埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央付近にその集中があり、土の黒色化がレンズ状に堆積する。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央付近のその集中があり、土の黒色化が見られる。しかし床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。主柱穴は中央に1基と南側にピット1基を配し、径が15cm～25cm、床面からの深さは20cm～60cmである。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物は第11図～第12図に示している。この住居に伴う遺物(1～17)は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、1は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、凹縁を口縁端部に2条、胴部屈曲部に2条の凹縁を巡らせている。器面調整は内外面にナデを施している。2・3は胴部が張り口縁部が緩やかに外反する深鉢で波状口縁と平口縁である。口縁端部、胴部屈曲部には凹点文と凹縁文の組み合わせた文様を施している。内外面ともミガキが施されている。4～6は胴部があまり張らず口縁部が直口する深鉢で凹縁を4は口縁端部に1条、5・6は2条巡らせている。4は内外面にミガキが施され、5・6は内外面ともナデが施されている。7は胴部が張り口辺部が外反しながら立ち上がり口縁端部が肥厚する深鉢で、口縁端部に凹縁文を2条、胴部屈曲部には凹縁文と刺突列点文を巡らせている。器面調整は内外面ともミガキ後ナデを施している。8は土師器製の口縁部で、遺構への流れ込みである。9～13は外反する深鉢の胴部片と考えられる。9は1と類似するもので、胴部屈曲部に2条の凹縁文を巡らせている。内外面ともナデである。10は胴部屈曲部に凹縁文及び凹点文を施文するもので、内外面ともナデである。11・12は胴部屈曲部に沈線文を2条に巡らせている。内外面ともナデである。13は胴部屈曲部に列点文及び沈線文を施文するもので外面にミガキ、内面にナデが施されている。14・15・16は深鉢の底部である。14は全体的に風化のために丸くなっているが、平底でくびれを持たずに胴部が直線的に立ち上がるものと思われる。外面はミガキ、内面はナデが施されている。

縄文時代



第3図 野添遺跡 縄文時代の遺構分布図 (1/400)

15は平底でくびれを持たずにやや内湾する胴部が外方に延びる。内外面ともナデ調整である。16は平底でくびれを持たずに内湾する胴部が立ち上がる。外面は工具によるナデ、内面はナデでススが付着している。17は剥片で使用石材はチャートである。

2号竪穴住居跡（SAJ2：第5図）

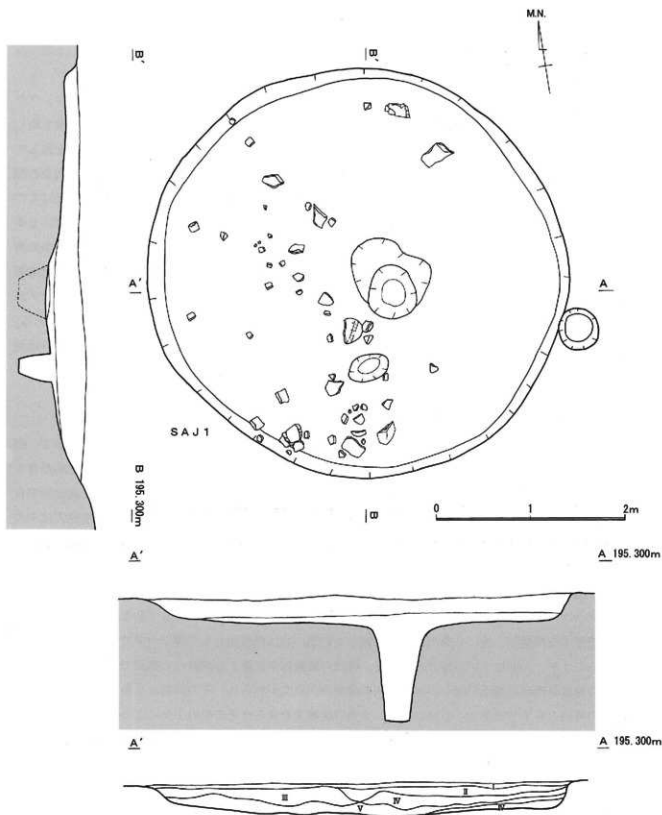
1号住居跡の南側約1.2mの位置に検出された。円形プランの住居で、南北方向2.8m、東西方向2.65m、検出面からの深さは15～35cmを測る。埋土中には多くの炭化物粒が含まれていた。埋土は御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積する。埋土中央部に炭化物が多く含まれ、中央付近に集中している。しかし、床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。支柱穴は確認出来ず、西側壁際にピット1基を検出した。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で多量に出土した。土圧で潰されたほぼ完形の土器等も出土している。

出土遺物は第13図～第14図に示している。この住居に伴う遺物（18～34）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、18～33は深鉢である。18は胴部が張り口縁部が緩やかに外反する深鉢で、口縁部は肥厚し外面には二条の浅い凹線文が巡らせ、三角形あるいは楕円形の凹点文が上に2段、下に1段施される。胴部屈曲部には2条の浅い凹線文を巡らせ、三日月形の上下2段の凹点文を施している。器面調整は外面にミガキ、内面にナデを施している。19は18と同一個体の可能性があるがやや胴部が張っているように図化復元される。胴部凹線文上に上下2段の三日月状の凹点文が施される。外面はミガキ、内面はナデである。20は口縁部が緩やかに外反する深鉢で、口縁部は肥厚し浅い凹線を2条、胴部屈曲部には2条の浅い凹線を巡らせている。外面はミガキ後ナデ、内面はナデが施され、一部剥離がみられる。21は口縁部が緩やかに外反する器形で、口縁部は肥厚し凹線を2条巡らせている。内外面ともミガキ後ナデである。22は口縁端部が肥厚する深鉢で、外面に粗いナデ、横方向のナデを施し、内面に横方向にナデを施している。23・24は口縁端部が肥厚する深鉢で、口縁部外面に2条の沈線文を巡らせている。内外面ともミガキである。25・26は、口縁部の外反が小さく、25は口縁端部に浅い凹線文を2条施し、26は口縁部先端を欠くものの肥厚部にやや深めの凹線文2条と肩部に1～2条の凹線文を施す。内外面ともミガキを施している。27・28は無文の口縁帯を有する深鉢形土器である。27は外面にミガキ、ナデ、内面はミガキである。28は外面に縦方向のキズ状の条痕があるが調整はナデが施され、内面はミガキが施されている。

29～32は胴部の張りが弱い深鉢の胴部で、肩部に29・30は2条の浅い沈線文、31・32は2条のための沈線文を巡らせている。内外面ともナデである。33は屈曲して張りだす深鉢の胴部で、屈曲部外面には明瞭な稜線を形成する。内外面ともナデである。34は剥片で使用石材はチャートである。

3号竪穴住居跡（SAJ3：第6図）

1号住居跡の南西側約1.2mの位置に検出された。円形プランの住居跡で、南北方向2.85m、東西方向2.65m、検出面からの深さは15～18cmを測る。埋土中には少量の炭化物粒が含まれていた。埋土は御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。埋土中には中央部に炭化物が少量含まれ、中央付近に集中している。しかし、床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。支柱穴は2基、西側にピット1基を配し、径が20～30cm、床面からの深さは15～30cmである。しかし、柱穴の配置は通常の中央2本支柱や



【土層注記】SAJ 1

- I 黒褐色 (7.5YR 3/1) 御池ボラを微量に含み、しまりがある。
- II 暗褐色 (7.5YR 3/1) 直径2～3mmの御池ボラが多く混在する。
- III 暗褐色 (7.5YR 3/3) 直径5mmの御池ボラを多量に含む。少し粘性があり、炭化物が混入する。
- IV 褐色 (7.5YR 4/3) 直径1mmの御池ボラを多量に含む。しまりが弱く、粘性あり。
- V 褐色 (7.5YR 4/4) 直径1mmの御池ボラを少量含む。しまりが弱く、粘性やや強い。
- VI 褐色 (7.5YR 4/6) 多量の御池ボラを含み、粘性が強い。

第4図 野添遺跡 1号竪穴住居跡実測図 (SAJ 1 : 1/40)

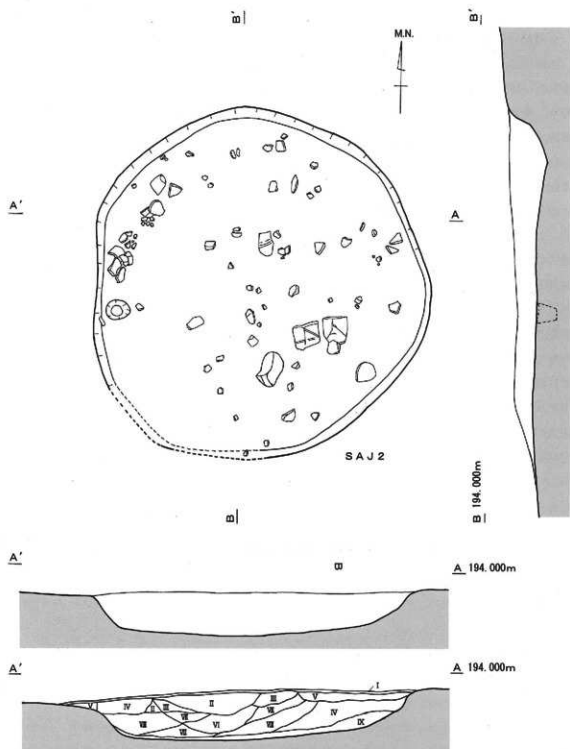
4本主柱のような対照的なものではなく、今ひとつ不確定要素を残す。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した。

出土遺物は第15図に示している。この住居に伴う遺物(35~43)は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、35~37は口縁部をやや肥厚させ、その部分に文様を施している深鉢である。35は口縁部肥厚部に2~3条の凹線文と上に1点、下に2~3点の凹点文を施している。内外面ともナデである。外面にはススが付着している。36は口縁部肥厚部にごく浅い1~2条の凹線文が巡る。内外面ともナデである。37は口縁部肥厚部に浅い2条の凹線文を巡らせている。外面はミガキ後ナデが施され、内面はナデが施されている。38は張りの弱い深鉢の胴部である。胴部屈曲部に2条の浅い沈線文を巡らせている。内外面ともナデである。39はやや胴部が張り、胴部屈曲部上部に2条の浅い沈線文を巡らせている。外面はミガキ後ナデ、ナデが施され、内面はナデが施されている。40は底部から外傾する胴部が直接立ち上がる深鉢である。外面は指ナデ後ナデ、ミガキが施され、内面はナデが施されている。41は擦痕を有する磨製石器の剥片である。使用石材はチャートである。42は敲石である。楕円形を呈し、一部敲打痕が観察される。使用石材は砂岩である。43は打製石斧である。使用石材は頁岩である。上部・下部が欠損しているため全容は不明である。

4号竪穴住居跡(SAJ4:第7図)

C区の中央やや北寄りの御池ボラ上面で、C8グリッドから検出された。円形プランの住居跡で、南北方向2.75m、東西方向2.65m、検出面からの深さは25~28cmを測る。埋土中には多くの炭化物が含まれていた。埋土は、御池ボラ粒を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。埋土中には全体的に炭化物が含まれるが、中央付近に集中している。しかし床面に硬化面や焼土等は確認できなかった。主柱穴は中央に1基を配し、径が25cm、床面からの深さは23cmである。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で多量に出土した。

出土遺物は第16図~第17図に示している。この住居に伴う遺物(44~52)は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、44~48は深鉢の口縁部である。44・45は口縁端部が肥厚する深鉢で、浅い2条の凹線文を施している。44は内外面とも丁寧なナデである。45は外面に横方向のナデ、内面にナデが施されている。46は口縁端部が肥厚する深鉢の口縁部で、やや丸みを帯びる。口縁部外面には風化が著しいが横2列の縦長の凹点文がみられ、その両側に2条の凹線文が施される。内外面ともナデである。47は口唇部に2条の沈線文を巡らせその間の工具による刻み目を施している。内外面とも横方向のナデである。48は口縁部をやや肥厚させ、その部分に2条の凹線文と凹点文と思われる1箇のくぼみが見られる。外面は横方向のナデ、内面はナデである。49・51は深鉢の胴部である。49は胴部がやや張り、胴部屈曲上部に凹線文を3条巡らせている。内外面ともミガキが施され、外面にはススが付着している。50は先端が欠損した肥厚口縁で、やや深めの2条の凹線文が巡らされている。内外面ともナデである。51は胴部が張らず口縁部へ直口する深鉢で、胴部上位に凹線文1条を巡らしている。外面はミガキ後ナデを施し、内面は粗いナデである。52は玉である。緑色結晶片岩で1点のみの出土である。若干、両端より中が膨らむ形状を呈している。両端より穿孔を施している。



【土層注記】 SAJ2

- I 黒褐色 (7.5YR3/1) 直径1mmの御池ボラを少量含む。しまりなく粘性なし。
 II 暗褐色 (7.5YR3/2) 直径1~3mmの御池ボラを多量に含む。しまりは強いが粘性なし。
 III 暗褐色 (7.5YR3/3) しまりが強く、粘性ややあり。
 IV 暗褐色 (7.5YR3/4) 直径1~5mmの御池ボラを多量に含む。しまり弱く、粘性なし。
 V 明褐色 (7.5YR5/8) 直径1mmの御池ボラを多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。
 VI 褐色 (7.5YR4/4) 直径1mmの御池ボラを少量含む。粘性ややあり。
 VII 明褐色 (7.5YR5/6) 直径1~3mmの御池ボラを少量含む。粘性ややあり。
 VIII ぶい褐色 (7.5YR5/4) 直径1mmの御池ボラを少量含む。
 IX 黒褐色 (7.5YR3/2) 直径1mmの御池ボラを多量に含む。粘性ややあり。

0 1m

第5図 野添遺跡 2号竪穴住居跡実測図 (SAJ2 : 1/30)

5号竪穴住居跡（SAJ5：第8図）

A区の南側壁沿中央の御池ボラ上面傾斜地で、D3グリットから検出された。住居南側の大部分は調査区外の畑下に延びているため、プランの約2分の1を検出した。平面プランは円形プランになるであろう。南北方向に半径1.8m、東西方向に直径4.7m、検出面からの深さは約87cmを測る。住居の埋土は、御池ボラの混入する褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。床面には僅かながら硬化面も確認できた。遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で床面西側に出土した。

出土遺物は第18図に示している。この住居に伴う遺物は（53～64）は主に下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、53は口縁部がやや内傾気味に緩やかに外反する深鉢で綾式相当の時期と思われる。口縁形態は波状口縁で、口唇部に斜方向の貝殻腹縁押し刻みを施し、口縁部外面には棒状工具による連続刺突文、3条の沈線文を施している。内外面ともナデである。54・55は鉢及び浅鉢の口縁部である。54は外傾しながら直口する口縁部で、外面はナデ、内面は横方向のミガキが施されている。55は胴部から口縁部が外反しながら延びる浅鉢で、口縁部内外に各1条の沈線を巡らせている。内外面とも横方向のミガキである。56・57は口縁部上位に凹線文を集約させ、胴部が張りず口縁が直口する深鉢の頸部で指宿式土器である。内外面ともナデを施している。58は深鉢の口縁部で市来式土器と思われる。外面は貝殻条痕後ナデ、貝殻腹縁による斜位の連続刺突文、その間に太めの沈線文が施され、内面は貝殻条痕文が施されている。59～63は深鉢の胴部である。59は胴部外面に斜・横方向の貝殻条痕後ナデを施し、1条の沈線文の端が見られる。一部ススが附着している。内面には横方向の貝殻条痕後ナデが施されている。60・61は指宿式土器の深鉢である。60は2条の平行沈線文を基本として文様を施す深鉢で、外面はナデ、棒状工具による入組み繋ぎ手文を連続させて文様を描き出している。内面はナデ、貝殻条痕文後ナデを施している。61は胴部が張り、口辺部が外反しながら立ち上がり口唇部が肥厚する深鉢で、外面はナデ、横方向の沈線文を施し、内面は不定方向のナデを施す。62・63は凹線文を施す深鉢で、外面はナデ、内面は貝殻条痕文後ナデを施している。64は甕の底部で丸みを帯びた大きな平底である。内面は剥離が著しいが外面はナデを施している。流れ込みの可能性がある。

6号竪穴住居跡（SAJ6：第8図）

A区の北側壁沿中央の御池ボラ上面傾斜地で、C2グリットから検出された。住居北側の大部分は調査区外の畑下に延びているため、プランの約2分の1を検出した。平面プランは円形プランになるであろう。南北方向に半径1m、東西方向に直径2.4m、検出面からの深さは約45cmを測る。住居の埋土は、御池ボラが混入する褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。主柱穴は床面中央西側に1基を配し、径が23cm、床面からの深さは10cmである。床面には、硬化面や焼土等は確認できなかつた。遺物は土器小片が少量床面に出土したが、小片で風化しているため器種については不明である。